
特別任務遂行隊 ～世界に誇れる死神部隊～

笹原 亮太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特別任務遂行隊 ～世界に誇れる死神部隊～

【Nコード】

N4520S

【作者名】

笹原 亮太

【あらすじ】

西暦2238年4月

少年が士官学校を卒業し、正式に配属された部隊は人型戦闘兵器ブラスターのパイロットたちで構成された「連合軍特別任務遂行隊」という部隊であった。

不良に天才、変態と皇女、そんな感じの隊長と、まともだと思われる部下との交流を描く！

たぶん多彩な敵もいます。

気軽に読める？ 適当小説です。

1 プロローグ(?)

西暦2300年9月2日

「おじいちゃんは何んのおしごとをしたの？」

幼稚園に通っているくらいの歳の女の子が聞いた。

「おじいちゃんはなあ、軍人だったんだ」

老人は答えた。

「ぐんじんってなに？」

軍人という職業は聞いたことが無いらしい。いまでは全く身近じゃないし、ケーキ屋さんとかお花屋さんという職業を夢としている女の子には関係ない。

「国の人たちを守る仕事だよ」

いい言い方をするとこうなる。

「じゃあおじいちゃんも人を守ったの？」

この質問に老人は動揺しつつ

「ああ、そうだよ」

と答えた。人を守ったといっても最初は自分の身を守るので精一杯だった。戦争中たくさんの仲間が命を落とした。当時敵だった国もそうであろう。

一番印象に残っている思い出がある。最初に配属された、特務第一小隊。名前こそエリートであるが実際にはそうでもなかった。正式名称は「特別任務遂行隊」、確かに最初から特別な任務の連続だった。

この部隊は盗難事件にはじまり決闘で終わった。

そのことを思い出してから孫との会話そっちのけで思い出を振り返ることに集中してしまっていた。

たぶん『ああ』とか『そうか』とか、そんな単語しか出てきていないだろう。

「愛里、そろそろ帰るわよ。おじいちゃんは休まなくちゃいけないの」

「そっか、うん。おじいちゃん またね」

ここは病院、老人は入院中で孫と娘がお見舞いに来ていたのだ。

愛里は笑顔で手を振った。この笑顔、だいぶ前に見た覚えがある。「気をつけてな」

あまり大声は出せない。場所が場所なのもあるが、出すことができないが正しいかもしれない。

愛里はまた祖父の話を聞くことができることを期待している、というより祖父が死ぬという考えがなかった。

「なんというか、疲れたな」

老人の名はカタセ ミツキ。最終階級は大佐、軍内部でその名を知らぬものはいないほどのエースパイロットであった。

2 部隊結成、何時間か前（前書き）

登場人物説明の回と思っていたきたきたいです。
まとめるつもりなんですけどね。

2 部隊結成、何時間か前

西暦2238年4月2日

彼はワシントン近郊の統一連合軍本部にいた。敵国と向かい合う最前線になぜ本部があるのかという疑問を持つ人間は少なくない。彼はその一人でもある。

「ミツキ少尉。もう全員会議室に集合してるそうです」

「すみません、ハル力曹長。曹長も集合に遅れさせてしまって」

彼の名はカタセ ミツキ 今年の三月に士官学校を出たばかりの新米パイロットだ。

アメリカやその同盟国をまとめてひとつの国とした「世界統一連合」ができてから半世紀経った今では珍しい純日本人である。

となりで時間等の確認や伝達を行っているのはハル力 ローレンツ曹長である。ミツキの2年先輩だ。彼女は父がドイツ系アメリカ人の子孫、母が日本人のいわゆる日系人だ。父親譲りかはわからないが、亜麻色の髪、顔も一般的な女性より上だろう。やや垂れ下がった目尻のせいか、おっとりしてそうに見えないこともない。生物学は不思議だ。最近こういう女性が平均なんじゃないだろうか。

そんなこんなで彼らは会議室を目指していた。そこで部隊の結成式（仮）を行う。

「なんで僕はここに配属なんですかね？」

兵員輸送機内で考えていたことを聞いてみる。

「士官学校首席ですし、パイロット技能も申し分ないですし、そういうあたりからではないでしょうか」

「そんな理由ですか？」

「それ以外にも何かあるとは思いますが……、あつそのエレベーターで地下6階ですね」

会話を続けながらもハル力は道案内を続けていた。

ここは統一連合軍本部、地表付近から特殊装甲だのなんなので何層もの防御層を構成していて、主要施設はほぼ地下にある。地上で世界最強の威力を誇った核兵器を爆発させても、地下の施設は全く被害を受けないらしい。そして必要最低限の出入り口しかない。カナダの英雄いわく敵に侵入されたら逃げづらい構造である。

「ここってほんとに複雑な構造だなあ。聞いた話よりすごい」

ミツキは独り言のつもりだったがハルカの返事が返ってきた。

「そうですね、私はここで何回も迷いましたから。今でもたまに迷いますし」

そんなことを平然と言うあたりも、この性格は親譲りなんじゃないかと思わせる。

ローレンツという名を聞くだけで『某有名デパート、レストラン、ホテルなどの従業員一同は震え上がるらしい』といううわさがある。なぜか、それはローレンツ一族のボス、つまりハルカの父のせいである。少し食器や商品の置き方、挨拶の仕方などに問題がある社員に引導を渡す。見つけ次第ではないが何度もやってたら社長直々にクビ宣言である。たまに完璧な変装で見回りをしているそうだ。二十面相もびつくりするぐらいらしい。

（誰が何を基準にそんなことをいうのだろうか）

それはともかくローレンツといえばアメリカを代表する大企業だ。その社長を父に持つハルカがオペレーターで留まっている。なぜだろうか。

社会的地位、いわゆる親の七光りが色濃く反映されてしまう組織、それがこの統一連合軍である。無能な上官には優秀な部下がいるため飾りになってることの方が多いが。

と、いろいろ考えているうちに「着きましたよ」と声をかけられた。道案内の声は聞こえていたがあまり気にしてなかったため覚えていない。

「じゃあ入りますか」

「そうですね。遅刻しちゃいましたし」

遅刻してきてドアを開ける。この瞬間にはなんともいえない感覚がある。不安とか罪の意識のようなそれらのせいで少しためらう時間があるものだが、

オペレーターはためらいなくドアを開けた。

「すみません遅れてしまつて……つてまだ始まつてない？」

ところどころ空席、私的な会話が飛び交っていた。学校で言う朝自習の時間のようなだった。ようするに何かは始まつてないらしい。

「あれ、ハルカさんどしたの？」

軍服を華麗に着崩している、というかだらしなない男が声をかけてきた。誰がどう見ても平凡という判断を下すだろう日本人な外見である。だらしなが、黒髪であることからかそこまでな恐怖心は抱かない。むしろ近づきやすい。顔もそこまで悪くはないだろうか。ミツキの推測的に身長170〜175cmぐらい、実際彼は174cmである。

「少佐、隊長は？　ほかのところのもないみたいだけど」

隊長といわれるとミツキはどうしても古風で威厳のある中年や頭脳明晰な青年を思い浮かべてしまう。そのような人はいないので確かに隊長はここにはいないのだろう、とミツキは納得できた。

しかしイメージ通りの隊長ではないことを結構前から祈っていたりしている。

「隊長たちならさつき少将に引つ張られていきましたけど、」

「えっ？本当ですか？」

少佐の返事に対して、ハルカはなぜか疑っているようだ。この少佐は冗談ばかり言ってる人なのだろうか。

それともなにか騙されたことがあったりしたのだろうか。

「本当ですよ、ねえ大尉」

本当のことだと信じてもらいたい人みたいに後ろに座っている茶

髪的女性に声をかけた。

「しょーさのいうとーり、たいちよーたちはしょーしょーに引つ張られていましたー」

聞いた人全てに真偽を問われるであろう口調、まさにばー読みである。なにかその大尉とこの少佐はけんかでもしたのだろうか。大尉とやらは不機嫌なようだった。

「本当に？」

再度ハルカによる確認がある。このコンビに騙されたことがあるのだろうか。

「うん。本当だよ。といか疑う必要ないっしょ」

ハルカに聞かれたらある程度ちゃんと答えるようだ。

「ど、どーせ俺なんか……」

少佐と呼ばれた男性はちっちゃくなっていた。彼の気持ちを色で表すならまさしく青である。青であり黒である。

「あれ？ハルカの後ろの子って例の新米君？」

大尉はそんなこと気にしていなかった。彼女には後ろで上官が青くなってようが小さくなってようが、あまり関係ない。

「そうだけど？」

「へえ、じゃあ自己紹介しとくね、私はオオツカ セツナ、階級は大尉だから君の上官。よろしくね士官学校首席の新米君」

さきほどまで不機嫌だったのに、急にアイドルとかがしてそうな笑顔で自己紹介を始める大尉の神経はよく分らない。

外見的にも『私軍人です！』って言われたら百人が百人『えっ！？』って思うだろう。

髪型はツインテールということといい気がするが、ツーサイドアップとかいうものだ。ミツキは妹に散々覚えさせられたため女性の髪型の名前はばっちりである。特務第四小隊隊長いわく髪型とこの笑顔により、より女の子らしさが感じられるそうだ。そのためたまされる男はかなりいるらしい。

どれだけの数が星になったのだろうか。

「あつ、自分はカタセ ミツキ少尉であります」
今日からここにという内容を言う前に大尉に遮られる。

「かたつくるしいテンプレート挨拶はつづけなくていいからさ。」
今回ここに配属となりました』とかさあ」

セツナ大尉は声色が急に低くした。

敬礼っぽいこともしているが、士官学校で角度を直され続けているミツキからみたら全く敬礼になってない。父や教官によると『汚い敬礼するぐらいならお辞儀しろ』らしい。これの詳しい意味は今年の2月に知ったばかりだ。

「あつ、はい。分かりました」

「あと面倒だから下の名前でするしく」

「えっ？あ、はい。じゃあ、セツナ大尉でよろしいでしょうか？」

「うんオツケー あ、面倒だと思ったらセツナ様でもいいよ！」

無料のスマイルを連発する大尉だが、たぶん「でもいい」ではなくそう呼ばれたいのだろう。笑顔で様付けで呼べというのもどうかと思う。

「それは……、考えて……おきます」

無理、というかいやだ。

「ミツキ少尉が困ってるでしょ、全くもう」

ハルカが止めに入る。この展開を進めると相手の、ミツキのプライドというものが引き裂かれることになるだろう。

「でもさあ、様つけられたほうが気持ちよくない？ハルカ」

優越感に浸るために階級を全面にだすとは……、少し恐ろしい世界のようなのだ。

「だからって、階級全面に出して強要するのはだめ」

ひどく母親じみた口調で言ったが否定しないあたりがハルカの親の血である。階級が無視されているあたり、友達同士なのだろう。このぐらいは察がついていた。

ミツキは輸送機の中で同じ部隊に配属される人の履歴書を見せて

もらった。そこまで詳しい個人情報的なことは書いてないがどこ出身、兵科、名前、年齢、階級くらいは書いてあった。

オペレーターのハルカ曹長とパイロットのセツナ大尉は十八歳、出身は同じニューヨークらしい。少し親近感を感じる。ミツキもニューヨークに近いところに住んでいたことがあるからだ。四年前まで住んでいた。あの日、ユーラシアに家を焼かれる日まで。

「い、一応俺も自己紹介を……」

青い人が立ち直った。といってもまだまだブルーな感じである。精神的ダメージというのは怖いものだ。軽い物理的ダメージのほうが楽なのかもしれない。机の端につかまりながら立っている。

「お、俺はシラカワ ハジメ、階級は少佐だ……。名前からも、分かるだろうが、日本人だ……」

さらに、いまにも死にそうな魚の目であった。

「だ、大丈夫ですか？」

さすがにこう言わなければならない気がした。会話で意識保たないと危なっかしい。

「な、なんとやさしい、新米なんだ……。あの、大尉とは、大違いだ……」

あの大尉。セツナ大尉のことだろうか。

「あ？なんだなんだその言い方は？あの大尉だあ？」

あの大尉だった。後ろで話を聞いていたようだ。怖い声が後ろから響く。そしてあの笑顔からは想像できない目つき。並みの不良の比じゃない。

「おいおい、上官だからってなあ、偉そうな口聞くんじゃねえぞ、これ から も」

「わ、分かって、ますよ……」

そしてまた青くなる。後で分かったことだが、大尉と少佐はここに来たときぶつかったらしい。少佐がドアを開けたらドアの向こう側に大尉がいたのだそうだ。しかし少佐は謝らなかつたため、大尉

はご不満だったようだ。

この程度でこうなるなら、戦場でうまく援護できなかったときはもっとすごいだろう。注意せねば。

「なんか苦勞されてるんですね、少佐」

ミツキは少佐に話しかけてみた。実は触れられたくない部分なのかもしれないが。

「奴の父親がアフリカ方面軍総司令官じゃなけりや、言い返せるのに……」

「えっ？そこですか？」

「くそっ！父さんに言いつけてやるなんていわれるとは……」

ひどく悔しそうだ。

「ということは隊長も大変なんでしょうね」

アフリカ方面総司令官の娘、そういう立場の奴は扱いにくい。この軍は派閥、親の社会的地位などが色濃く反映される世界でもある。

「隊長？ ああ、あいつは平気だろうな。というかあいつの方が恐ろしい」

「そ、そうなんですか？」

それは予想外だった。なぜならこの隊長は大佐、アフリカ方面総司令官といえは将官クラスの階級である。将官クラスにもなると、国防委員会に参加することもある。

国防委員会は議員や他の軍関係者もいる。そこでそういう方々と親密になっっているとすると、すると告げ口とかその先を考えてしまう。なんせ人事に関わることになるかもしれないからだ。

その結果普通は少佐のような状態に陥ってしまうことの方が多い。

ここの隊長はよほどそういうのに関心が無いのだろうか、しかし大佐クラスの軍人がそんなことも知らないわけが無い。それとも強気なのだろうか、やはり親譲りで。

ミツキはこう結論付けた。ここの隊長はあの企業の御曹司だ。つ

まりその関係から強気なだろう、と。するとまた疑問が浮かぶ。

何でここはそういう人が多いんだろうか。ローレンツ、あの大隊、そして隊長たち。もしかして……

（癒着ってやつか？）

2 部隊結成、何時間か前（後書き）

これからも読んでいただけるとうれしいです。

3 隊長って誰でもなれるの？

西暦2238年4月2日

ミツキの背後でドアの開く音がした。だれが入ってきたようだ。

足音は4人だ。が、話しているのは3人。この程度分析など朝飯前だ。

「しかし新米が二人も入るとはな。結構驚いてるんだけどね、私としては」

猫背の男性が言った。

「そこは同感だな、俺んどこにも一人いるぜ」

なんだか映画俳優かモデルやってそうな男性がそれに返事をする。

「珍しく意見が一致したなあ。二人ともいつも正反対なのに」

猫背と顔が整った男の口が同時に動いた。

「意見が一致したわけじゃないぞ」

「同感だって言ったただけだ」

こういうところは息ぴったりかもしれないが、犬猿の仲ともいわれる二人である。

「そついうとこだけは合うみたいだね、いつも」

猫背と顔が整った男の二人がにらみ合いはじめた。

「てめえワンテンポぐらい遅れて言えよ」

そう言い始めたのはのは特務第四小隊隊長、マサキ アルブル大佐である。彼はアルブル電器産業の社長を父に持つ。ハンサムな父と美人で有名な母の間に生まれたため、顔は整っておりとてもモテたようだ。能力的にも悪くない。が、行動のせいで人気が落ちているとの噂がある。

「てめえがそうしろよ、変質者が」

一部で噂となっている「最新のマサキ大佐のあだ名」を使うのは

特務隊および第一小隊隊長、カワムラ ヤマト大佐だ。彼は日本を代表する大企業の創業者一族に生まれたのだが兄とは違い、言われたことに従うような生活をつまらないし無駄だと考え、庶民的生活を選んだ変わり者、道を外れた不良として名をはせることとなった。祖父母によって育てられたわりには少々乱暴である。

軍人になったのは公的に人殺しができるから、という噂が広まっている人物だ。

両者はいまにも開戦しそうだった。喧嘩前に口数が減るのも二人の特徴である。

「おいおいおいおい、初日から隊長同士でけんかはどうかと思うぞ」仲介役を担うは、特務第二小隊隊長、ハギワラ ユウト大佐。彼はこの三人の中で唯一の大学出であるため、二人より実戦経験は少ない。が、少ないといっても、ハジメ少佐よりは多い。不良は、感覚で作戦立案、戦闘をするが、こちらは知識や情報を元に完璧に近い作戦を練って、実行するタイプである。さらに必要とあらば非情な命令も冷静にこなす恐ろしさも併せ持つ。

ユウト大佐の言葉に二人の口は同時に動き、

「確かにそうだな」

「それもそうだな」

この流れはいつまで続くのだろうか。

「ちょっとそこ邪魔なんだけど、どいてもらえる？」

ミツキは少佐を救助している最中、通路をふさいでいた。そんなときにまた後ろから声が聞こえたのだ。

振り返ると、背の低い少女がいた。確実にミツキをジャマなものとして捉えているであろう目は、合わせた者を恐怖で支配できるだろう。すさまじい眼力である。

彼女は第三特務小隊隊長、ソアラ ブランドナー少将。階級こそ高いが親の七光りの典型的パターンの代表格である。父親は国防省大臣、この特別任務遂行隊、通称「特務隊」の創設に深くかわっている人物だ。昔からいいところのお嬢様として育ってきた、というか育ちすぎたためかなり我がままで短期な性格の持ち主であるが、一回会ったぐらいで本性は現れない。自分の部下と親しい友、奴隷扱いの男性ぐらいにしか現さない。そのため「いいところの出身」に惹かれ、会ってさらに外見に惹かれる人が多い。

最近異常性癖の男性が多いようだ。公安省が躍起になるわけだ。彼女いわくツインテールは皇女のあかしだとかなんだとか。どう見たらそうなるのだろう。小学生に間違えられそうな身長の小将は、子供料金で電車に乗ってもばれないはずだ。

そして、最大の誤解原因、顔からはか弱そうな繊細さを感じさせる。日本人より白色の肌も相まって触れると壊れそうな感覚を受ける。なぜこんなに顔の整った人だらけなのか。

この説明にはやはり生物学、進化論等が当てはまるかもしれない。

「あ、はい。すみません」

「今度から気をつけなさいよ新米！」

なぜかキレられたミツキはそのまま突っ立っていた。歩き出した少将の足元からガツツという音が響いた。

「いつてえなあ、何すんだよ！」

少佐がものすごい速さで立ち直った。少将に足を踏みつけられたのだ。小柄な割りに力は強い。大佐たちも苦戦する、まあこれにはちよつとした事情があるのだが。顔立ちのか弱さは微塵にも感じられない。

「なに？その口の聞き方は！あんた私より偉いの？少佐ってのは少将より偉いの？」

面倒な質問攻撃。権力は扱い方を間違えると暴力になるんだって。ダメージから完全に立ち直ってない少佐としては判断を誤って後

悔しているのだろう。何も言い返せていなかった。

「このパターンはきつい気がするんですけど、だいじょうぶなんですかね、あれ」

ミツキはハルカに問いかける。

「たぶん大丈夫ですね。ソアラもその辺は分かっていると思いますし」

（その辺とはどのあたりだ？）

「そうそう。ソアラに偉そうな口叩くところという風になるのよー。」

ミツキ君も気をつけてね」

（何が「そうそう」なんだ？）

にしても上と下から挟まれる少佐があはれになってくる。少佐が謝罪することでこの件はひと段落したが、またこうならないとも限らない。

ミツキは戦時中の今、ここが戦場よりつらくなることを予想していた。

4 会議室での結成式

なぜいま戦争をしているのだろうか。

この疑問を解決するには4年ほど前の事件を思い出さねばならない。世界統一連合の空軍がユーラシア独立国家共同体の民間機を打ち落とした事件だ。

西暦2234年6月24日

この日のユーラシア側の新聞の朝刊にはこんな見出しがあった。

「統一連合、民間機を撃墜」 「届かなかった救難信号」

読んで字のごとく、民間機が撃墜されたのだ。

このころ、第3次世界大戦の被害からの復興を遂げた各国は、まだ緊張状態にあった。復興の最中でも戦闘再開の可能性はあったし、さらに復興後にも戦闘再開の可能性があるからだ。

2214年に始まった大戦は2219年に一旦停戦となった。双方甚大な被害を被ったこともあるが、目的は別にある。

最初は世界統一連合側だったイギリス、フランスはユーラシア同盟側に寝返った。その間に統一連合は世界トップクラスの技術力を誇る日本に侵攻、降伏に至らしめていたため戦時中に敵味方の入れ替えがあったことになる。その後ユーラシア同盟は、ユーラシア独立国家共同体となり、世界統一連合と東西でにらみ合っていた。

撃墜事件はそれからの緊張状態を破る出来事であった。ユーラシア側では戦闘再開の意見が根強く、そのときの議会議員選挙では再開を訴えた議員が多数当選したほどである。

当時の専門家はもし戦闘再開すれば、ユーラシアの勝利に終わるであろうと推測していた。ユーラシアは復興と同時に失った戦力の半数以上も再建してしまったのだ。さらにあちらにはフランスの得意なすぐれた迷彩技術がある。連合がユーラシアと対等に渡り合えたのはこの技術おかげとされている。

「それに対し我が連合は復興に手一杯で戦力の再建はあまり進んでいなかった」

軍の高官らしき男性が会議室の前のほうで話をしていた。

「長いのもうそろそろ、やめてもらえとうれしいです」

猫背の儀礼用の軍刀を腰につけている男は言った。はつきり言って、この手の話は長くなり退屈である。

「確かに長いわ。その話、聞いててなんかためになる話なの？」

ツインテールの皇女は男の発言に便乗した。

「ためになると言えばなるが……、これは大体みんな知ってるっての」

変質者呼ばわりされる奴は皇女、もとい少将の問いかけに答える。「じゃあ問題です。このとき民間機はなんという爆撃機と間違えられたのでしょうか？」

変質者に問いかけるのは猫背の男性である。

「は？そんな問題答えられるわけ無いだろ！」

変質者、マサキ大佐はそう叫ぶ。クイズ番組でいう細かい問題だ。「残念！正解は……」

猫背の男性、ヤマト大佐が答えを言おうとしたとき、横から声がした。

「あの、隊長？」

自信の無さで満ち溢れた声を出す少女がいた。彼女はササハラルリ准尉。

容姿的には、軍服を身にまとった、コスプレ少女とも言えるべきであろうか。固いイメージの軍人をやわらかいイメージに変えることも可能かもしれない。軍のイベント、特に特務隊が出るものには彼女を全面に推していったほうがいいだろう。

マサキ大佐のような異常性愛ロコンの心をくすぐる身長と体つきに「大人」という言葉は出て来そうにない。ずばりマサキ大佐が絶賛する容姿だ。

顔も女性というよりは少女の印象が強い。まだ16歳だからという

こともあるのだろう。現在も成人は18歳である。しかし精神年齢は旧世紀の同年代者より高いだろう。科学の進歩は教育論の構築にもつながっている。

パイロット技能はすばらしいもので、特に近接格闘の技術は実戦で十分生かせればエースになれる。しかしシミュレーターと実戦の違いは頭で分かっているけどもどろろという違いは実際は場数踏まないと理解できないものだ。ミツキと同じくここで教育されることが決定している。

「T、え？なにになに？どうした？ルリ准尉」

私は准尉にとって話かけにくい人だろう、と勝手な判断をしていたヤマト大佐は慌てて返事をする。

「Tuf-427だったかと」

全てのことにに関してルリは異常といえるくらいの記憶力を発揮する。

常に成績は学年トップで、知らない・できないことも得意といえるほどにまで昇華させる。たぶん彼女の知識・雑学に勝てる人物はこの隊にはいないだろう。

Tuf-427はユーラシア軍の大型戦略爆撃機である。23世紀初頭、核爆弾製造に使うウランなどはすでに枯渇している。そのため2218年3月6日、南アフリカ共和国に対する最後の核を使用した攻撃を最後にこの機体は実戦配備を終了し、武装・設備を解除した。その後、数機が民間に払い下げられている。

「正解です！ さあルリ准尉に拍手！」

唐突に始まったクイズは唐突に解答されて終わった。

「答えられる人だっているのだよ。バカめ」

仲の悪い原因はこういう点なのかもしれない。

「そんなことも知ってるのか。ということはああいう方向性も知ってるのかな？」

「あ、ああいう、方向性ってどういう方向ですか？ セツナ大尉」

「決まってるじゃない。あっちよあっち。ルリちゃん」

「そっぴいなながらセツナはルリに抱きつく。」

「わっ！ ちょっ、た、大尉！」

准尉は無事に過ごしていけるのだろうか。

「にしてもお前んとこの新米はけっこうかわいいなあ。」

変質者はセツナとルリのやり取りをただならぬ気迫と怪しい目つきで見ている。

「えっ？ うわっ、何？ お前そういうシユミもできたのか！ ミツキ少尉、気をつけるよあいつが」

「そっち系じゃない！！」

マサキ大佐はヤマト大佐を慌てて止める。このまま続くとうわさとして広まり、怪しいことになる。

実はマサキは一度そっち系の人に襲撃されたことがあったりする。

「なんだ違うのか、つまらないなあ はあー」

「がっかりだよ、とテーブルに手を着く。」

「あからさまにがっかりとするなあ！！」

「おっと、考えが行動に出てしまった。で、そうそう、嫌がっているのに言い寄るとかやめてくれよな。あれは女性の心を深く傷つける」

そして軍人として使えなくなる。

「なっ、なんだよいきなり話し戻しやがって。……ああ、そっぴや

あいつの妹だったな、お前んとこの新米は」

「ああ、あいつに妹を頼むって言われちまったんでね。軍に入ってくるとは思わなかったがよ。まあ結構前から知ってたりするんだが、肝心の相手はすっかり忘れてる」

ヤマト大佐は小学校のころからササハラ家と関わりがある。

ルリ准尉の兄、ルトの親友であった。彼らは生活保護を受けている母子家庭で、そのことでいじめられていたのを助けたことから付き合いが始まった。ルリは頭がよく、顔もよく、性格もよいし家事

全般もできる。彼女が人に話しかけられなかったのはこいじめられたういう経験から来ている。そのときに幼いころのルリと大佐は何度も会っているのが気づいていないようだった。

「しかしだいたい変わったな、俺は話しかけるのは難しいと思っていたのだが……」

「にしてもあの子結構かわいいなあ、なあ、うちの隊にまわしてくれよ」

そんな話はマサキには必要なかった。

「は？配属されて1日たってねえのにかえられるわけ無いだろうが、バカが！」

「頼む、じゃあ、何カ月後でもいいから、いつでも大歓迎だぜ！」
何かに触れる

大歓迎のポーズを取った。実際にルリ准尉にやったら壁に触れて過ごすことになる。

「大歓迎ってどういう意味だか。そんな何するか分かったもんじゃない変態にあいつの妹渡したら、あいつに呪い殺されるぜ。俺も」
ルトはかなりのシスコンであった。そのことは多分ルリ以上にヤマトは知っている。けんかしたとき、話を聞かなくても分かるほどとても静かだった。

「お兄ちゃんなんてだいつきらい！」

と、ルリに叫ばれたときの落ち込みよう。行動。言動。面白いにも程がある。が、その面白さも時と場合による。あいつが死ぬ直前に残した言葉は、「ルリにケーキを食べさせてやりたかった」だった。

最後の瞬間まで妹のことを考えていたんだろう。妹さんにどうぞと、ルリの誕生日に、ケーキを受け取ったときの喜びよう。多分、一般の人が高校に合格したとき以上だったはずだ。

いつか自分で稼いだ金で買ったケーキを腹いっぱい食べさせてやるのがあいつの夢だった。いまでもヤマトはつい思い出してしまう。「ではこうしよう。使い物にならなかったときはそっちにまわす、それでいいか？」

とても今思いついたとしか考えられない発言だがマサキには関係ない。

「もちろんいいとも。いやあ、ほんとどうもありがとう。ありがとう」

女性が絡むと犬猿の仲、ライバル意識など簡単に押さえ込める。

ヤマトの結ぶ約束は都合が悪くなったらなかったことにされるのだが。マサキは昔から楽に動かせる奴だ。

これからこまったらこの話を出して、救援要請すれば跳んでくるだろう。

まさしくウサギのように。

5 結成式は強制終了

全員私語解禁してしまっているが、実はまだ結成式（仮）は終わっていない。高官はあきれて帰ってしまった。しかし、承認の通達置いてあるので結成と言うことになるのだろう。

「今日は親睦を深めるために使うわけだろう？」

ヤマトはハルカに問いかける。

「一応そうなってますけど、……まああれも親睦を深めると言えば深めてるわけですし」

そっぴいながらハルカは向こう側を指差す。

「ちよつと待つてよ。ル〜リ〜」

あの大尉だ。あのままいくところという方向の人間と言うしかなくなるのだが。この人もだいぶ絵になる人物だ。

「こ、こないでくださいーい！」

ルリ准尉はあきらかに怪しい人に追いかけている。そしてあるところを中心にくるぐる回っていた。

「ちつ、さつきからちよこちよことまわり走り回りやがって。人が文句言わなけりやいつまでもグルグルぐるぐる。あー！イライラする！私はいつまでも静かにしてるわけじゃないんだから！！！」

独り言のつぶやきは怒鳴り声に変わる。准尉と大尉はソアラ少将のまわりをぐるぐる走り回っていたのだ。准尉的に近づきやすかったというもあるが、走り回られると少しいらする心理は分かんなくも無い。

「ここやっぱりにぎやかですね」

ハルカはヤマト大佐につぶやいた。少将は走り回るのに加わっていた。運動は得意なようだ。

変質者のマサキ大佐はそれを見てニヤニヤしている。

みていて楽しいのだろうか。それとも聞こえる声がいいのだろうか。

「あの大尉め、何度も何度も怒鳴りつけやがって。だいたいあいつは……」

ハジメ少佐は先ほどからずっとこのセリフを吐き続けていた。

「少佐、そう言ってるとまた怒鳴られるかと」

ミツキはがんばって違うセリフにしようと努力していた。

「なんでそんなに大尉がきらいなんだ？」

ふいに声をかけられた。人の気配はだいたい感じるミツキだがここまで近づいてきていて分からないなんて。

「た、隊長。こ、これからお世話になります、カタセ ミツキ少尉であります」

自己紹介がまだだったことに気がついたミツキは慌てて自己紹介をする。

「うむ。私が、この部隊の隊長、カワムラ ヤマト大佐である」
背筋を伸ばしてみたが長く続かない。すぐ猫背に戻ってしまう。

（カタセ……、そうかあの人の……）

伸ばすと183cmあるのだが、猫背とひざをいつでも少し折った状態なのでハジメ少佐と同じくらいの背に見える。

「あゝあ。無理だ無理無理。まあ硬いこと言わずに気楽にいこゝ」
あまりこだわらないのがヤマト大佐である。

「なぜってそりゃ、あれだよ。父親の権力だして脅しかけてくるしよ」

「それだけか？なら、まあかわいい後輩ってことにしておいてだな……」

「んなことできりゃ、こちとらなんの問題もねーよ！」

「いやゝ、ホンとかわいいですなあ グヘヘヘ」

いすの背もたれに身を隠すようにして准尉と大尉と少将の行動を見ていた。

「何をなさってるんでしょうか、マサキ大佐？」

後ろから冷たいハルカの声が突き刺さる。

「何してるってそりゃ、決まってるっしょ！えっ？あつ、こ、これはハルカ曹長、ご機嫌麗しゅう！」

ごまかすのが下手なのがマサキ大佐である。

「なにをなさってるんでしょうか？」

くそっ！効いてないじゃないか。

「何をつてそれは、その、ね、新しく入ってきた仲間を温かく見守ってだな、」

「どんな目的で近づこうと？」

こ、これもダメか、ダメなのか。

「目的とは、そんなつもりではなく、新しく入った仲間の名前と顔と行動のくせと、体の方を」

「もしよろしければ憲兵隊のほうに連絡いたしますが」

「すみませんでした！」

マサキは必死に土下座をした。ごまかしが効かないなら、謝っておけばすむだろうという発想。見苦しいも程がある。

「なあハルカ、私は格納庫に行ってくるんでなんかあったら格納庫な」

ヤマト大佐は鼻血を出しながら言った。

「はい、分かりましたって……、鼻、大丈夫ですか？」

「いや、ハジメとけんかしちゃってね。結構強くてまいったまいった」

「負けたのか？」

土下座しているマサキ大佐は土下座しながら聞いた。

「いや、私が勝ったっぽい」

少佐は倒れていた。周りで第二小隊の人々が介抱している。

「殴り合いだけは得意なようで」

マサキは少々あきれていた。

「だけってなんだよ。喧嘩とピッキングとクラッキングも得意だぞ」

「本職をお忘れのようですが……」

「そうそう、ブラスターの操縦もな！」

ブラスター、2234年12月8日に全世界にその存在が明らかとなった兵器だ。

元々は、川村建機が開発していた作業用機械で、大戦初期に14式搭乗型機械歩兵として旧日本国防軍が実戦投入していたものだ。

ブラスターはそれをより人間らしくし、武装の交換が簡単にできる人間らしい腕と手をつけたものだ。

世界初の実戦配備機は「ステインガー^{どくはうじょう}」という。敵の進行速度を遅くし、さらに戦力を蝕んでいく。そんな意味も込められている。

12月8日より前に投入されていたのだが、一番活躍した戦いがこの日であったことと、ユーラシア側がその脅威の性能に衝撃を受けたことからこう言われる。

ワシントンは2234年9月4日^{かいせんよくじつ}に占領され、連合軍の足並みが揃わない原因ともなった。

ヤマト大佐は奪還戦にステインガーを駆り参加していて、ユーラシア撤退までに停泊中の艦艇3隻大破と戦車32両撃破、基地施設多数の機能を奪うなど功績をあげた。現在でも「統一連合^{げきつれんごう}の死神」として知られている。

このころ大佐が機体の左肩につけていたマークは今、第一小隊の部隊章になっている。赤い星の後ろに海賊旗の骨ように死神のもつてそうな鎌とサーベルが交差しているものだ。これは大佐が、映画を見てから適当に書いたものである。

「統一連合の死神」のマークとしても両軍で有名だ。

6 期待と機体

「反応良くしてあるのコレ？ 変わんない気がするのだけでも」

ヤマト大佐は整備長に問いかける。

彼が今調整しているのは試作型ブラスター、「クリムゾンキラー」真紅の殺し屋

通称一号機。殺し屋の名にふさわしいのか分らないが直線主体のデザインで、人間で言う足の爪部分に鉤爪のようなものがある。腕はステインガーより若干長く、機体は前に常に構えた状態、猫背になっている。機体名同様、真紅で塗装されておりまさしく血の色となっている。胴体はこげ茶で、乾燥した血液のようだった。敵は恐怖を感じるであろう機体だ。

接近してからの格闘に重点を置く機体であり、「超音波振動ナイフ」4本「日本刀型分子振動ソード」2本、先端にナイフを装備した槍「ロングスピア」1本と小型マシンガンを装備している。

装甲は大佐の技量にまかせて薄くしてある。そのため防御力は低いがそのスピードは現主力ブラスター「ステインガー2」を凌駕する。ヤマト大佐が得意な戦法を専門とする機体である。

「0・2ほどあげてあると思いますが……」

「じゃあもう少しあげるか」

そういつてコンソールのタッチパネルを操作する。

「……あれっ？ 腕の速度変わって無いじゃん！」

「そちらのほうの設定は大佐に使ってもらってから判断した方が良いかと思います。」

「あ、じゃあ変えとく」

コンソール横からタッチスクリーン式キーボードを出す。通常のキーボードより高価だがキーボードを置くスペースの無いブラスターの調整用には丁度いい。クラッキング技術があるヤマト大佐はこ

ういう設定変更も軽くやっていた。

「そういや、うちの新米用の調整済んでる？」

タッチスクリーンのキーボードに触れながら問いかける。

「はい、一応シミュレーターのデータを反映させてあります」

整備長は答えた。この人は第一小隊の整備班の整備長なので、こういうこともやっている。

「データのにはミツキ少尉はエースパイロットだろう？」

「はい。全てのデータが標準以上、さすがは士官学校首席です。だからこそ大佐は引つ張って来られたのでしょうか？」

「ちゃんと教育すれば俺を超えそうだからな。手元においておこうかなど。でも他じゃ教育受けらん無いだろ。まあアメリカ人は日本人嫌いらしいからな。特に高官達はよ」

統一連合参加からまだ20年ほど。元敵国を信じろというのも無理な話だ、というのも分かる。

「だからこそ、この特務隊が？」

「そうさ、日本人である大臣が好きに動かせる日本人部隊、それがこの特別任務遂行隊なのさ」

日本に現在ある国防隊は日本独自に動かせるが、日本に駐留している統一連合軍を動かすには連合政府の国防省を通す必要がある。

国防省大臣が軍を動かすためには国防委員会を通さねばならない。国防委員会はアメリカ、カナダ出身が多く出席人数の6割を占めている部署だ。

今回作られた特務隊は国防大臣直属部隊として構築してある。システムの裏をかきまくるとこうなるようにしてあったのだ。

「これが私の機体ね！カラーリングも言ったとおりになってるじゃない！」

自分の乗る機体となる「スプリングアタッカー」通称三号機を見て少将は目を輝かせていた。

「はい、がんばって塗ったんですよ、午前中に仕上げておこうと思
いまして」

少将の言った「白にピンクのライン」が実現されている。第三小
隊の整備班が急遽塗装したのだ。元々機体の色はライトグリーンだ
った。曲線主体で、一号機とは全く違うシルエットだ。

「さすがは私の隊の整備班だわ！」

とてもご機嫌がいいのか、常に笑みを浮かべていた。乗り込んで
コックピット内のコンピュータを起動させるときも、中を見回して
いるときも。

「ところでこの機体スティングァーとどう違うの？」

肝心の情報が全く入っていなかった。

「は？あ、この機体の設計コンセプトは一撃離脱の強襲でして、ス
ピードで少将の三号機に勝てる機体はいませんね」

三号機は一号機のスピードをも上回るわけだ。

「そうなの？それはいいわね！ 最速の機体ってわけね」

最速で反応がよすぎるため扱いが難しく、ヤマト大佐もあまりう
まく扱えなかった（といっても一般のテストパイロットの比ではな
い）。なぜこれが少将に？という疑問、たぶん聞いた人全てに生ま
れる。

武装はライフルと日本刀型分子振動ソード、だけといういたってシ
ンプルなものだ。左腕には盾を持っている。

そして、新開発の戦闘補助システムも搭載されているが暴走の危
険性があるため2つのパスワードロックで制限されている。制限解
除の際はリミッターが勝手に解除され、戦闘中の走行用車輪の車軸
が融解する可能性がある。

ミツキ少尉は格納庫に降りてきていた。やることがないため自分
の機体の調整でもしようかな、とやってきたのだ。
「ほんと複雑だなここは」

独り言をつぶやいていたりする。

「第一小隊の機体は第3格納庫と第4格納庫？えーと、ここは……第6格納庫か」

ということとはもう少し歩くことになる。ここまで広いと方向が分からなくなる。地図を見ながら歩いても迷うほどだ。

顔を上げるとミツキの目に飛び込んでくるものがあつた。ステインガーとは全く違うシルエット。ごつごつとして、とても重そうだがよく見るとコックピットハッチの付近に人がいた。ハギワラ大佐だ。「これはハギワラ大佐の機体ですか？」

ミツキは大佐に話しかけてみた。

「ああ、君はヤマトのところの」

「カタセ ミツキ少尉であります」

「カタセ少尉か。で、質問に答えていなかったな。そう、これが私の機体だ」

ユウト大佐の機体、「スチールレイン」鋼鉄の雨 通称二号機。名称からも分かるように、砲撃戦に特化した機体だ。

背部にウエポンラックがあり、中・近距離戦用の「ライフル」、レールガン「電磁投射砲」と長距離砲撃用の「130mm滑腔砲」、パワーヒッター「試作型アトミニウム粒子砲」が実装されている。三号機などと同様に新型モーターが搭載されているため、「ステインガー2」と同じぐらいの速度は出る。バッテリーも大容量となっており、電磁投射砲の冷却しながらの使用でも「ステインガー2」と同様の稼働時間を確保している。

機体は青で塗装されており、搭乗者のハギワラ ユウト大佐の冷静さを表しているかのような冷たい印象を受ける。

「これが最新鋭のブラスターですか……」

事実上ハギワラ大佐の専用機。それも世界に一つだけ。量産型を与えられるのとはわけが違う。

「そう、これから血に染まるブラスターだよ」

そう言うと、ハギワラ大佐はコックピットに戻っていった。

最新鋭機はまだ実戦経験がない。これから各地でこの機体群が暴れまわってデータを取り、次期主力量産機の開発につなげる。そういう活躍が求められる機体たちだ。

「これから血に染まる、ね。」

ミツキは自分の手を見た。まだ人を殺したことが無い手だ。すべての軍人がそうだとは言わないが大佐達や少佐、大尉は人を殺したことがあるのだろう。

ブラスターは兵器だ。主に戦車やユーラシア軍に鹵獲された機体とそれをコピーして作られた機体と戦う。しかしそれには人が乗っている。自分と同じように、パイロットとして。

「俺の手も血で染まるってことか」

一人で悟りの境地でも開いた感覚だ。自分がしようとしていることが何なのか、それを認識するのは重要なことだ。しかしこの職はそれを考えすぎると、自分が殺される。

殺るか殺られるか。殺らないか、殺られるか。

ようはそういう世界だ。

ミツキは第一小隊パイロットとしての覚悟、と言っていた隊長を思い出す。

「こういうことか、それって。」

「統一連合の死神」の部隊。それだけで敵からの人気は高くなる。エースパイロットは他のパイロットより殺した敵の人数が多いわけだ。

殺された人間に、その人が死んで悲しむ人がいないなんてことは滅多まれに無い。戦友かもしれないし父親、息子、母親、娘かもしれない。恋人、友達だって悲しむ。そいつらが敵討ちに來た日にはそいつらも殺すことになる。また敵は増える。

そついう部隊に身を置くというのはそういうことだ。

ミツキは全く決心がつかなかった。この現実、そして……、

7 全ての始まり（前書き）

機体名称は思いっきり「ちゅうにびょう」とかいう部類に入りそうですが、つつこみは心の中で。

ダサイ名前だとかおもっても基本正式名称では呼ばないので。

表現が至らぬところだけです読んでいただけるとありがたいです。

7 全ての始まり

西暦2238年4月2日午後6時38分

ミツキ少尉は第1格納庫にいた。自機の調整と、機体に慣れるために。士官学校のシュミレーターで訓練を受けている。しかし、本物のステインガー2（実戦配備型）に乗るのは初めてだ。

コックピットのレイアウトはほぼ同じ。違うことと言ったら、ディスプレイにカメラの映像を写すかコンピューター出力の映像を写すか。実は実戦配備型は両方できたりするのだが。あとペダルや操作レバーの固さ。不用意に動かないようにシュミレーターより少し固くなっている。それこそ動かそうとして押さない限り動かない。一人乗りスペースに何人も乗ってだれかの全体重がかかったら動くだろうが。

ミツキが実戦配備型でシュミレーターを起動させようとしたときだった。

突然、格納庫内に轟音が響いた。雷が落ちたかのような音と寺の鐘のような余韻。何か鉄の固まり同士がぶつかり合う音。

「なんだ！何があった！」

ヤマト大佐の声が聞こえた。

まだ格納庫のクレーンや垂れ下がっているケーブルは揺れている。しかし地震ではないようだ。地震ならば揺れがきてから爆発なり何なりして音がするだろう。つまりこれは十中八九、爆発が原因である。

突然本部内の施設全てに警報がなり始めた。

第9格納庫にて火災発生。損害不明、消火班 エリアB6・H9に急行せよ

「なんだと、事故か？」

まわりがざわざわとしている。

「大佐！何があつたんで？」

整備班の一人が問いかける。

「分からん！指揮本部に行つて聞いてくる。最悪の事態を考えて、一号機の出撃準備をさせておいてくれ。いやな予感しかないんでね」

そついうと大佐は走り始めた。

あの大佐が走るといふのは滅多まれにない。彼が走るときは、戦闘直前と、危険を感じたとき、トイレに間に合わなさそうなときである。

「大佐が走つただと！？全員、直ちに作業にかかれ！一号機出撃準備だ！」

整備長が叫ぶ。大佐の機体の整備を任されてから幾度となく行動を見てきたためどういふことか判断がすぐできる。

「はっ！」

「お、俺はどうすりやいいんだ？」

ミツキは自分に問いかける。まずは事実確認をしたほうがいい気がする。しかし大佐が出撃するかもしれないのに自分は出ないというのも……。

「いや、今の俺が出ても大佐の足を引つ張るだけか」

決心がつかないままのミツキは一人つぶやく。軍人らしからぬ選択だが、新米のミツキが、それも人を殺す行為という風に戦争を考えている奴がでも確かに大佐の足を引つ張るだけだ。

それに新型にステインガー2で勝てるわけがないと思つた。ステインガーの強化型に過ぎないステインガー2は駆動系や被弾しやすい箇所の装甲を実戦を基に強化しただけだ。それに対し新型は、最近実用化にいたつたアトミニウム粒子コーティング技術により装甲の耐久性は二倍ほど。

更なる駆動系の強化と、新型モーター、新型バッテリーを搭載し、

武装もより強力となっている。旧式に劣る新型を作るバカなどいない。何から何まで最新技術の新型と、まともに戦ったらどうなるか。機体の技術だけではどうにもならない点を除けば新型の勝利は確実である。自分からの攻撃は全て弾かれる。相手からの攻撃は一撃でステインガー2を破壊できる威力を持っている。追いかけても差は開くばかり。逃げようとしても逃げ切れない。

「どうなってるんだ！状況は！」

走ってきた割に息は切れていなかった。普段動かない分、鍛えていたりするのだろうか。

ハルカは答えた。

「た、大佐、それが第9格納庫から、ブラスターが奪取されたと報告が……」

「やはり、そうか！ ならば私が一号機で出る。オペレーションよろしく！」

そう言うともた走って指揮本部を出て行く。

「待ってください！！一号機はまだ慣らし運転もしてないんですよ！？」

ハルカは後ろから叫ぶ。遠ざかっていく大佐の背中に。

「大丈夫だ！心配するな！慣らしついでに取り返す！！」

彼の言葉には揺るぎがない。心底そういう自信があるのだろう。

そしていつもどおりの猫背だったが、大佐にいつも取り巻く適当という言葉はいまの彼に適切ではなかった。

「どうなっているの！！指揮本部に確認とつて！！」

第3格納庫では少将が指示を飛ばしていた。

「新型が奪取されたと報告が、」

整備班の一人がブラスターの足元から声をかける。

「何ですって！？新型が？」

少将はその新型がどんな機体なのかは知らない、しかし自軍の機体が奪われたならば……。

本部から、各部隊へ。第9格納庫より新型ブラスターが奪取された。奪取された機体は現在エリアB6-C3へと移動している。総員戦闘配置、新型の足をとめる

基地内に指示の放送が響く。

「なんだと、新型が？」

「いったいどこの誰に！」

そんなことを言いながら整備班や戦闘部隊の動きが激しくなった。

目には目を、歯には歯を、ならばブラスターにはブラスターを。

これが連合軍の戦闘における鉄則である。ブラスターの正面装甲はとても頑丈にできている。並みの火力では穴は開かない。それこそ戦車砲を至近距離、ゼロ距離で発射しない限りは。そんな砲弾を食らうほどのバカは連合軍のパイロットにはいない。ましてや動いているブラスターに戦車がついていくことはできない。カメがウサギに追いつけないのと同じように。

「大佐、慣らし運転してないのであの設定でどう動くかは知りませんよ！」

整備長がヤマト大佐に声をかける。慣らしは明日やろうと思っていたところにこの騒ぎ。動かしている暇などない。設定を設定のままだに動かすシミュレーター機能と実際の駆動は動かして誤差を修正していく物だ。どんなものにも個体差はある。

戦時中に明日やるといふ判断も誤っていたのだろう。適當すぎたが故の誤算だった。

「分かっている。心配するな、私を誰だと思ってる」

そついうとコックピットの入った。よほど自信があるのだろう。

その自信がただの自意識過剰ではないことを祈る。スコアは自意識過剰ではないことを証明しているが。一応安全のためシートベルトとヘルメットをつける。

大佐、一号機、聞こえますか？

起動と同時にハルカからの通信が入る。

ヤマトはコンソールの通信スイッチをオンにした。オンにしたと同時にディスプレイに小さなウィンドウが現れてハルカの顔が映る。「聞こえてる。大丈夫だ。敵はどこにいる？」

現在エリアB6-C3、カタパルト、ロック解除されていきます！

「じゃあもう奴は地上に出るか。よし、一号機はエリアB6-C1カタパルトを使用し地上に出るぞ」

そついうと操縦レバーを押していく。一号機「クリムゾンキラー」はその二本の足で歩きはじめた。一步一步確実に、歩みを進めていく。

その動きに俊敏さは微塵も感じられないが、鋼鉄の巨人が歩く様子はそのデザインも相まって恐怖を感じる。

了解。エリアB6-H1、R1からC1までの作業班は直ちに退避。一号機はC1カタパルトを使う。

ハルカも手際よく、各部署へ一号機出撃を通達していた。

「5号機と戦うことになるとはな。予想外だ」

大佐は機体の中で武者震いしていた。

命令は撃墜ではなく捕獲と言うことになってます。被害はできるだけ抑えてください

「へーい。始末書はもうごめんだからんな」
書いた始末書の枚数も「統一連合の死神」クラスである。

「新型が奪取されるなんて……」

「じゃあ私はルリの何かを奪おうかな」

「そ、そういうつなげ方はどうかと思います」

ルリ准尉はだいぶ大尉になれていた。大尉の方も准尉の扱いがうまくなってきた。

頭の回転も早いようだ。

セツナは基本的に人の反応を楽しんでいる。ならば平凡で落ち着いた反応をすれば興味は薄れていくだろう。つまらない反応は期待していないのだから。

ルリたちの後ろでドアが開いた。

「あれっ？ミツキ君、どこ行ってたの？」

「少し格納庫の方へ行ったらこの騒ぎですよ、セツナ大尉」

ミツキは地下9階のミーティングルームに来ていた。指揮本部はさらに下に行って地下12階にある。ここには大きなスクリーンがあり、作戦の説明などに使われる地図や詳細な資料が映し出される。端末で基地外の監視カメラの映像を見ることができるようになっているため、今回の戦闘を見ることができるようなのだ。

大尉たちが集まっているのはそのためだ。

「そゆこと！なるほどなるほど」

ただそれだけのことをセツナ大尉は大げさに反応する。

「そんなに感心するような内容でしたか？」

律儀に大尉の反応に対応するのは准尉くらいだろう。

「ふっふっふ。私はいつでも感心しちゃうんだよ、ルリちゃん」

「

准尉は大尉のお気に入りだよ。いつも何かと抱きつく。会ってから9時間しかたっていない人たちということを忘れてしまうほどだ。ルリ准尉は珍しく人としゃべりまくっていた。たまに話すところしか見ていなかったミツキはすこし驚いていた。

（こんな風に笑うんだ、ササハラ准尉って）

マサキ大佐がかわいって言うのもうなづけるかもしれない。しかしミツキが恋愛感情を抱くには外見が幼すぎる。

それ以上に大尉のコミュニケーション能力にも驚く。大尉は18、

准尉は16歳、セツナ大尉はルリ准尉の先輩ということになる。二人のやり取りからはその「先輩と後輩^{部下}」という壁を全く感じさせない。

「うわあ、ちよっと、もうやめてくださいってば。ほら！カタセ少尉が見てますって！」

ルリは頬を赤らめながら、大尉に言う。

「じゃあ、ミツキ君を視覚的に喜ばせようか？」

准尉の後ろから抱きついてしている大尉は意地悪そうにささやく。そして准尉の軍服のボタンに手をかける。

あわててミツキは後ろを向いた。とても驚いたような困ったような顔の准尉のなみだ目と目が合って見続けられる男はいない。自分にも心に傷を負う。こんなときまで、迷惑な大尉だ。

しかし戦場で他人の心を明るくできれば、それは貴重な存在だ。やられているルリ准尉としては危機だが。いつか本当に服を脱がされるかもしれない。あの大尉はやりかねない。

しかし仲良し姉妹のような大尉と准尉がじゃれあっているとなぜか気が和む。その場を和ませる行動が取れる。ある種セツナ大尉が生まれ持った能力なのだろうか。

カタパルト、射出準備開始

ハルカの指示とともに射出口のハッチが次々と開いていく。

大佐、タイミングはどうします？

「いつ動くのかわかんないのは怖いからこっちに移してくれよ。」

じゃあ私がやりますね。

「なんでそうなの？」

リニアカタパルト、起動。では大佐、行つてらっしゃい！

ポチッ。ガチャリと物理ロック解除音。

「えっ？いきなしかギヤアア！」

カタパルトにのつた一号機は勢いよく上昇して行った。

大佐はこの瞬間が一番嫌いだ。体には自分の体重を超える重力、つまり簡単に言つと「G」がかかっている。何度やってもつらいものだ。

すでに五号機は地上にいるらしい。

7 全ての始まり（後書き）

最後まで読んでいただきまして、ありがとうございます。

変な表現を多用しています。

申し訳ございません。

8 殺し屋VS殺戮者

五号機、「ホワイトマルダー」と呼ばれる機体。白き殺戮者

三号機と同等の速度を誇る、強襲型ブラスター。武装は「分子振動ソード」と「ライフル型電磁投射砲」レールガンただだがかなり脅威的な機体である。右手に握り締められた電磁投射砲は、通常のライフルより、コイルガン初速・威力ともに上回っている。

しかし弱点があるとすれば、電磁投射砲は連射できない。一度コンデンサに電力を送る必要があるからだ。最速で1分、フルチャージは5分かかる。

「これが連合の新型か。ステインガーとは大違いだ」

五号機のパイロットはそう言うのと連合軍の制服を脱ぎ捨てた。現れたのは深緑色の制服。

世界統一連合と対立するもうひとつの超大国、ユーラシア独立国家共同体。

この独立したいんだか、まとまりたいんだかよく分からない勢力の軍、ユーラシア義勇軍の制服だ。さらに肩にはきらびやかな装飾が施されている。儀礼用のようだ。しかし儀礼用でも明らかに一般兵の制服ではなかった。

五号機を奪取したパイロットはコンソールに手を伸ばし、無線の周波数を合わせる。

「隊長、連合の機体を奪取しました」

基地を出てから通信しろと言っただろう！アリス少尉！

「あ、も、申し訳ありません」

少々うつかりしているパイロットのようだ。しかし大佐でも苦勞した機体を操っていると言うことは相当な技量のパイロットということになる。完璧でもないようだが。

「目標視認！これより攻撃を開始する！」

ヤマト大佐がレバーを押しきった。

加速は順調、今のところは問題はありませんが無理はしないでください

ハルカはオペレーターとして助言するとともに一号機のデータを採っている。視認で来ても格闘型がマシンガン使って突撃っていうのは性に合わない。

「格闘型で飛び道具使って印象悪いよね！」

印象で戦闘スタイルを決めないでください

戦艦に脅威を感じないのは航空機の発達によるところが大きい。しかし全長1km以上の戦艦があったら並の人間は脅威に感じるのではないだろうか。印象も時には役に立つ。

人と関わりたくない人なら、不良じみた格好をすれば人は近寄りがたくなる。かわりに近寄ってきてもらいたくない人が寄ってくるかもしれないが。

接近していくとなにやら光るところがある。雨の屋外を走る鉄道路線でいう時々散る火花のようにすぐに消える光。

「あ？なんかあいつ戦闘してんぞ。他に出撃したのはどののこいつだ？」

レールガンで弾を発射した際の閃光が暗闇の中、よく見える。コイルガンの閃光も少量であるが見えるため戦っていると分かる。

確認とってみます

ハルカは他の部隊のオペレーターへの聞き込みを開始していた。

「何だこいつ、早い……当たらない！くそっ！」

ステインガー2のパイロットは叫んでいた。操縦桿を押しきつても、全く追いつけない。ライフルを連射しても全てかわされる。それもそのはず。

相手はステインガーの2倍ほどのスピードで動ける。軽量化と高

出力モーターの搭載は対ブラスター戦に絶大な効果を発揮していた。瞬発力、反応性も新型内でもトップクラス。

「た、隊長、全く弾が当たりません！」

気弱そうなパイロットが無線で叫ぶ。

「くそっ！ これでも食らえ！！」

一機が「105mm無反動砲」を放つ。直撃すればユーラシアの戦車を一撃で破壊できるものだ。弾は五号機を追う。五号機は回避行動をとらなかった。

直撃、五号機を爆煙が覆う。あたりに黒い煙の幕が現れ広がり始める。

「やった！当たった！」

撃ったパイロットは喜んでいる。あんな早い機体には普通当てられないだろう。

「よくやった、接近して捕獲するぞ」

そう言うのと腰部分にマウントされている分子振動ソードバイブレーションを抜く。

「了解！」

「了解」

部下も小隊長に倣いソードを抜き接近し始める。

陸軍第一師団第一機械化大隊第一中隊所属の第十二機械歩兵小隊です

「そうか。 お？あいつらバズーカ当ててやがるぜ。バズーカなんて何発当てても効果ねえのによ」

新型ブラスターたちの装甲材質は同じだ。一号機並みに薄くしてもステインガー並みの強度をもつ。

そして五号機は一号機より厚い装甲を持っている。

「でもまあ五号機相手によく当てたなっ！ 何近づいてやがる！！危険だ、離れろ！」

大佐は慌てて回線をあわせて叫ぶ。あろうことか、第12機械歩兵小隊は五号機に接近し始めていた。

「何を言ってる。これで任務たっせ、なに！？バカな！？直撃のはずなのに、な……………」

五号機のレールガンが火花を散らした。煙の中から光の槍が飛び出す。五号機は消えゆく爆煙のなかからゆっくりと姿を現した。

一番接近していた小隊長機は火を噴出し四散した。落とされたライフルを五号機がうまくキャッチする。彼らの機体から五号機まで少し距離があった。この距離ならスティングーはコイルガンライフルでも貫通しない。一点に集中して当てれば穴が開くだろうが。

それでも一発二発で穴が開くような装甲ではない。小隊長と呼ばれるパイロットはそう考えていたのだろう。

しかし五号機のライフルは電磁投射砲である。戦車砲をも弾く装甲はレールガンに貫かれた。アトミニウム加工というのは強度を上げるのと、電磁投射砲の威力をあげるのにも役に立つ。

アトミニウム、2190年代に新型核兵器で吹き飛んだ南極大陸で発見された新物質。

ウランなどの枯渇間際に見つかった、連合側のエネルギーの救世主である。磁力を帯びていて回転させると発電機としても使える物質だ。一度回転させると反応を起こし反応し尽すまでまわり続ける。反応をすることができる粒子、この粒子を使用したものがコーティングであり、試作機の装甲はコーティングがなされている。南極でしか採掘できず、ユーラシアはこの物質を持っていない。

「この新型、耐久力が違いすぎる。こんな機体を作るなんて、連合め……………」

ユーラシア義勇軍特殊作戦実行部隊、「フェルディナント隊」のアリス少尉は言う。

通常の戦闘で無反動砲を当てられた機体は大抵、吹き飛んで間接部分が破損し動けなくなる。もしくは、一撃で装甲が吹き飛ばされ内部温度が不安定になったバッテリーが爆発する。のどちらかとなる。

どちらにしろ無傷同様な損傷ではない。しかしこの機体は難なく動いているし、画面表示にも異常を示す表示はなかった。全くの無傷。

「小隊長！！」

「くそオ！」

無反動砲を投げ捨て、背部からライフルを取り出す。人間で言うアサルトライフルという部類の銃によく似た形をしたコイルガンだ。ステインガー2はライフルを連射、というより乱射した。しかし攻撃は全て白い装甲に弾かれる。

そして五号機は消えた。物理的にはなくパイロットの視界から五号機は真っ白な機体だ。しかし闇にまぎれたかのように視界から消えては現れることを繰り返しながら移動していた。そして闇からはじき出されたかのように姿を現す。

敵の命を確実に奪い取るために。

「こっ、これが、五号機……」

左手の分子振動ソードが振り下ろされ、命のともし火は掻き消される。移動する様子は殺戮者というより暗殺者の方が正しいだろう。ただ対象が「要人」ではなく「連合兵」となったに過ぎない。

「近づくなっ！五号機はお前じゃ止められねーよ！」

ヤマト大佐は無線で撤退を呼びかける。五号機とまともに戦ったステインガー2に勝ち目はない。スペックとパイロット技能が違いすぎる。五号機は並みのパイロットが操れるものではない。

しかし小隊長と中尉が……

「お前がすべきことは今この場から去ることだな。小隊長でもかな

わなない奴ってことさ。あれは」

この言葉を聴き機械歩兵小隊の一人は撤退していく。はつきり言
って全く説得力のない言葉なのだが、大佐が言くと正しいことのよ
うな印象を受ける。印象を与えるように喋っている。

にしても撤退する姿からも分かるようになんとも頼りない小隊だ。
「正直言つて邪魔でしかないんだよね」。少尉や准尉より使えね
ぜ、アイツ」

そっこののは言っちゃいけないことかと……

「そうか？ まあ、いいじゃん」

五号機に接近していく。五号機の方もこちらに気づいたようだ。
右手のレールガンを構える。

一号機は右手で背部よりナイフを取り出した。

「間合い詰めりゃこっちが有利なんだぜ！」

一号機のひざを曲げて思いっきり飛んだ。

「何？飛んだ！？上か！」

真紅の機体が飛び掛ってきていた。レールガンの照準を合わせる
のには時間が無さ過ぎる。

「そーら！切られな！！」

ヤマトは操縦桿のボタンを押した。ほぼ同時に一号機は上空から
ナイフを一気に振り下ろす。それに反応した五号機はソードでナイ
フを受け止めた。

振動する刃と刃がぶつかり合い火花を散らす。鏑迫り合いのよう
にナイフとソードを押し付けあう。すでに一号機も地に足が着いて
いた。

「やるな、さすが五号機を奪取しただけのことはある。しかしこの
ナイフはなあ、こんなこともできるのだよ！」

コンソールのスイッチを最大側にスライドさせた。それと同時に
ナイフとソードの接点から白煙が立ち上る。

五号機でもそれを確認していた。ソードはどんどんナイフに侵食
されていく。

「何？白煙……これは……、そうか！」

機体はようやく危険を感知したようだ。武器損傷の警告表示がでて電子音になる。

ソードの半分までナイフが進んだところで、操縦桿を後ろに引いて五号機は一号機との距離をとった。

「あのナイフ、振動数を変えられるのか！？」

戦闘中に振動数を変える。単純なことだが、あの状況で変えるなど想定外だ。機種を問わず、ソードに振動数を変える機構は存在しない。

できるだけパイロットの操作ミスが起こらないように計器やスイッチ類は必要最低限、必要のないギミックは排除されている。ナイフの振動数が変わったところで、一般のパイロットが切りかかるにはリーチが短いし扱いづらい。ソードの方が一般的に扱いやすいだろう。

それに、ブラスター同士で剣の刃と刃を交えるのは相当な技術を要する。リーチの短いナイフでソードを受け止めるなど奇跡に近い芸当ともいえるほど。その逆もその部類の芸当となる。

ヤマトは距離をとる五号機に向けて、一号機を加速させて再接近をかける。

「ナイフ……、格闘戦型か、ならばコイツで！」
レールガン

右手にレールガン、左手にソードを構えさらに距離を離すために後方に移動を開始した。

「おっと、飛び道具はフェアじゃないぜ！」

一号機のスピードも負けず劣らず。五号機は最高速度まで加速していないのだろう。後退しながら再びレールガンが火花を散らした。射出された弾丸は一号機を大きく外れ後ろの倉庫らしき建物を吹き飛ばす。ユーラシア侵攻の際、爆撃を受けても残っていた建物だ。

そして五号機はレールガンを背部ウエポンラックにマウントする。

「自分の位置と相手の動き、正確に把握しとかねえと当てらんねえんだよ！よく勉強して出直して来い！！」

再びひざを折り曲げ、戻した時のパワーを使って飛んだ。やはり右手にはナイフが握られている。

「同じ手を二度も受けるか！」

五号機は左手のソードを腰にマウントしその左手でライフルを取り出す。先ほどブラスターを一機倒したときに奪ったものだ。レイルガンより遥かに使い慣れている分、照準も瞬時に合わせられる。

「拾っていたのか！」

それに気づくも、ときすでに遅し。足を器用に動かして思いっきり飛ぶのは人間がジャンプするようなものだ。ブラスターに飛行能力はない。空中での制御装置などついていない。

移動不可能。まさに的だった。

五号機の持つライフルが火を噴く。コイルガンの動作を補い、少量の火薬を使用していることから生じる光だ。

発射された弾丸は、一号機のコックピットハッチに襲いかかる。

「くそっ！」

警告が表示され警告音が、鈍い金属音とともに鳴り響く。

大佐！

ハルカの通信が入るがそんなものを気にしてる場合ではなかった。着地後も執拗にコックピットが狙われる。一旦距離を離すしかない状況だ。ヤマトは操縦桿を引いて後退する。

「あーびつくりした。隊長がやられるかと思った」

セツナ大尉は安堵した。どうやら映像的に隊長は無事だ。

「確かに隊長が初日にやられてたらシャレになんねえな」

少佐が反応する。

「てめえにや言つてねえ！」

少佐の腹に蹴りが入る。

「セツナ大尉！そういうのはあんまりだと思えます」

少佐の待遇を見かねた准尉が進言する。

「そついうのは、世渡りの下手な優等生が言うことだよ？お分かりで？」

大尉はこうやって生きてきた。生きてこれたのが奇跡なのかもしれない。

「ここは学校か何か？」

ミツキは部屋の片隅でつぶやく。ミツキの独り言を聞いたものはいなかった。「戦闘中に不謹慎だ」といわれても仕方ない行動の連続だったが、幸いここには第一小隊パイロットしかいなかった。

大佐、三号機が出ました

後退して五号機と距離をとった一号機に通信が入る。

「何！？少将が！？なぜ出した！出させるなといっただろうが！」

無線越しでハル力が驚いてビクツとしていた。大佐が怒鳴ることは滅多にない。あるとすれば、戦闘中部下が危険なとき、けんかなどでとても腹が立ったとき、人がたくさんいて道をふさぐ連中がいるときぐらいだ。これらは滅多にないから怒鳴ることも滅多にないのだ。

しかし怒ったときは女性だろうが、子供だろうが、老人だろうが、お巡りさんだろうが、マフィアのボスだろうが容赦なく怒鳴りつける。

少将は親の権力が背景にある人物の代名詞的存在だ。確かに人の上に立つ者としての素質は群を抜いている。しかし群を抜いているのはリーダーシップのみ。

ブラスターの操縦に関して、もしかしたら部隊内で一番下手かもしれない。なぜそんな人にあの機体を任せたのだろうか。軍高官の、というより本部の意向を恨む。

三号機はカタパルトで地上に送り出されたところだった。

「また新型か、……データはコイツに入っていないか」

ユーラシアのパイロットはコンピュータを睨んだ。どう見ても機体情報は無く、正体不明機アンノウンとしか表示されない。

「おゝ、速いじゃん！さすが私の機体ね」

第三小隊整備班は撃墜されるのが最速でないことを心から願っていた。

「突っ走ってくる。よほど自信のある、エースパイロット……」

五号機パイロットは三号機を見て分析を開始する。彼女のパイロットとしての経験からして、突っ走ってくるのはバカかエースのどちらかだ。バカならあっさりと切れる。しかし、敵は新型。

新型がバカに操縦されるわけがない。答えは一瞬で出る。奴はエースパイロットとして見ておくべきだ。

エースの名からかけ離れている少将は自分が超過大評価されていることを知らない。過大を超えた過大なのだ。操縦桿を押し切っているため、速度は順調に上がっていつている。すでにステインガーの最高速度を突破していた。

「剣使うには、どうするんだっけ？ えゝっと、こうか！」

右手に握っている操縦桿の3つ並んでいるうちの真ん中のボタンを押した。左手に持ったライフルが火を噴く。少将は左利きだからという理由でライフルのもち手を変更したが、操作設定は右利き用のままだった。

「ありやつ！違った、じゃあこれかな？」

左の操縦桿3つボタンがならぶうちが一番上のボタンを押す。三号機の右腕が剣を引き抜く。分子振動ソードバイブレーションは振動を開始する。

「ちっ、バカがでしゃばりやがって。まあ好都合だ、不意打ちかけるぜ！」

ヤマトは操縦桿を押して機体を加速させていく。五号機は出現した三号機に気を取られているようだ。

少将も思ったより戦いに慣れているのか、牽制攻撃としてライフルを撃った。そして剣も抜いた。

接近してくる意思の表れ。行動を露見させておいて敵にプレッシャーをかける。

「やりやあいつもできるってことか」

盛大に勘違いしまくったヤマトが操る一号機は三号機とは反対側から静かに移動する。五号機は本部から依頼を受けた獲物だ。命令
ターゲット

「あの機体、早い……、だが……」

五号機はライフルを構えた。正面には三号機がいる。

「ロックされた！？目の前……えーっとこういうときは、こうかな！」

操縦桿左の真ん中のボタンを押しながら操縦桿を前に押し込む。五号機のライフルが火を噴くと同時に、三号機はソードをコックピット前で構えた。

ライフルから飛び出した弾は、ソードによって弾かれる。

「ソアラすごい！あんなこともできるんだ〜！」

セツナ大尉は親友の戦い方をみてとてもうれしそうだった。弾をソードで弾く、伝説に燃える新米がやるうとしなくはない行動だが、成功した例はかなり少ない。ちなみにヤマト大佐が初の成功者らしい。

「少将もすごいんですね」

ルリ准尉は率直な感想を述べた。ああ来るかと思っただけで来た、的な意味で。

「ソアラの認識が結構変わったでしょ」

「そうですね、結構変わりました」

セツナ大尉の珍しい反応に率直な意見を述べる。

「ああー、ルリちゃんはソアラのこと操縦下手だっと思ってたんだねー」

「ち、違います！そういう意味ではなくて、」

「じゃあどういう意味？」

ルリ准尉がとても困ったような顔をした。この場合、操縦下手というワードがルリ准尉の頭に無ければ、焦ることもなかった。聞いているミツキはそんな理論を発見する。

「えっ、そ、それは……、その……、えっと……」

「じゃあ大尉はどうなんですか？」

ミツキは困ってるルリ准尉に助け舟を出そうと試みる。

「えっ？私？ そうね……、結構変わったと思うよ」

「それはどのように？」

「どのようにつて、ねえ……、まあそういうこと！追求するな！」

いい考えが出なかった大尉はこういつて自らの責任逃れに成功する。と、同時に准尉を困らせることができなくなった。

「あゝあ、困った顔のルリもかわいいのに……」

大尉はソファに座った。ソファに座ると同時に視線が低くなり、ちっちゃくなっている少佐を発見した。自分が蹴ったことによりこ
うなってる。

大尉はずっと少佐を見ていた。見ながら考え事でもしているのだろうか。

「セツナ大尉にも罪悪感があるのかな」

ミツキはふと思ったことを口にする癖があるようだ。

「それはあると思いますよ、大尉だって人間ですから」

人間以外に罪悪感が芽生える生物はいないのか？ルリ准尉のことに疑問が生まれる。人間、生きていれば謎ができる、そして解ける、それと同時に新たな疑問が生まれる。

近いうちに自分も大佐のような環境に置かれるかもしれない。ミツキは戦闘中の一号機の映像を見ながら、自分なりの解釈で生きていることを実感していた。

9 混戦のワシントン

西暦2238年4月2日午後7時02分

ヤマト大佐は一号機に搭乗し、奪取された五号機と交戦していた。印象で戦闘スタイル決める人がなぜ不意打ちができるか理解に苦しみます

ハル力は少々あきれながら言った。

「不意打ちも戦法のひとつさ」

大佐は相手を説得するかのように返した。たしかに戦法だが印象はよくないに決まっている。

あ、三号機、五号機と交戦開始します

実際の映像では五号機の射撃を、三号機がソードで弾いている。センサー的にも、両機の数値ならすぐに接近しあつて格闘戦に発展する

「了解、後ろからナイフ叩き込んでやる」

大佐は人を殺す前にナイフ舐めてそんな殺人鬼みたいな笑みを浮かべる。文字で表すなら「ニヤリ」そのものだ。

命令は撃墜ではなく捕獲ですよ

ハル力は諭すように言う。

「こいつ……、速い、でも……、仕留める！」

五号機は右手のレールガン、左手のコイルガンをウエポンラックに取り付け、腰のソードを抜いた。

「泥棒なんかに、負けないんだからあー！」

三号機はライフルを腰にマウントし、左手のソードに右手も添える。両者、接近しもうすでにぶつかりそうなほど距離を詰めていた。

ほぼ同時に両者ともソードを振る。

五号機のソードは三号機の右肩間接部に、三号機のソードは空気を、切断した。

「仕留め損ねたか、ならばもう一度」

「な、なんで、なんでこうなるの〜！」

三号機コックピット内は警告音が鳴り響いていた。機体損傷の表示が出ている。

隊長、後はヤマト大佐に任せてお下がりください！

第三小隊オペレーターが最善の策を告げる。それは少将にとって人生初の敗北かもしれない。

「そ、そんなこと、できるもんかあ〜！」

それはソアラ少将のプライドが許さない。

しかし少将！このままでは

オペレーターがそこまで言いかけたとき、コックピット内を敵機接近のアラームが鳴り響く。

「何！？」

五号機は闇に紛れて再び接近していた。

「今度こそ仕留める！」

自分が成績^{スコア}を伸ばせば、フェルディナント隊長たちの名も挙がる。エースパイロットの部隊というのは軍では一般部隊よりは優遇される。アリス少尉はそんなことを思っていた。

「もう、隊長がバカにされずに済む！これで！」

敵新型機奪取に新型撃破。こんなことができるのはフェルディナント隊だけだ、そう思わせれば、無能な隊長率いる無能な部隊など言われないだろう。大役を任されている時点で無能部隊の名は返上したも同然なのだが。

部下の功績でも隊長の功績でも隊に貢献できるのは確かだ。

三号機を前に、五号機は剣を振り上げた。

「あの、バカがつ！」

ヤマト大佐は叫びながら三号機と五号機の間で機体を滑り込ませる。振り下ろされた剣の先を真紅の機体がナイフで器用に受け止めた。ナイフとソードは接触部分から火花を散らす。伝統文化、仕掛け花火のナイアガラのように。

「さっきの赤いのか……、ここまで来たなら、いまさら逃げるわけには……」

一号機は空いてる左腕で腰についてるソードを引き抜こうとしていた。

「……いけないなあ！！ヒヤッハッハッハ！」

五号機は一旦距離をとろうと全速力で後退するとレールガンを取り出す。一号機はソードを引き抜くと同時に五号機を追いかけた。

「ブラスターの後退ってのはなあ、前進ほど速かねえんだぜえ！」

その言葉どおり、一号機はあっさりと五号機に追いつく。

「絶対に仕留めてやる！ヒヤッハッハ！」

とつさに五号機は狙いを定めずにレールガンを放つ。弾は一号機をわずかに逸れて、後ろの輸送機に当たり爆発させた。一号機は止まらない。ヤマト大佐は操縦桿を動かし右腕を振り上げさせる。

「五号機返せやこの野郎！！」

一号機の右腕を振り下ろさせた。しかし、五号機は瞬時に回避行動に入り斬撃をかわす。そしてレールガンを背部に、左手でライフルを取り出す。

アリス少尉はライフルの標準をあわせた。

「そろそろ避けれるもんなら避けてみるオ！」

引き金を引かせるも一号機の左腕のソードにより全弾叩き落とされた。アリス少尉にとってこれは予想外だった。射撃ボタンを押す直前まで真紅の機体は腕をぶらつかせていた。なのに押したとほぼ同時に左腕の剣はコックピット前に持ってこられていた。

「何！？弾いた！？ハッ！結構いい腕してやがるなア！死神イ！」
ソードを引き抜き応戦しようとしている五号機に一号機のナイフが襲い掛かる。

ライフルが五号機の左腕から弾け飛んだ。

いつもなら、冷静なときなら完璧によけれる斬撃だったのに。

この言動のアリス少尉は常識では考えられない非人道的行為を平気でやってのける。ライフルで人を消し飛ばしたり、ソードで人を両断したり、両手で人を引きちぎったり……。

周りが見えなくなり、善悪の判断もつかなくなる。日常生活で気づいたら人が死んでいたということはないが、ブラスターに乗せるときは注意しなければならない。判断力も少し鈍るようだ。

「ハッ！！」

操縦桿を押し切って急加速し、一号機の脇をすり抜ける。

「速い……、ッ！！しまった！あっちにはアイツがまだいたか！」
ヤマト大佐の察しどおり、三号機はまだ右腕切られて活動を停止していた。

「何で動かないのよ！！なんか反応したらどうなの！！」

ソアラ少将は機械に文句を言っていた。

一時的に駆動系がパワーダウンを起こしていて動かない。設定が訓練だったため、切られた反応として止まっているのだが今は実戦、間違えると迷惑な機能である。

少将が力を込めて計器類を殴っているとコンソールから数字だけ書かれたキーボードらしきものが飛び出してきた。

「なに？邪魔よ、邪魔！！引っ込みなさい！！」

キーボードらしきものを押すが、出てきた方向に帰ろうとしない。

「イライラするわね……、これでどうだ！」

「この！」

8

「ああ！」

5

「もう！」

7

「さっさと！」

6

「引っ込めえ！！」

3

ガラガラ音を立て引っ込んだと同時にとなりから新たなキーボードが現れる。

「また！？もう！！」

4

「なんで！」

7

「また！」

2

「出てきてんのよ！」

3

「あんたは〜！」

8

「引っ込め！」

2

「って言っただろうが！！」

0

ガラガラ音を立てて二つ目のキーボードも引っ込んでいった。

「二度と出てこないで！！」

次もまた出てきたりするのではないかと、コンソールを睨みつける。しかし何も出てくる気配がない。

「やっと引っ込んだ……。はぁ〜疲れた〜」

ため息をついたと同時に敵機接近の電子音がコックピット内に鳴り響く。

「ふえ！？なんでこんなときに！」

びつくりして放した操縦桿にまた小さな手を伸ばし少将は力をこめて押してみた。

さっきと違い機体が動く。

「動ける！！これなら！」

五号機の方角を向く、と同時にコックピット内がブラックアウトする。

「えええ〜！なんでこんなときに〜！？」

ブラックアウトした直後に、青みがかった画面で再起動した。再起動とともに正面モニターには五号機の姿。すでに攻撃準備が完了しており、後は振り下ろすだけ。

とてもじゃないが防御は間に合わない。

誰もがそう思った。もちろんパイロットのソアラ少将も。

9 混戦のワシントン（後書き）

読んでくださってありがとうございました。

10 なんと不思議な三号機

三号機がソードを左腕で受け止めた。腕にソードをも受け止められる盾が付いていた。それで受け止めたのだ。

しかし、ソアラ少将は何もしていない。操縦桿を動かしてもなし、ボタンも押していない。まさに「勝手に動いた」状態だ。

「あれ！？私、生きてる！？」

自分が死んでいるんじゃないかとか心配をしているがそのようなことは全く無い。切られたとしても三号機の装甲はソードの斬撃を10秒弱耐えられる。10秒たつてない時点でまだ大丈夫である。

「受け止めたか、しかしなアー！！」

五号機がレールガン突きつけようとしたとき、三号機は五号機のソードを跳ね除けて一旦距離をとる。もちろん勝手に。

「ちっ逃げたか、……………後ろからも赤いのがくる。仕方ない撤退するしか」

表情がいつものポーカーフェイスとなり冷静な方に戻ったようだ。

一号機は背後から迫ってきていた。

大佐！少将の三号機が……

「三号機がどうしたんだ！？」

AIEAS、起動しました！

「なに！？パスワードは教えてないぞ！どうやって！？」

AIEAS、自動敵機迎撃システム。

三号機に搭載された無人戦闘をも可能にするシステムだ。ただ完全な自立起動にすると不安定になるので、まだ補助的動作しかない。しかし補助の範囲を超えた自動操縦を行う暴走になると内部の人間のことを考えなくなる。だからパスワードでロックがかかって

いたのだ。

使いそうな少将に渡されたマニュアルにも書いていないし口頭でも伝えていない。口頭で伝えたところで覚えられないだろうが。

少将は操縦桿を握っていたのだが、勝手に操縦桿が動いた。徐々に前に押し込まれていき、三号機は前進を始める。

「ちよつ！？ な、なに！？ 止まりなさい！ …… 止まって！！ …… 止まれ！！！」

止まらない。操縦桿はどんどん押し込まれていき、三号機の加速も順調に行われている。

五号機は目の前だ。

「あんのバカが！」

一号機は追いかけるも速さの世界では勝てない。どんどん距離が離されていく。元々一号機に搭載されているモーターは「ステインガー2」に搭載予定だったものだ。実装はコストの安かったアルプール電器産業のモーターだったが。

「この！！ 止まれ！！ 止まってよ！ もお！！ 止まれって！！」
コンソールをガンガン蹴ってガンガン殴っても三号機は止まらない。むしろ速くなってる。

「…………… はあ、仕方ないわね三号機。やってやろうじゃない、アイツを！」

三号機に共感し始めた。説得ではダメなのだ。操縦桿を握り前に押す。すると引くより簡単に動いた。

押し切って最高速度に到達させる。

滑走路を逃げる五号機。距離はどんどん縮まっていく。

「な、なんて速さ！？ あんな機体を作り上げるなんて……、次元が違いすぎる！」

アリス少尉は三号機に恐怖を覚えた。あんな速さで追われたこと

など無い。敵機接近のアラームがかつてないほど響いている。瞬時に敵機としての認識と設定したからだ。

新型機の技術はステインガー2より上をいく技術だ。初投入からたった3、4年だが、当時の機体には旧日本国防軍の安定したノウハウと技術が取り入れられている。何しろ敵に攻め込まれているときに完成した兵器だ。保証の無い最新技術の投入などしている暇はない。

「いくわよ！！ 私の三号機！」

操縦桿を握る手に力が入る。まるで少将が操縦しているかのように言葉と同時に剣を抜いた。

「やつちゃえー！！」

少将が叫ぶと同時に剣が振り下ろされる。

「ちつ、このタイミングで！？」

五号機は背後から三号機の斬撃を受けるも装甲の浅い部分を削り取っただけだった。五号機は基地外に飛び出した。それを追って三号機も飛び出す。

なんで止まらないのよ！ 五号機！ 反則よ反則！！

着地の衝撃で体がスイッチを押し全周波数で回線を開いたため、五号機にも聞こえていた。

「反則って……、連合の方が反則じゃない！」

こんな機体を作り上げた、ということは連合はまだ戦争をするつもりだ。

無論、ユーラシアもブラスターという兵器の調査に躍起になっている。鹵獲したステインガーを多少改良したコピー粗悪品機が配備されているし、独自に開発した試作機失敗作もある。

アリス少尉はコンソールに手を伸ばし周波数を合わせ回線を開く。

「隊長、こちらアリス、敵新型機の奪取に成功しました」

了解。よくやった少尉！だが、帰り着くまで気を抜くなよ

「了解しました。」

アリス少尉は回線を閉じた。三号機、少将だといえど、今は暴走傾向の戦闘補助システムで稼働している。彼女はそんなこと知らないが脅威であることは確かだ。

「待ちなさーい！！」

三号機、少将は五号機を追いかける。自分のものでなくてもこの機体、取り返さなければならぬ。

「ソアラどっかいつちやったじゃん！」

あの大尉がルリ准尉に抱きつきながら言う。結構前からこんな感じで画面を見ている。

「ヤマトは戦意喪失かな。」

少佐が珍しく発言を許可されていた。

「あの大尉が戦意喪失なんて……、あるんですね」

ミツキは大佐との付き合いが長い少佐の発言に疑問を抱く。あれほど自信満々だったのに、そんな人が戦意喪失とは。

「あれじゃもう奪還は無理だからな」

「どうしてです？」

「だってあの少将じゃさあ」

「ソアラが何だって？」

あの大尉の気に障るワードだった。

なぜ少佐はこんな単純なことも分からないのだろうか。それとも（狙ってる？）

「はあ……、止めるのは無理か」

またしても大尉が一方的に少佐を殴っていた。少佐は父親に言うという脅迫と女性という理由から殴れないでいた。しかし少佐はヤ

マト大佐と互角、というかちょっと下ぐらいの喧嘩の腕前。

（ならば勝てるだろうに）

確かに女性を殴る男性というのは印象が悪すぎる。それも同じ部隊のパイロット。一番連携を取らなければならぬ人たちだ。

少将と三号機が五号機を追いかけて10分経ったところだった。警告表示、オーバーヒートと出た。

どうやら車軸が高温になっているらしい。

「えっ！？ ど、どうすればいいのかな？」

とか言っているうちにリミッター解除と表示されて、警告音とオーバーヒートという表示は消えた。

「あ、なんだ、元に戻った！ よかったあー！」

少将に緊張感というものはもうなかった。

11 邪魔者を消す口実はなんでもいいわけでありまして

4月3日午前0時

ここは国防省の会議室だ。国防委員会の委員の面々がこんな時間にもかかわらず集合していた。

「しかし、困ったものですな。新型を本部から奪われるとは」

黒人男性は手を机の上で組みながら重々しく口を開いた。

「全くだ、警備はどうなっておったのだ！」

中年の白人男性は声を荒らげた。

「邪魔者が奪取された機体を取り逃がしたそうじゃないか」
特務隊

そのとなりの白人男性もやはり、特務隊の責任だといわんばかりに叩き始める。特務隊が逃げられたなら他の部隊からはもつとあっさり逃げられるだろう。

「邪魔者に処分を下すべきではないか？」

黒人男性はその会話に油を注ぐ。

「そうだ、あの邪魔者さえいなくなれば、われらの部隊に新型が支給される」

自分たちの利権しか考えていない白人男性はそれに便乗した。

「しかし、あの邪魔者の隊長は皆揃いも揃ってエースパイロットですぞ」

副官らしき男が後ろから声をかけた。

エースパイロットが戦場からいなくなるということは、そこまでもないパイロットたちが全面的に出撃するしかない。エースという名を聞くだけで敵を威圧できるし、味方を勇気付けることもできる。

「確かに。これでは何の処分を下せばよいか」

となりの將軍は副官の言葉に反応する。

「処分は処分でも、激戦地に飛ばすとかどうだ？」

向かい側の黒人男性が具体案を示した。

「それはいい、厄介な連中も消えるし適材適所というやつだな」
白人男性は黒人男性の提案に同意する。

「そろいも揃ってエースパイロットですしな」

委員たちの方針は簡単に決まってしまったのだった。

同日午前7時

「私たちにも処分下るのかなあ」

不安そうにセツナはハルカに話しかけた。

「どうなんだろうね」

ハルカもその件については分からなかった。

「ハルカにも分かんないかあ、隊長に聞くのも悪いしなあ」

大尉も珍しく肩を落としていた。昨日、五号機の奪取により、ヤマト大佐とソアラ少将が出たのだが、どちらも逃げられてしまったのだ。大佐は五号機に追いつけず、少将は車軸を融解させた。

「どうなるんでしょうね、私たち」

「ルリにも分かんないか」

「少尉は何か聞きましたか？」

「いや、僕もなにも聞いてないんです、ハルカさん」

誰も処分について聞いてなかった。

「俺は誰からも聞かれないんだな」

ブルーな少佐が後ろにいる。基本いい人なんだけどな、この人。待遇がかわいそうなほどにひどい。たぶん准尉より発言力が無い。複雑な世界だ。

本部の会議室に戻ってきた特務隊パイロット達は皆浮かない顔をしていた。

会議室の扉が勢いよく開いた。

「いるか！特務第一小隊の諸君！」

ヤマト大佐だった。

「隊長、どうなさったんで？」

セツナ大尉が一番最初に問いかける。

「まあそう焦るな、セツナ大尉」

大佐はゆるく返した。

「なにか処分が決まったとかですか」

「す、鋭いですね、ルリ准尉」

思いつきり図星をさされた。はつきり言つと間接的過ぎて処分だとも言い切れないが。

「まあ処分つて程でも無いけどね」

大佐は息を吸い込むと、結構大きめの声で話し始めた。

「我ら第一小隊は、五号機を奪取した敵部隊を追う。やつらが船を使っていたことは民間人から証言が取れている、付近の店舗の監視カメラにもそれらしき不審船が写っていた。大西洋艦隊から不審船通過の報告も来ている。これらを総合するとやつらはアフリカ方面に向かったと見るのが妥当だ」

「アフリカ方面に向かった？」

ミツキは思わず復唱してしまった。

「そう、アフリカ本面に向かったんだ」

大佐は改めて強調する。

「ということは船が輸送機が要りますね。ですが昨日輸送機は大半が損傷を受けていて第一小隊は運べないと思います……」

ルリ准尉は昨日の戦闘内容を自分なりにまとめていた。そのメモが役に立つこともある。

「そう！船が要る、だからすでに用意されてるよ。喜べ！最新鋭艦だぞ！」

「最新鋭艦？そりゃなんでまた」

少佐が反応する。

「ま、元々配備は決まってたんだけどね。」

「もしかして、飛行戦艦とかいうものだったりしますか？」

ルリ准尉は自分の知識をフル活用している。この時期の新型艦は

浮遊航行船という種類の船だ。現在民間用の小型船が発売されている。戦時中ということのを忘れさせるものだが、日本でしか発売されていない。

「よく知ってるな、まあ正式名称は浮遊航行型巡洋艦って言うんだけどな」

浮遊といっても、自由自在に飛び回るわけではない。飛び方と言うなら飛行船に似ている。ここでも新物質は活躍する。

圧縮して発電向きにしたアトミニウムから出る粒子を電磁加速してスラスタに使う。ようはアトミニウム粒子を燃料とするエンジンを搭載した巡洋艦だ。

従来の艦船と違うのは、空を飛ぶという点だ。比較的速いスピードで方向転換、上昇、降下を行う。そして武装は、前部ブラスター射出口の上にある主砲レールガンと、左右に付いたアトミニウム粒子砲、対空機銃16基、ミサイル発射口10門だ。粒子は自身で発生させられるので事実上粒子砲には弾数制限は無い。

「新型艦が配備される？」

ミツキはまたしても復唱する。昨日新型を敵に奪取された部隊に新型艦、おかしいにも程がある。前から決まっていたことだったとしてもだ。それに何の処分もなくいきなりアフリカに行け。

うまく行き過ぎではなからうか。間違いなく誰かの親が関わっている。一番怪しいのは少将の父親、国防省大臣だ。

「そうとも、ミツキ少尉、新型艦だよ。飛行速度は航空機並だが、通常の艦のように海の上を走ることだってできる。もちろん海の上は普通の船並だ！」

専門用語をあまり使わなくて分かりやすいと言えば分かりやすい、それがヤマト大佐の言動だ。同じような説明を他の隊でもしていた。特務小隊は全部で4小隊。

つまり新型艦は4隻作られたということになるのか。

「ど、どこからそんな金が出るんだ？」

ミツキは困惑した。財政難続きで叩かれているヨレヨレ内閣の報

道が連日あるこの時世。新型ブラスターと新型艦、さらにはブラスターの増産計画。この予算からそんな莫大な費用を賄えるわけが無い。

「ん？なんだ？金の出所が気になるか？」

「えっ？あ、はい。そのような予算がどこにあつたのかと」

ヤマト大佐はミツキの考え込む姿を見て声をかけた。

川村グループ

「うちとアルブルとローレンツが出してるんだよ。アトミニウムを使った技術はこの三社で寡占状態だかな」

さらっと危ない発言をする。これは軍と軍需産業の癒着を認めるようなものだ。しかしミツキの疑問が一気に解けた。

癒着というのは、全く言い聞かえ方をしないがこんなときだからこそ、とがめられるほどの大事にならない。これら企業からの融資がなければ戦争継続は不可能だ。特需景気である今でさえ赤字続きの国家予算。そんな国の軍が、国の予算のみで新型開発をすることなどできない。企業が存在が鍵となっている。

そうだから処分は無かった。そうとしか思えない。ローレンツと川村グループはブラスターやその他の兵器も手がけている。戦争中の今、これらは飛ぶように売れる。

アルブルは中立国でも家電製品販売数第一位だ。元々日本の企業が合併を繰り返しその混乱に乗じてカナダから買収にかかったのだから当然だ。

「お、恐ろしい部隊だ……」

ミツキは恐怖に心を押しつぶされそうになっていた。

12 移動開始

2238年4月4日午後3時

五号機強奪事件から2日。第一小隊を乗せた浮遊巡洋艦は、大西洋を通常の船のように航行していた。つまり水面を滑っている状態だ。

「意外と揺れないもんだな、この船」

ちよつと広めな船長室から、パイロット達へ作戦説明を行うミーティングルームに移動してきたばかりの大佐は感想を述べた。

それに少佐が返事をした。

「確かに揺れないな、飛んでも揺れないのか？」

進水式は秘密裏に行われていたため、機体や、整備班など搭乗員の荷物、食料、弾薬などの運び込みと、簡単な受領式をやって飛び出してきた。第一小隊を乗せてから宙に浮いたことは無い。

「浮遊船のバランスの取り方はコンピューター制御ですので、滅多に揺れないかと。」

ルリ准尉が説明する。

「にしても暇だね〜！敵さんも出てこないし、艦内はきれい過ぎるし、ハル力は上だし。」
艦橋

セツナ大尉がかつてないほど退屈そうなる気の無い声を出す。

「へえ〜！ここ触るところなるのか、じゃあここを押すと？」

少佐はコンソールのタッチパネルをいろいろと弄り回していた。すると画面が外の大西洋の様子を映し出した。「重油」っぽいのが「ごみ」が浮いているようだ。

「きつたな！何これ！」

セツナ大尉はなにか醜いものを見たかのような表情になる。

「何ってゴミだろ。あと油？だろ。ん？あれは多分墜落機の残骸」

大佐は見たままをそのまま表現する人だった。

「あれ残骸なんですか？よく分かりますね。私にはさっぱり」

ルリ准尉も自分から口を開くことが多くなってきた。大尉のおかげか、大佐がそんなに硬くないからか。おそらくは両方だろう。そして少佐がいる。学校で言う、「あいづがいじめられるから俺達はいじめられない」みたいなものだ。

「ああ、あのサメの背びれみたいな三角形あるだろ、あれ多分主翼の先っちょ」

「あ、確かに、主翼の先の方みたいですね」

「んでもって、あっちのちよつと水面に顔出してるのが水平尾翼、たぶんもう片方は胴体につながって沈みかけてるんだらうと」

「あ、ホントだあ、胴体が少し沈み込んで！真ん中ぐらいで折れてたりするんでしょうか？」

「たぶんな。だから微妙に浮いてるんだろ」

「私、レベル高くてついていけないんだけど、ミツキ君」

「同感です、セツナ大尉」

二人は楽しげに話す大佐と准尉を見て呆然と立ち尽くしていた。こんなことで話を弾ませるなんて。

「恋人同士でどつかの夜景見て、あれは何とか星だね　とかじゃないんだからさあ……ねえ？」

「です……、ね」

墜落した飛行機見てこんな話に発展するなんて。

（俺にはまあ分からなくもないんだけどね、その気持ち）

「ハルカ曹長、私が代わります。しばらく休んでいてください」

ハルカは隣から声をかけられた。彼女の荷物がまとまってないという話を聞いて、代わってあげていたのだ。

「そうするわ、トモ工伍長」

ハルカは戦況オペレーター、主にブラスターの戦闘の際パイロツ

トに作戦内容を伝えたり、状況報告をする。トモ工伍長は、艦自体の状況報告や敵機の接近などの報告をするオペレーターなので大佐達と戦闘中に言葉を交わすことは無いだろう。

ハル力は、たぶんパイロットのミーティングルームかなんかに集合しているんだろうな、という期待をしながら下に下りていった。

「じゃあ俺はレッド・ドラゴンを召喚してからの、魔法カードスベル竜巻を発動」

ヤマト大佐はハジメ少佐と中学のころからやっているカードゲームで遊ぶことに頭を切り替えていた。

「あゝあ、またこの局面かよ！」

少佐は先ほどから負け続けている。というか一方的過ぎて勝負といえない。大佐は大体このパターンで止めを刺す。

「お前の場のカードをなくしたところでターンエンドとしてやろう」大佐はどことなくいつもより偉そうだった。

「それ結構流行ってるっぽいですね。たしか隊長の会社でしょ、作ってるの」

セツナ大尉はこの試合を最初から見ていた。

「そうだな、多分うちのカードだね」

ヤマト大佐は自分の手札を見て何か考えながら返事をする。

「でもデッキ構成が前からあんま変わって無いよな、お前のデッキ」少佐は常日頃から思っていることを聞いてみる。

「ああ、あんま変える必要性も無いし」

彼が使うこのデッキ、大半は中学のころ祖父とつながりがある部署の人からもらったスターターで、少量がその後発売されたカードだ。その後発売されたカードは大抵、人のものである。

「なんで変えてないのに勝てないんだ？」

少佐は独り言のようにぼそっとつぶやいた。新しいカードが必ず強いわけではない、というカードゲームだが実際新しい方が戦術の

幅が広がる可能性は十分ある。

「お前が弱いだけじゃね？」

対戦者から冷たい声が飛び少佐の心に突き刺さる。

「そ、そうかも……………」

ここまで負けると反論できない。

「僕もやったことありますけど」

ミツキは少佐を助けようと声をかけた。

「何！？　ではやろうではないか！　弱いっていうレッテル貼られんのもやだし」

「じゃあ、デツキ取ってきますね」

「てか、ミツキはデツキ持ち込んだのか」

ヤマト大佐の予想外だと言っているような声かけられる。

「大佐だって持ち込んでるじゃないですか」

なんか厄介なことになりそうだが、正論っぽいことを言っしのごことを試みる。

「まあ戦闘してないときって軍人は暇だね。入ったところから、安全で暇なときはこれやってんだ」

「大佐とやると案外早く終わりそうですね」

「絶対勝ってやるって何度も勝負させられたからな、軍人って負けず嫌が多いからさ」

軍人が負けたとき、それは死を意味する。彼らいわく負けてもいい勝負はこの世には無い。あつたとすればそれは思いやりのある勝負だけだと。

「で、なんでこのカードゲームなんですか？他にもしろいろあるのに」

トランプ
プレイングカードとか、チェスとか。カードゲームよりルールのにも広く知れ渡っている物はたくさんある。

「そりゃなんとなくだよ。それに俺らの世代は電子ゲーム中心だったからさ、カードゲームって最近になってからじゃん？そんな大人

数で集まることも無かったし」

大佐の世代とミツキの世代にさほど違いは無い気がする。ミツキはボソツとつぶやく。

「4年しか変わらないから」

「しかし敵もバカだねえ！ 本部からあっさり盗ませてくれるなんて」

ユーラシア義勇軍特殊作戦実行部隊、フェルディナント隊長、フェルディナント アルムスター少佐は笑顔で言った。

「まあ少尉が奪取可能なら私にも奪取可能だったというわけで、」
「なんというか神経質そうな青年がアリス少尉の功績を羨ましくな
いと思ひ込みたいように言う。」

「たいした実力もねえかつこつけ野郎に奪取できるわきゃねえだろ
バカ！」

フェルディナント隊パイロット、オーリック大尉は常日頃からの
「どんなやつでも怯まない」態度で言い放った。

「何だと！？ お前の方が実力無いだろうが！！」

「上官にお前とはなんだ！！ お前とは！！ 言葉に気をつける！
！ バカが！！」

お互いに体制を整えて、そして一気に殴りかかる。

「止めますか？ 隊長」

取っ組み合いをしているベルトラン大尉とバリオー二中尉を見なが
ら隊長の意見を求める。少尉だけで仲介はできない。

「このままにしよう。止めて巻き込まれるのもいやだし」

フェルディナント隊長は事なかれ主義者だった。話しかけるだけ
無駄であったことに後から気づく少尉であった。

「アフリカって遠いんだなあ、もっと近いのかと思ってた」

カードゲームで結構いい勝負をしている少佐とミツキの横で時計を見ながら大佐は言った。

「そんな時間かかてる？ 別に気にならないくらいですが。」

「いやー、アメリカとか日本の移動に慣れると長距離移動は応えるなっっておもってね」

「昔からこんな感じじゃないんですか？ ねえルリ」

「えっ？ あ、えーと、多分……そうだったかと。」

ルリ准尉でも移動時間については頭に入っていないようだ。

「てかさ、早く終わらないの？ それ」

大尉は少佐とミツキの対戦の展開に連続性が無いためすっかり飽きていた。

「仕方ないだろ。まさかの展開なんだから」

少佐が大尉と対等に話せていた。

「確かにまさかです。」

ミツキも手札を見ながら答えた。

「何がまさかなんだ？」

まさかに引きつけられて場を覗き込む。

「ありや。これは確かにまさかだわな。攻撃封じ二枚と魔法昇華一枚って」

「俺のやつ除去無いんですよね」

「俺のやつにも入ってねえ」

そこまで魔法に気を使うことも無いゲームなのだが、昇華により場にとどまって効果を発揮し続けることになりそこに攻撃封じが来た。最悪の展開。対戦者の場に同名カードはルールの引つかかるが、昇華でそのルールも無効化されている。

「なんでこういう展開にしちゃうのさ！」

大佐ならこの展開にする前に攻撃封じをどうにか

「いや、攻撃は封じとかないと。俺のデッキ小型だらけだし」

「俺のデッキも大体似たようなものにして」

「何してるんですか？ みんな集まって」

艦橋にいたはずのハルカが扉のところに立っていた。

「ハルカ！少佐とミツキ君がモンスターウォーやってるんだよ！」
大尉はにやかな表情でさらっと言った。

「お前、セツナ大尉にゴミって呼ばれてんの？」

大佐は意外だったかのような表情で青くなり始めた少佐に問う。

「お聞きのとおりです。」

少佐はブルーなオーラを放ちながら言った。

「少佐、こういうことは長くは続かないですから、大丈夫ですよ。」

こういう経験のあるルリ准尉は少佐の肩に手を置いて励ます。一人からだけの言葉は長く続かなかったという分析結果からきていた。

「あ、あり、がとう……………」

トドメをさされた少佐は完全に青く染まった。対戦相手が思考停止状態なので、この対戦はここで終了ということにした。「引き分けということにする」というミツキの希望により勝負は引き分けとなった。

12 移動開始（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
今後ともよろしく願います。

13 アフリカ上陸30分くらい前

同日、午後6時

「何つーか、アフリカってもっと砂漠ってイメージだったんだけどな」

大佐は艦橋から外を見て言った。艦橋から見えるのは、ポートエリザベス基地と港、後ろには近代都市的ビル群。ごくまれにゲリラ兵やらテロリストやらが出現するが。

「ポートエリザベス、ってことは、父さんがいるの!? 最悪じゃん!」

ケープタウンからポートエリザベスにアフリカ方面軍司令本部は移転していた。

「エリザベスってさ、イギリスの女王のことか?」

ハジメ少佐は少ない知識を活用した。

「はあ? お前バカか?」

ヤマト大佐はあきれたような口調になった。

「ポート・エリザベスはイギリスの植民地時代に総督代理だったルーデンスだったかな? って人がインドで亡くなったエリザベス夫人を偲んで建てた石碑にちなんだ地名なんですよ」

ルリ准尉は相変わらずだった。

「ってことです」

大佐はおいしいところをさらっと持つてくるとルリ准尉を少し恨めしそうに見た。

「へえ、女王から来てるわけじゃないんだ」

少佐は納得したようないないような表情を見せる。

「ジョージとかいう王だった気がするが」

ヤマト大佐は女王という方向を潰す。

「ジョージ3世か4世ですね、そのころの国王は」

ルリ准尉が説明をする。

「まず女王じゃなかったのか」

イギリスの王といえば女王だ、という印象が強い少佐はようやく納得したような表情を見せた。イギリスは王より女王の方が栄えるらしい。話を聞いているミツキもそんなイメージを持った一人だった。

「ねえ？ 私、やっぱり話についていけないんだけど、ミツキ君」

「俺も……、です。」

中学とか士官学校で習った歴史でもこんな細かいのは習った記憶が無い。

「頭がいい人たちってのは住む世界の次元が違うんだろうね」

「そうかもしれませんね」

「ねえ？ さつきからミツキ君はそんな感じの返事しかないけど何で？」

「えっ？ いや、別にですね……、なんといいですか……」

「もしかして、ミツキ君もあっちの世界の人だった？」

セツナ大尉は大佐たちの方向を指差す。凶星だった。一応理解できる。

「そうなんだね……、裏切り者……！」

そう叫ぶと大尉は艦橋から飛び出した。

（えっ？ 展開早っ！ そういうのってまだなんかやりとりのこってんじゃない）

「あゝ！ ミツキ少尉がセツナを泣かせた……！」

ハル力は要らない間違った情報を発信しながら艦橋に入ってきた。
（なんかきた）

「えっ？ 少尉が？」

と准尉が

「何！？ よくやった、少尉！」

と少佐が

「そりやまた大事件だわな」

と大佐が言った。

「俺、大尉を泣かせるようなこと言った覚えは無いんですが……」
ミツキは一応弁解する。このまま厄介な方向に行かれても困る。
泣かせるようなことを言った覚えは全く無い。べつに「こんなのも
わかんねーのかよバーカ」とか言っていない。

「まあセツナは泣いてないけどね」

「泣いてないんですか？なんだ、すごいビックリした」

「なんか裏切られてどーのこーのって言ってましたけど？」

「えっ？ああ、あれですか」

ミツキはさっきの出来事を思い出した。確かに、こころなしか大尉は悲しげな表情をしていた。

「ミツキがお前なんかと一緒にするな、と叫んだからいけないんだ」

「そうですよ！ 私、少尉のこと見損ないました」

「よくやった！ 少尉！」

大佐と准尉と少佐は捏造した根拠でミツキを責めたり見損なったり
誉めたり。

（ひどくね？ この変なところのコンビネーションとか）

「なんですって！？ 少尉！」

ハルカが冗談でした的な笑顔から真剣な顔になった。よく分からないが、ハルカからあの子はバカって言われると一番傷つくとか繊細な子なんだとか、普段の大尉からは想像もできない情報が流れ込む。

「違うから！ 俺そんなこと言った覚えはないから！ 大佐！ なんかそれらしい嘘つくのやめてもらえます？」

ミツキはハルカの誤解を解こうとする。なんか本当だと思われる
いる。

「嘘？ この私が嘘をついたと？」

のんきな隊長的雰囲気をもし出していた大佐が、急に大佐的で

圧倒的な何かを放つ。大佐の得意技は、それらしいことを、真顔で、落ち着いた通る声で言うことで、相手にそう思い込ませることもしれない。

犯人ではない人物にもしかしたら俺がやったんじゃないか?と思わせてしまうどこかの刑事見たいに。

「隊長が嘘をつくわけ無いじゃないですか」

ルリ准尉はさらっと、真顔で言い放つ。これが正しいような感覚にさせられる。

（よくもまあそんなセリフをそんな顔でポンポン出しやがる）

「よくやった！ 少尉！」

（あんたは違うこと考えて言え）

「どうなんですか！ 少尉！」

「違うって、違いますから!!」

「そういうのよくないよ少尉」

「男なら潔く、ですよ少尉」

「よくやった！少尉」

（そういうの、よくないよ。精神的に）

「少尉、本当のことを話していただけますか？」

ハル力は冷たい声を放ちながら感情が無さそうな目でミツキを見た。

（これ、冤罪ってやつだよな。てか何で俺悪くなってるわけ？ それともあれか？ 気付かないうちに大尉にひどいことを？ でも、）

「俺はそんなこと言った覚えはありません」

「……言っただじゃん、さっき」

扉の影からあの大尉が泣きそうな顔でこちらを見ていた。

（これって、否定しきれないパターン、かつ逃げ切れないパターンに発展しちゃった感じ?）

「大尉はそこでなにをなさっておられるの？」

「なにつて……、ひどい。ミツキ君がこんな人だったなんて……」
と、言いながら、黄色い何かを目の近くに持っていった折り曲げ

た。

（あれは、かんきつ類の皮！）

「あゝ、結局泣かせた」

「少尉ってこんな人だったんですね」

「よくやった、少尉」

なげやりな声と冷たい声と機械的な声。

「泣かせたのはそのかんきつ類です！」

大尉の持っているものの方向を指差してミツキは叫ぶ。ミツキは

これは、全員口裏合わせの罠だと踏んだ。

「ええ！？　なんでばれてるの！？」

驚愕しすぎて手から黄色い実が落ちた。

「あ、セツナ！　隠して早く！」

時すでに遅しだよ、ハル力さん。

「あゝあ、やつちやったねえ」

とつまらなさそうな表情の大佐。

「ばれちゃいましたね」

と微笑む准尉。

「よくやった、少尉」

まだ続ける気の大佐。

「それはもういいから」

大佐は少佐につっこみ、というか拳を入れる。

「ぐはっ！！」

少佐は床に倒れこんだ。

「何してんですか大佐、アハハ」

独特な笑い方の大尉はおなかを押さえて笑っている。

（少佐が痛めつけられるのがそんなに面白いのか？　おそろしい）

「ごめんなさい、少尉、騙そうとしていただけなんです」

詐欺にあった相手が、加害者に騙そうとしただけ、と言われて許せるとは到底思えないのだが。

「発案者は私なの……、ごめんなさい」

セツナ大尉が泣きそうな顔で謝ってきた。なんだろう、この許さなきやいけないような雰囲気。どうせかんきつ類だろうに。

「俺がそんなことで、」

許すとしても？と言おうとしたときだった。

（殺気？ どこから……）

「ちゃんと許さないとダメだぜ？」とか言いそうな顔で大佐がこちらを見ていた。やっぱ恐ろしいこの部隊。

彼らの仕組むスケールの違いに驚きつつ、恐怖を抱きまくるミツキであった。

（なんか、ここまで仕組まれると、俺が全面的に悪い気がしてくる）

14 ルアハの森は気楽・・・か？

2238年4月6日午後1時

「暑い！ 暑い暑い暑い暑い！ 暑〜い！！」

大尉はコックピット内で叫んでいた。ブラスターが稼動するときの熱がコックピットにこもってしまうことがよくあり、ステインガーシリーズの評判は悪い。

しばらく黙っててもらえませんか？

ハジメ少佐は自信のなさそうな声で大尉に言う。

「あんたの言うことは聞かねえつつただろ？」
すみませんでした

通じなかった。

大尉、黙っててくれ、暑いのはみんな一緒だ

今度はヤマト大佐が普段と変わらぬ表情で言った。

「暑いのはって、隊長の機体は涼しいんでしょ？」

新型であるということは放熱方式も少しは改良されているだろう。そして従来より遥かに動く機体、放熱効率がいいとともに、コックピット内も熱がこもらないようにしてある。

なんだ、知ってたのか

「あ！やっぱりそうなんですネ！ なにそれ〜。隊長だからってずるい！」

セツナ大尉は大佐の一号機からすると旧式のステインガー2の狭いコックピットで暴れた。

人気者は大変なんだぜ？ 囲まれちゃってさ

ヤマト大佐は、「疲れました感」全開で語る。

隊長！ 前方に武装した民間人と思われる集団がいます！
タイミングよくルリ准尉から報告が入った。
な？

エースパイロット

人気者は大変である。というより今は連合軍という肩書きが問題なのだが。

あれってユーラシアか？

少佐はカメラをズームして人間らしきうごめくものを捉えた。手に持っているのは旧式アサルトライフルだろうか。確か何世紀か前のロシアの銃だったか？

いや、反抗勢力レジスタンスじゃないか？どちらにしろ殺すなよ、やつらが撃ってくるまでは……

武装していようと民間人であることには変わりはない。占領地の民間人、問答無用に殺せばその代償として統一連合全体で払わねばならなくなるかもしれない。民間人の力は今も昔も強い。歴史がそれを証明している。団結すれば国をも動かせる。

アフリカで暴動が起きれば混乱に乗じてユーラシアの侵攻が開始される可能性もある。

この周辺は占領後、連合のやり方に従わないと言い張っている民族が住んでいるとか言ってたね

ミツキは昨日基地で聞いたことを思い出した。

では民間人の可能性が？

ミツキの言葉を聞いて、というか覚えていたのだろうかルリ准尉は先輩の判断を仰ぐ。

だな

そうだろうな

「そうじゃない？」

だと思えます

第一小隊のブラスターはルアハの森林を進んでいた。温暖化がどうとかで品種改良種の木が大量に植樹されたため、この地域は完全な森と化している。

「連合軍だ！　とうとうここに人型兵器ブラスターが乗り込んできたぞ！！」

村の外側にある見張り台にいた男が叫んだ。正面に赤い人型兵器、ステインガー的な機体その後ろに緑がかった塗装の人型兵器が3機か4機。

「我々の村を守らねば！」

「連合の好きにされてたまるか！」

村の男たちは口々に叫びながら、武器庫の役割を果たしている民家から武器を持ち出す。男たちが取り出したのは超旧式軍用小銃、AK-74旧式拳銃、超旧式ショットガン、旧式ロケットランチャー。M92FS
RPG-7

どこかの骨董品店のようだった。果たして動くのだろうか。動くなら旧式といえど、武器であることに変わりはない。こういう非正規武装組織が入手する武器には少数だが最新型もある。どこかの部隊が売り飛ばしたり賄賂をもらっていたり。

さらに技術革新というのはこういう方面にも来ており、形は旧式、威力は最新というミステリーも起きている。

村の外側の塹壕じみた弾除けの穴に数人が入り、銃を構える。この村では度々連合軍歩兵小隊との戦闘を行っている。そこまで重要な地点でも無いが、統治している連合側としては指示に従わない民衆の存在は邪魔だ。完全に制圧ではなく話し合いという方面でも説得を試みていたが効果は無かった。

そこでアフリカ方面軍指揮本部ポートエリザベスにやってきた厄特務第一小隊介者部隊が派遣されたのだ。

「作戦内容を伝えておこう。恐ろしく簡単だからよく聞いておけ！今回我々が向かっているのはとある問題を抱えた村だ。彼らは連合政府のやり方に従わず、警告も無視し続けている」

警告ってどんな感じの？

「ハジメ、そういうのは後で聞け。我が小隊は戦闘兵器ブラスターで村に突入し、攻撃してきた村人を処理する。簡単な作戦なわけだが、敵は我が軍の35式戦車を2両破壊している」

35式って最新型ですよ？

「話を止めないでくれ！セツナ大尉」

大佐は話を遮られるのが嫌いらしい。

珍しく大尉は黙り込んだ。

「ということは敵は対戦車兵器を所有しているということになる」

報告にそんな情報ありませんでした……

「自分たちにできなかったことを俺らに成功されるのが嫌なんだろう？どうせそんなところだ」

（ササハラ准尉にはちゃんと応対するのか、どういう基準だよ）

「ブラスターといえど当たるところに当たれば稼動不能に陥る。各機、足回りの伏兵などに気をつけろよ」

へいへい

できたらそうします

了解しました

「ミツキ少尉は？」

あつはい、了解です

「戦場で他のことを考えるなよ」

はい。すみません

これは大佐の経験からの教訓でもある。少し任務遂行という考えを途切れさせてしまったことで大佐は親友を一人失った。あの力ナダ戦線で。

「戦車の要領で足回りを攻撃すればいい！」

森林ではあるが村の周辺はところどころ開けていてすぐに発見されてしまう。しかし生えた草や木の板などでカモフラージュした溝があり、人が身をかがめて通れば気づかれずに移動できる。

戦車の破壊も側面からの奇襲で足回りを破壊し、次に車体に攻撃をかけた。戦車は威嚇に効果があるようで、各地で戦車を引っ張っていき砲艦外交ならぬ戦車外交を行ったが、ここはそんな簡単にいかなかった。

ロケットランチャーを持った数人の男が溝を通り、第一小隊のブラスターに近づいていく。

「いいか？我が特務第一小隊初の実戦だ。歩兵小隊が失敗したのは攻撃を想定していったからではない。それに警戒態勢はゆるかった。その点我が隊は違うということを軍の高官^{ジジイ}どもに証明する」

大佐、いたるところに溝のようなものがあります

ルリ准尉は驚異的な観察力を発揮する。洞察力もきわめて高い。

「何！？そんなもんまで準備してあんのか！？戦争でもしようって？」

そついいながら歩兵隊を呪おうかというほど怨む。彼らはアメリカ人高官の師団の末端部隊だ。高官の意向も反映されているのだから。

「第二師団め」

彼らが聞いたら震え上がるだろう。

どうするんですか？ 突っ込んでって村焼き払います？

「できる限り殺すなと言っただろう」

相手が攻撃してくるまではこちらから攻撃するなという風なことを言っただけで、できる限りではなかった気がしますが、

ルリ准尉は大佐の言っただけを覚えていたようだ。それが普通なのだが。

「細かいことにツツコミいれなくてくれ」

最近調子が狂っているヤマト大佐であった。

敵である武装した村人は村を中心にこちらに向かって放射状に展開している。村の見張り台的な建物も見え、対空機銃つばいものも見える。

「敵さんは本気で戦争する気らしいな」

しかしあの対空機銃は移動できるタイプだ。移動式は手薄なところに移動することが強みだが、固定式のような装弾数と安定感はない。しかし、対ブラスター戦に使うなら、固定式より移動式のほう

が戦闘的には近づけるが勝負は見えている。

抵抗するなら容赦しないってか？

少佐が問いかける。大佐の発言にはそのようなニュアンスがある気がしたからだ。

「そのつもりだが？」

殺すなって言うておきながら殺す気満々じゃないですか！

できる限りですよ、セツナ大尉

「そう、できる限り殺さなきゃいい。任務遂行が最優先なのでな」この部隊の名前は、特別任務遂行隊。任務が遂行できねば彼らの存在意義は無くなる。今、また失敗をするわけにはいかない。

なあヤマト？こういうときって攻撃してもいいのか？

ハジメ少佐は少し焦ったような、緊張しているような少し震えた声を出した。

「こういう時って？」

「こういうとき」

少佐はコンソールでカメラの画像を大佐の一号機に転送した。一号機に映像が送られる。

一号機内映し出されたのは、なにやら物騒な代物対戦車兵器を担いでこちらを狙う男達。

「よし、敵の足を捉えた！発射！」

いっせいに男たちは引き金を引いた。

15 村の中にいる者は・・・

「バカがあ！ 各機、回避行動を取れ！」

大佐は声を荒げた。同時にロケットランチャーから弾頭が飛び出した。

各機体は前や後ろに少し移動しただけで回避する。戦車と違って、動き始めにタイムロスがあまり無いのがブラスターの利点の一つだ。

「おつと危ない！」

大尉はぎりぎりのところで回避する。

この部隊に配属されているパイロットはエース級、もしくはエースになるであろう新米である。士官学校を出ると部隊に配属されそこで実践的に学んでいく、という過程があるがたまに日本人嫌いな白人上官がいると教育なんぞ受けられたものではない。

日本人や日本の思想の人間は高官が先に止めてしまったため、そんなところに配属されないので安心してもらいたい。

「くそつ！ はずした！ 撤収！」

男たちのリーダーと思われる迷彩服っぽい柄のTシャツを着た男は叫んだ。男たちは溝を通り、村に帰ろうとした。

「敵さんが撃つてきた、反抗勢力を排除する！ あとちゃんと仕事しろよハルカ！」

いつ話しかけていいか分からなくなってきました。あと戦闘中の私語は禁止です

いつ話しかけていいのかも私語だよ、ハルカ

大佐は一号機の手にあるサブマシンガンコイルガンを、他のパイロットはライフルイルガンを構える。しかし大佐以外は照準を合わせていない。

大佐、対人戦闘にライフルでもオーバーキルになりますが……

「んなこと気にしてたら戦争はできない」

大佐は血も涙も無い人という表現がふさわしい人だ。瞬時に照準を少しずらしながら後ろから男たちに向かって弾丸を射出する。

まず一人目。

ブラスターの利点その2、ゲーム感覚になれる。利点であるとも欠点でもある。

搭乗者に人を殺しているという自覚がもてない可能性もあるということなのだが、自分の目というよりカメラ越しで死体を見ると、どこかのよくできた映画を見ている感覚にとらわれる人間もいる。

生身の人間にブラスターの使用する対戦車用兵器をぶち当てるなどアリを殺すのにハンマーを使用するようなものだ。

隊長、やめてください。相手は民間人です。これは戦時国際法違反にあたります

「そんな法律知ったことか！」

大佐は聞き入れようとしない。

二人目、三人目。次々と消えていく。

戦犯って言われても仕方なくなるぜ？

少佐は会話に参加するため、ヤマトに問いかける。

そうこう言っているうちに四人目。

さすがにあんなのは見たくないかな

セツナ大尉も人が弾けていくのを見るのは辛い。それも軍人ではなく民間人。

五人目。

隊長、これは軍規違反です！ やめてください！

ルリ准尉は自分の思いつく大佐にも害のありそうなことを並べる。軍規、人数に関わらず、虐殺行為は全てこれに引っかかり、行ったものに対し罰が下される。虐殺は一番罪が重い。

世界統一連合は世界人類の平和維持と人権尊重のために設立され

た組織だ。その組織の軍人が虐殺などすれば、軍のイメージダウン、さらに国家の離反、反連合主義組織の増長を招く可能性がある。

歴史上の人物、非暴力非服従のガンジーが助走をつけて殴りかかってきたら、ガンジーは歴史に名を残すことはなかったかもしれない。残せてもなにをしたかよく分からない人物となっただろう。

ルリ准尉としてもこの事だけは言いたくなかった。軍規違反者は最前線に送り込まれる可能性が高いというのは事実だ。とやかく言わないから死んでこいと背中を押してくるのである。軍の名誉のため。

ヤマト大佐とは出会って数日しかたっていないが、この数日で隊長として、仲間としての認識が始まってきているのも確かだ。大佐のいつもふざけているような態度、大尉の性格と相まってルリが性格を変えようという努力は実っている。実る過程はすでに吹っ飛んでいる。

大佐から感じるものが誰かに似ていたから。

大佐……やめないのでしたら、

ルリはそういいながら操縦桿に手をかけた。しかし、直後大佐の言葉に手を止める。

「あーもう！ 分かった、分かった！ やめるよやめる！」

憲兵隊にでも連絡されると困る。大佐は准尉はそういう性格だったことを思い出した。

あの時、タバコ吸ってるルリにしては結構親しい中学生達にルリが注意。警察に突き出そうと電話を使おうとしたところ足を後ろから蹴られ倒れた。ヤマトとルトがそれを発見。諸事情により殴り合いに発展した断片的な覚えがある。

ルリ准尉は不正は一切認めない、正義感の強く、警官だったなら死ぬ確率の高い性格の持ち主だ。

溝にいた男たちを全員消し飛ばしたところで射撃は中止された。撃つことが問題だが、撃ち方にも問題がある。

後ろから銃弾が迫ってくる撃ち方。

走って逃げていると後ろから銃弾が当たった穴と土煙が迫ってくるのだ。なにもこんな無駄遣いまでして恐怖に陥れることは無い。だんだん後ろから銃弾が迫ってきて、体が穴だらけに、というか消える。

戦争に託けて人殺しをする。大佐に関するうわさは本物かもしれない。

「さて、傭兵の処理も終わったことだし、残りがいるか村に確かめに行くか！」

は？ 傭兵？ 村人じゃないのか？

ちよつと驚愕中の少佐は首をかしげた。

（せっかく心を痛めてやってたのに。いつも民間人の被害はなんたらかたらと言ってるヤマトがためらい無く撃ち殺したから何かと思ったら何だ？ 傭兵？）

「何言つてんだハジメ。村人だったら、迷彩服なんか着るか？ 戦争中に迷彩服とか死亡率増加させてどうすんだよ」

あつ！ 確かにそうだな！

（俺の疑問きれいさっぱり納得！）

少佐は『きれいさっぱり』納得したらしい。

確かに赤い服の集団と青い服の集団が戦っているところに青い服を着て行ったら、赤い集団の一員であつても赤い服の集団から敵だと思われる。

こういうことを回避するため現在、敵に誤解を招く可能性のある物というのは販売禁止である。例えば代表的なのは迷彩服やヘルメット。最前線として認知されるアフリカに住む人間なら尚更だ。

民間人への被害は、どちらの勢力も掲げている理念上極力抑えている。表に出ないだけだとも言われるが。

じゃああいつら傭兵だったのか？　いったいどこのだ？

少佐は驚いたような表情になった。アフリカに傭兵がいた。これが意味するものは？

傭兵？

ルリ准尉も驚いた表情に変わっていた。

国際戦時法（2192年改定）において傭兵部隊が諸外国もみとめる国家間戦争での戦闘以外で活動することは禁止されている。つまり諸外国に紛争として認識されるような戦闘や内戦においての活動は戦時法違反である。

こういう規定があるため、殺されても文句は言えない。傭兵が戦場以外で統一連合軍に対して攻撃をするならそれは統一連合へのテロ攻撃だ。

この場合犯罪者として扱われるため、死刑を言い渡されることもある。

それにどう見てもこれは対ユーラシア軍戦ではない。ユーラシア勢力圏はここから北に400キロはある。気づかれずに来ることはいかにリーダーに捕捉されないとと言っても不可能だ。空からなら降りるとき、確実に発見される。陸なら国境警備隊に見つかる。

さつき隊長そんな法律知ったことかって叫んでましたよね？

セツナ大尉は覚えていた大佐の言った矛盾点を指摘する。

「利用できるときには利用しないとな」

自由奔放な認識しかされないような法律だっただろうか。ちゃんと正式に発効しているはずなのだが。大佐に法律法律と言って法律で縛りつけるのは無意味かもしれない。

では村に乗り込みますか？

ミツキも大佐の判断を仰ぐ。

「まあそういうことになるな。あとちゃんと仕事しろよハルカ」
いつ話しかけていいか

ハルカ。さつきと話そうとしてることが一緒だよ

「ブラスター発砲！」

見張り台の上の村人の格好をした男が叫ぶ。

「なに！？」

下にいる村人と傭兵が一気に慌しくなった。横では空挺戦車^{BMD-7}が整備されている。ユーラシア軍正式採用型であり、主に空からの降下作戦で使用される。しかしジェット輸送機のない現在では恐ろしく展開力が低い。

「連合は本気なんだ！ やっぱり彼らの言うとおりだったじゃないか！」

「しかし、下手をすれば村が火の海になってしまうぞ」

「いえいえ、われらの言う通りにしていただければ村の安全は保障いたします」

スーツに身を包んだ白人男性はどこかの悪徳商法のセールスマンのような口調で話す。

明らかに村人ではない。この地域の人々は何世紀も前にやってきたオランダ人やアジア系の人々の子孫で、今ではどちらかと言うと黄色人種にも近い。

そしてこの白人、どこか不敵な笑みを浮かべているようにみえる。細身の胡散臭い白人は傭兵部隊のリーダーに村人に聞かれないように耳打ちした。

「赤い機体はいたか？」

「ああ、部下から赤い機体がいると聞いている。あれはなんなんだ？」

リーダーもブラスターは何度も見たことがあるが、あんな機体は見たことがない。

「別にお前は知らなくても平気だ。それより後は頼んだぞ。私は基地にもどらねばならん」

「帰還したら俺らも報酬がもらえるんだろ？」

「ああ、遊んで暮らせるほどだ。家は一等地の豪邸だ」

そう言つと革靴をカツカツと鳴らしながら長老の家を出て行った。よっぽど時間がないのか早歩きになっている。

「大船に乗ったつもりで待っててくれ」

閉まる扉にむかつてリーダーは叫んだ。

「フツ、家には統一連合の死神にでも道案内してもらいな」

振り返ることなく、傭兵達に聞こえないように呟いた。

「なあ？作戦的には別にばればれでいいと思うんだが、どうする？」

私は隊長に従うだけです

無責任ですね、大尉。対戦車兵器を所有しているということは、その攻撃を受ける可能性があるのです、正面から堂々とはきついと思います

准尉は的確なことを言っているが、知識を応用してたどり着いたにすぎない。

俺も准尉のやり方が的確だと思う。あんなもん持ったやつらが村に何も残していないわけが無い

俺もササハラ准尉の言うような警戒をすべきだと思います

「そうなるか……、よし！では隊を二つに分けるか！」

二手に分かれるのですか？

「やつと仕事始める気になったか？まあそんなことより、二手に分ける、これからも分かれるつつたらこれで行くからよろしく」

どう分けます？大尉と少佐、大佐と准尉と少尉で分けるのが妥当だと思われますが

「俺もそう考えていたところだ」

新米は分けるべきなのだが、大佐以外は援護にまで手が回る気がしないとのこと。格闘型である大佐の機体は射撃をあまり考慮していないため照準の精度が低い。それで軽量化も図っている。

格闘戦の最中も援護ぐらい必要になる。射撃が得意な人がいたほうがいいだろう。」

「よし、それで行こう！ 大尉のほうは裏に回ってくれ、俺たちは正面から出る。」

隊長！？ 正面は何がくるか分かりませんって！

「なんだなんだ？ 怖いのか？ 別に下がっててもいいけど？」

いえっ別に、そ、そういうわけではなくて

「じゃあ行くか！ 少尉、准尉、後ろから俺が取り逃がしたものと撃ってくれ、あと援護よろしく！」

（了解しました

了解です

ミツキにとって初実戦。生で実戦を見たのはさっきだか、あれは戦闘と呼んでいいものだろうか。敵勢力については偵察部隊が動かないし、歩兵小隊からもわずかな情報しか入らない。戦闘中に判明するのでは手遅れだ。それに対する策を練らねば勝つ確立は下がる。しかしこの人にはためらいという言葉が存在しない。

行き当たりばったりで全て推し進めてきた人、それがヤマト大佐である。

16 世界に誇れぬ最悪部隊

「いざ戦場へ！」

ヤマト大佐は操縦桿を前に。一号機は前進を始める。格納庫から出撃したときの初々しさを感じる動作ではなく、すんなりスムーズにかつ死の恐怖を具現化したような気味の悪い動作だ。人間で言うなら肩を揺らしながら歩いてる猫背の人。赤い塗装と相まって、恐怖を感じさせる効果はまず身内に発揮されていた。

准尉と少尉の思ったことは同じだった。

（あんなのと戦場で会いたくない……）

会えば生きて故郷に帰れない、あるのは「死」のみ。

「戦車を出させる！」

「私には操作はできません」

「うるせえ！！ ごちゃごちゃいつてねえで乗ってりゃいいんだよ！」

傭兵と村人は仲が悪いようだ。確かに異国の地からやってきた傭兵にいきなり「あなたがたの力になります」などと言われても……。

「ん？ なんだありゃ？ 戦車か？」

画面に映ったのはうごめく小さな鉄の塊。よく見ると戦車のようだ。3両ほどいる。

そのようですね。相当前の

ルリ准尉の頭の中では、学校で習った兵器の種類の中にあつた画像が検索されていた。

21世紀のやつですかね？

ミツキは直感的に答える。100年以上前の戦車が動いたところで敵ではないのだが。

「みくびられたものだね、対戦車人型兵器ブラスターに戦車で向かってくるなんて」

それも旧式。ヤマトは操縦桿を押し切り一気にブラスターを加速させ、周りの木を揺らしながら進む。

「叩ききつてやる！」

進みながら腰から日本刀型ソードを抜き取った。加速も順調。操縦桿を押しきつても級に最高速に達するわけではないし、その辺の加速度の安全装置もついている。

「連合のブラスターだ！撃て！」

戦車の砲が火を噴く。あらかじめ装填しておいたのだろう。敵がいるのに出会ってから装填などしていたら手遅れだ。一号機の胴に向かつて一直線に飛んでいき、炸裂する。

装甲を過信するのはよくないが信じないのもよくない。相手は旧式、はつきり言うとは避ける意味がない。一号機はその衝撃で少しよろけた。

「うお！……？ あ？ 何でこんなによろけたんだ今、旧式……だよね？」

隊長、援護射撃を開始します

「分かった。よろ」

古い言い回しをしてみたが別に何も言われなかった。准尉も少尉も戦闘に集中しているようだ。後ろから着いてきていた少尉と准尉は両側に広がって射撃を開始した。

准尉は照準を戦車に合わせて発砲する。3発連続で同じ点に着弾させ戦闘不能に陥らせた。

少尉は、照準を合わせたあと7発ほど撃って戦車を四散させた。

「あ、爆発させちゃった」

カタセ少尉、気をつけてください

准尉から注意された。なんというか、女性に負けるという表現は

差別的でよくないかもしれないが、悔しいものだ。同い年の女の子にできたことを自分ではできなかった。

なんという無力感だろうか。

こんなことで片付けられるようなことかもしれないがミツキにとっては大問題だ。知らない間に、ササハラ准尉にライバル意識を持つてしまったようだ。

一号機は前方の戦車に接近する。

「旧式のくせに新型砲なんか積みやがって！」

ソードを振り下ろし、戦車を左右対称に切り離す。

「なんだなんだ、この程度か？戦車でけんか売ったときながらよオ！」

「ほら、行くぞ生ゴミ！」

お前大尉だろ！ いちいち偉そうに！

「あ？ てめえは私より偉いつて？ そういいたいのか？」

といいながら少佐の機体にライフルを突きつける。

な、何のまねかな？

ちよつと青ざめながら少佐は問いかける。このフラグって実は私ユーラシアでした！とかそういう方向に……。

「私に今度偉そうな口叩いたら後ろから撃ってやる！」

（そこまでしなきゃいけないようなこと何かしましたっけ？）

はあ、そうかいそうかい、俺は撃たれるのか。それも運命ってやつ？

「はあ？何言ってるの？」

ルトが言ってたな、運命は自分で変えるものってな。だから俺も変えてみる

「えっ？」

大尉が二次元がかったセリフをいう少佐に驚いている時には少佐の機体の右腕が大尉の機体のライフルを持って銃口を空に向けさせ

ていた。

「なんだ!？」

慌てて応戦し始めるも少佐の操縦は絶妙だった。大尉の機体の左腕が動くと同時に、ライフルを左側に倒し左腕の稼動範囲を狭める。直後、自分の機体のライフルの銃口で大尉の機体のコックピットを軽く叩いた。

叩く動作は簡単ではない。センサー類があるわけでもないのに距離感パイロットの感覚にゆだねられる。軽くともなれば尚更だ。

「^{ヤマト}アイツの方がすごいから隠れてるけど、俺にだって「統一連合のジャッカル」っつ呼び名があつたりするんだぜ？」

アフリカ戦線のワジルの戦いで、ユーラシア側のブラスター4機、戦車29両、戦闘機12機を撃破、敵前線基地を壊滅させることに協力したことで勲章を授与されている。戦車撃破総合数は連合内第7位だ。

ちなみにエジプト神話の冥界の神アヌビスの頭部はジャッカルである。そしてハジメ少佐になぜ少佐はジャッカルと呼ばれているのかと尋ねると、「想像にお任せしよう」と返ってくる。

では、行くぞ!大尉

「だから命令すんなって!」

と言いながらも大尉は少佐の後に続いた。ちょっとした出来事により少しだけ隊長達とは遅れているが、そんなに影響はないだろう。大佐はまだみたいだし、出てくるやつらもないのは何でだ?

「知らない!　っつか聞くな!」

別に大尉に聞いた覚えはございませんが?

「あつ、だ、だからなに!？」

長年ヤマト大佐と友達でいると、口喧嘩にはどうやってたら勝てるかとか、相手を陥れるとか怪しい技術がある程度身につけられる。

一度大佐も引っ掛けたが、それ以降どんなに手を変えても巧妙にしても引つかからなくなった。

別に

少佐はコンソールに手を伸ばし通信回線の送信コードを、大尉から大佐に変えた。

「なあ？ ヤマト、村の中心部まであと一歩なんだが行ってもいいのか？」

あまり間を置かず大佐から返信が入る。

雑魚ばっかだな、この村。本当に歩兵をやった連中か？

「そうか、分かった」

少佐は長年の経験から、彼の性格は人より分かっているつもりだ。分かったって言うけどさ、隊長何にも言っていないじゃん。命令を曲解し独断専行に走りそうな大尉に聞かれなくなかったから送信コードを大佐のに変えたのだが、よく見たら部隊内通信のスイッチが入っているため全く意味がなかった。

「用心しろバーカ、だつてさ」

少佐は大佐の言ったことを分かりやすく伝えた。

バーカってなに？ バーカって！

大尉は少し機嫌が悪くなった。

そんな風に言つたつもりはないぞ。あと仕事しろよハルカ

大佐が仕事全部取るんですもの。したくてもできません

軍人がそんなのでいいのだろうか。彼女にはもう少し積極的に会話に参加することを身につけてほしい。

「攻撃開始だ！」

「うおー！」

男達は接近しつつある赤い機体に機銃を連射した。同時に手榴弾MK3A2や、ロケットランチャーでも攻撃する。

「なんかたくさんキター！」

ヤマト大佐はコックピット内で奇声を発する。画面には警戒と表示Warningが出ている。しかし正面装甲にあたるそれらの攻撃は全くダメージ

ジを与えられていなかった。

隊長、民間人と思われる人々に囲まれてます

ヤマト、俺ら囲まれてスッゲー猛攻されてんだけどどうすりゃいい？ あっ！ おい、大尉、逃げんな！

予想外だった。ヤマトにとつても、隊にとつても。ここまで装備があるとは。

「ハッ！ 雑魚のくせに、我が部隊に楯突くとは愚かなり」

やばい！ヤマトが狂った！

少佐が叫ぶ。経験則として愚かなりと言うヤマトは危険な存在となる。例えば叩き割ったガラスの上に人を落としてみたり、ゴキブリを過剰な火力で焼き尽くしたり。猫の尻尾を切り落とし、剣山に犬を乗せてみたり。

「村ごと焼き払ってやる！」

小型マシンガンこと、『サブマシンガン』を背部から取ってうごめく粒に照準を合わせた。

そしてそこに対戦車用貫徹弾を発射する。

塹壕は一瞬にして大穴となった。歩兵のライフルでは弾が貫通しなくてもブラスターのライフルなら簡単に穴が開く。簡単すぎてむしろ力学的エネルギーが有り余っているくらいだ。

その穴にいた村民達の腕と足が宙を舞う。

続いて見張り台に照準を合わせた。先ほどから撃ってきている対空機銃が設置してある場所だ。なおも傭兵らしき男が一人機銃でこちらを撃ち続けている。

見張り台の脚に2発叩き込んだ。脚を折り、上の部分を地面に落下させた。男は見張り台の脚に胴を貫かれ赤い液体を撒き散らす。

「真っ赤な華が咲きましたってね」

ヤマト、そんぐらいにしとけ。あとで厄介なことになる

「さあ、次いつてみよう！」

完全無視。

村の入り口にたどり着いたヤマトは周りを見渡した。一番でかい

家が村長かなんかが住んでいる家であろつ。

「見つけた」

操縦桿を押して一号機をその方向へ移動させる。女性や少年も口ケットランチャーを放つが全く当てられない。そして彼らをも容赦なく撃つ。

人がいた場所は穴が開き、人はすべて大地に帰す。材木には火が付き、家は燃えている。

（これが隊長の、ヤマト大佐のやり方なのか？ こんなやり方が統一連合の死神の戦い方なのか？ この戦いに何の意味があるただの民間人相手にここまで……こ、こ、こ）

これじゃ本当に、殺人鬼じゃないか！

ミツキはこの時、大佐のことを信じられなくなった。上官として、隊長としてではなく、

人として。

17 ミツキの怒りとヤマトの焦り

2238年4月6日午後3時

先ほどの戦闘は終了した。なんだったんだあの戦闘は、あんな戦闘あつていいのか。ミツキは先ほどからそう思っていた。村民134名中生き残ったのは56人。半分はどこに消えていったんだ。

大半は大佐が殺した。流れ弾、ミス、などではない。確実に狙って仕留めた。狩でもしているかのように、瞬時に照準を合わせて瞬時に撃つていった。

(それでも、軍人なのか?)

「我々の任務は村の抵抗勢力の排除だ。それに家族が一人消えたなんてことにはなつてない」

大佐は言い訳を言っているようだが、言い訳に聞こえない口調で言った。大佐お得意の相手を信じ込ませる言葉だが、ミツキに効果はないようだ。

大佐に対してミツキは反論する。

「村人を殺したことが問題なんです。なぜ大佐はあのようなことを平然とできるのですか？俺にはそれが分かりません」

「そりゃ分かんないだろ、お前はお前、俺は俺だし、考え方がぴつたり一致する人間は一緒に育った双子くらいだと自負している」

「では、質問を変えます。なぜあんなことをしたのですか？」

「さっきから言っているが抵抗勢力の排除だ。そのために撃つた」
まわりに人はいない。気まずいのでミーティングルームから飛び出していったのだ。

ハジメ少佐やセツナ大尉、ルリ准尉は部屋の外でやり取りを聞いていた。

「ミツキ君、結構ズバツと聞くね」

先ほどの行為、彼は頭にきているようだ。確かに軍人として、あの殺し方は虐殺でしかない。

「普通できないもんな上官に」

大佐に反論する、つまり6個も階級の上の人間に楯突くのだ。同じレベルになるまで何年かかるだろうか。

「まああんたにはできるけどね」

その点少佐と大尉なら1つ違いだ。大尉の上が少佐である。

「まだそれなのか？俺の立場」

セツナ大尉　ハジメ少佐はセツナ大尉>ハジメ少佐に変わったようだ。

「そうだぞー！ あんなことであんたの立場は回復しないの！」

まあ生ゴミとか言われるよりはいいか。笑うと結構かわいい部類だし。

（後輩としてっていうやつか？）

少佐は大尉の顔を見つめていた。マサキが反応しないのは、この手の顔にはなにも感じられないとのことだったが、なぜ何も感じないのか逆に不思議なくらいだ。

「なに？なんか顔についてたりする？」

「いや、別に」

人の顔をみていて目が合ったとき、たいていさつと目をそむけてまるで「見てなかったよ」、みたいにする人が多いが、大佐との付き合い方で結構これに耐性が付いた。

「なにその態度。ルリ、なんかついてたりしない？」

少し少佐への対応がやわらかくなった大尉であった。

「いや、大佐はなんか嘘をついてる……」

ルリは何か考え事をしているようだ。

「ルリ？」

「えっ？ あつ、なんですかセツナ大尉」

やっと質問されているのが自分だと言うことに気がついたらしい。

「なんか考え事？ 大佐がどうのって」

「えっ？ あっ、はい、そんな感じです」

「もしかして大佐に告白されたの？」

本部を出る前にヤマトとマサキが話していたルリ准尉についての話を聞いていたのだ。だから、ヤマト大佐がルリ准尉のお兄さんの友達だったとか、兄に襲われていたとかいう情報がある。そして実際は襲われていない。

「はい！？ な、なに言ってるんですかセツナ大尉！」

純白の頬が薄紅色に染まる。

「いやー、だってねえそれしか思いつかなくて」

「そ、そんなことされるわけじゃないじゃないですか！」

あわてて否定するルリであったが、これは誤りである。

「じゃあさりたいの？」

「いや、そんな別に……」

「意外とかっこいいもんね、大佐」

「大佐は、か、かっこいいかもしれませんが、私は、その、そういう風に見るつもりはありません」

「そういう風って？」

ヤマト大佐もすごいが、セツナ大尉も結構やる。互角に戦えるかもしれない。ようはいかに効率よく人の揚げ足を取るか、揚げ足の出そうな話題を振るかだ。

「・・・」

「ごめんごめん、そんな顔しないでルリ」

ルリ准尉は困り果てた末に黙ってしまいさらにふくれっつらになつていた。セツナ大尉的にふくれっつらもいいが、一番は困った表情である。

「俺は立場が近づいただけみたいだな」

少佐く大尉〃准尉 という図式だろう。准尉はちゃんと接してくれるが大尉の頭ではこうなっている。

「だって、オオツカ大尉が……」

「ごめん、ごめんってば、お願いだから下の名前で呼んでくださいな！」

少佐<大尉<准尉　かもしれない。

「どちらにしろ俺は一番下かよ！」

「そりゃそうに決まってるじゃん！」

大尉はにこやかに言った。

「ちゃんと答えてください。なぜ、大佐はあのような虐殺行為を？」
ミツキは大佐を問いただす。ミツキも軍人だ。軍人として誇りを持ち、任務を遂行する。それが軍人だとミツキは考えている。

人殺しがしたいだけの軍人に何ができる。ただの殺人鬼みたいな軍人に何ができる。

「しつこいな、だから、任務遂行のためだ。虐殺ではない」

先ほどと同じパターンの質問に同じ答えを返す。大佐は少しいらだっていた。

「任務遂行にあの犠牲はいりますか？」

「またそれか！　お前ほんとしつこいな、親子だとそんなことも似るのか！！」

「親子？」

「おっと、しまった！　これは言わないようにと！　くそ！！　言っちゃったじゃねーか！」

最近どうも調子の狂う大佐であった。相手に乗せられたのは少佐にかけられたのこれで二回目だ。

「大佐、父を知っているのですか？」

「ああそうだよ！　知ってるよ！　カタセ　カズキ大尉、お前の父親、それ知ってる！」

大佐はなかば自暴自棄になった犯人のような自供を始めた。

「ここでひとつ問題。俺の初陣いつのどこか知ってるか？」

「父を知っていると言うことは、開戦直後のカナダですか？」

「そう、正解だ。俺は士官学校を繰上げて卒業後、カナダに飛ばさ

れた。カナダの時の第一師団第三歩兵大隊第五中隊隊長、それが力
タセ大尉だった」

「大佐が、父の、部下だった？」

「まあ俺の隊長だったから俺は部下になるな」

大佐は先ほどまでのイラついた険しい表情から昔を懐かしむやわ
らかい表情に変わる。

「あの人はそりゃーしつこかったぜ。特にさ、お前と妹さんが写っ
た写真、何度も見せられた。俺には父親なんかいないからあんまわ
かんねーけど、家族想いのいい父親って感じだった」

完全到大佐が昔を思い出す体制に入っていた。元の質問に戻る気
はないだろうか。

ミツキも戻る気はなかった。父が軍人で大尉で、カナダで死んだ
ことは知っている。しかし、父が何をしていたか知らない。大佐は
それを知っている。ならば聞いてみたいと思うのは当然ありえるこ
とだ。

「なぜ、父は死んだのですか？大佐」

「大尉は砲撃の爆風に弾き飛ばされて死んだ。俺は大尉が吹き飛ば
されてきたおかげでこの通り今も生きている。大尉がいなかったら
爆風と破片に当たって死んでたかもしれないな」

大佐はそう話しながらその時のことを思い出した。

「あの時は、俺も立派な新米だったな」

18 他人の不幸と蜜の不幸

「で、大佐がどうのつて何？」

「あ、えーとですね、それは、その、……私の勘というかなんと言
うかなんですが……」

ルリ准尉はどことなく神妙な面持ちで語り始めた。

「大佐はさきほどから『任務遂行のために人を殺した』と、言っ
てるんですね」

「うん、いつてるねえ」

少し興味が出たので、大尉はまじめな表情になった。実は揚げ足
とつて困らせたいただけだ。

「ですが、大佐が人を殺すことをなんとも思わない人だとは思えな
いんです」

「そりやまたなんで？」

「軍の人間は戦争を戦争をしているのですからあまり深く考えない
と思います。ですが大佐は戦闘中と戦闘前と全く違うんです」

「違う？ そんななんか変わったつけ？」

ふだんのふざけたイメージは拭えない。正直普段どりの大佐だ
った気がする。そしていつもより恐ろしい。

「私の思い込みかもしれないんですけど、大佐はもう私達の性格を
理解していると思うんです」

「えっ？ そんなに一緒にいたわけじゃないのに？」

大尉は目を丸くした。あんなふざけてる物言いで、少尉を引っ掛
けるためだけに無駄な話作ったり、変態と対等に話したり、殴り合
いしたりする人間がそんなに人を理解できるものか。

「大佐は私が撃つのをやめてくださいといってもやめませんでした。
結局全員撃ったあとにやめると言っただけです。普通全員撃ったらや
めるなんて言いませんよね？」

「まあ普通は言わないだろうけど、それと理解と何の関係？」

「やめると言ったということは私の意見を一応聞いてくれたということにもなります。つまりあの一言であのときの私を止めたわけです。現に私はその一言で大佐に言おうとしていたことが言えなくなりました」

「へえ、そうだったの？」

あの時の通信を思い出しながらルリの話に耳を傾ける。

「で、大尉はもしかして、怒鳴られると何もいえなくなりませんか？」

あの時、大佐に怒鳴られたおかげで大尉は黙ったはずだ。あの階級を無視することが得意な大尉が、階級で止まるわけがない。

「えっ！？　そ、そんなこと、ないよ」

考え付くのはこれだ。大佐が仲間の性格を理解した前提で話を進めている。黙らせたいとき、『黙ってくれ』で黙る部下だったら大佐はやりやすくて仕方がないだろう。

「本当ですか？」

「う、うん」

「ハルカさんに怒鳴られても？」

「は、ハルカはほら、なれてるって言うか友達だし、」

「うそをつくなあ！！」

「ひゃっ」

大尉は頭を抱えてしゃがみ込んだ。正確に言うと耳を完全に手でふさぎ目も閉じている。雷で怖がる子供みたいだった。

「うわ、スッゲービビッた、心臓に悪いからやめてくれ准尉」

普段大声を出さない分唐突に大声を出されるとびっくりする。少佐は弱い心臓の持ち主なので気をつけるように。

まあ慣れるものでもない。

「大尉？」

ルリは「ほーらこうなったじゃん」という感覚を込める。

「はっ、わっ、い、今のはね、そのなんというか……」

「なんだ？　なんかあったか？」

ミーティングルームから大佐が出てきた。ミツキの父の話をした
ら、ミツキはもう黙ったのでさっさと帰ろうと言う魂胆だ。

「隊長、失礼しました。今のはちよつとした……、その、大尉の反
応テストでして、」

「反応？　ああ、いつもの仕返し？　まあ別に止めはしないがほど
ほどにな。あとが大変だろうし」

「はい。では、隊ちよ、ひゃあ！？」

「ルリ〜？　どうなるか分かつてる？」

「ちよつ大尉！」

「ほら言わんこつちやない。大尉、程々にな」

「了解！」

大尉が一番輝いている敬礼をした。なんと珍しいことか。

「了解、じゃないですよ大尉！」

「大佐のゴーサインが出ましたしこちらはこちらで始めようかな〜」

「じゃあ俺は仮眠してくるとするか」

少佐はそう理由を言いながら立ち去る。

「えっ！？　少佐あ！　……と、止めてください隊長！　って隊長
も！？」

廊下の向こうに「俺は知らない」的背中を見せる大佐が歩いてい
た。いつの間にあんな距離いったのだろうか。ゴーサインを出して
から10秒ほどだ。

「俺すっげえ出て行きづらい」

思わず呟いてしまうほど困ったミツキはミーティングルームのド
アにへばり付く。入ってこられでもしたら少々厄介だ。

「ほーら、ルリを助ける人はいないんだよ」

「ま、まだミツキ少尉がいますし、」

「あれ？　カタセ少尉って呼んでなかった？」

「あっ！？　き、気のせいです気のせい」

そんなやり取りをひやひやしながら聞いているミツキであった。
(俺、出れないじゃん)

ユーラシア義勇軍フェルディナント隊輸送機内居住区。

仲が悪いがコンビを組んで息ぴったりに戦うことで有名なベルトラン大尉とバリオー二中尉は部屋で話をしていた。

「しっかしまあ、少尉もやるねえ。連合の新型奪うなんてさ」

ベルトラン大尉はまだアリス少尉の功績を称える。後輩であり、フェルディナント隊の紅一点である少尉は何かと優遇されている。相部屋のところを一人で使っていたり、積極的に援護されたり、一方的に擁護されたり。

「俺的には敵の機体を使うなんて性に合わないがな」

バリオー二中尉はまだアリス少尉の功績を認めない。後輩であり、さらに何かと優遇される者の存在を快く思っていないからだ。

「お前は使いたくても使えないだろう？」

大尉は吸っているタバコの煙を吐き出しながら言った。

「ああ、連合の機体は扱いやすすぎて逆に扱いづらい」

「その点うちのは敵さんが扱いやすいからな、お前にお似合いだよ」
大尉は再びタバコを口にくわえる。

「はあ、これだから敗戦主義者は困る」

「なにが敗戦主義だ？俺はお前の自分至上主義のほうが困る」

大尉はタバコを灰皿で消火した。

「ふっ、あんな製造物アリスなんかを気にかけるとは、」

「てめえ！！ それだけはいただけねえな！ そんな言い方二度とすんじゃねえ！」

「おっと、この程度でそうなるとは。あれは所詮、実験体の試作品。大尉ほど気かけると後で後悔することになりますよ」

「後悔つてのは後で悔やむから後悔なんだよ。する前に後悔するばかりか」

製造物。しばしばアリスはそう呼ばれる。軍高官や政府高官にも

そう呼ばれている。

コードネーム
作戦名「Creating Angel」通称「戦闘天使開発実験」アリス少尉はこの実験により生み出された実験体である。

アリスは14歳まで普通の少女として学校に通い、友達を作り、生活をしていた。孤児院で育ったこと以外何一つ変わった事はない少女として。ただ普通でなかったのはその運動能力と学習能力。

テストは常に満点、走れば校内ダントツ、泳いでも一位、文句なしの優等生。両親がいないから、といって別に自分の境遇を悲観するでもなく、ただ普通の少女として生きていた。

「大尉、いらつしやいますか？」

扉を叩く音と同時にアリス少尉の声がした。

「話をしているとこういう展開になるな、大尉」

「だな、中尉」

大尉は立ち上がって扉を開けた。

「なんだ？少尉」

「大尉、隊長がお呼びです」

「そうか、少尉自らわざわざご苦勞！」

少尉という立場を使えばいろんな人を使うことができる。こんなことくらい誰かに頼んだって問題はない。

（そこが健気なんだな、少尉は）

「では、私はこれで。失礼いたしました」

軍人の挨拶である敬礼をする。慌てて大尉も敬礼を返す。少尉は格納庫の方へ歩いていった。

「なあ、そういう俺らも初めて自分の機体もった時、うれしくて格納庫に通ってたよな？」

廊下の角を曲がっていく少尉を見ながら大尉は言った。

「ああ、通いつめてたな」

最近は何も感じないが専用機っていうのはうれしいものだった。一人前と認められた気がして。拳銃や小銃の訓練の際もいつも決まった銃を使ってしまう。全く同じ製品でも自分の物には愛着が湧く

ものだ。機体に愛着も湧いて一人前になった気がした。

「日本人が物に名前付けるってのも分かる気がしたな、あん時は」

大尉は一旦ドアを閉めてタバコを灰皿にこすり付けて火を消した。
「そうだな、だが私はつけないぞ、物に名前をつけるなんてどうかしてる」

「では、俺は隊長のところにでも行ってくるか」

「ふっ、無能な隊長を持つと困るね、部下として」

「有能な振りしてる部下よりマシだ」

大尉ははき捨てるように言うのと部屋を出た。

気にかけてきているのか？俺は。少尉との年の差は10歳、少し歳の離れた妹みたいな感覚がしたりすることもあるが。それがすでに気にかけてすぎとなっている。

戦闘中、はつきり言って技術は少尉のほうが上だ。援護なんかしていられない状況もある。少尉は友人から引き離され軍人として戦場に出てきた。国を守るためという理由で出てきた我々とは違う。

「やだね、こんな戦闘天使開発実験なんか」

逆を言つとこれがなければアリス少尉がこの世に生まれることはなかった。そして生み出された天使が彼女だけでないことを彼はこのときまだ知らなかった。

19 ケンカが得意な死神部隊（主に隊長）

2238年4月8日

第一小隊の面々はポートエリザベス指揮本部に帰還していた。一応の初任務達成ということから司令ともあったのだが、やはりミツキの指摘していたあたりは伏せられている。明るみに出れば確実に反連合主義勢力を活気づけることになる。

しかしこれが出ようが出まいが、特務隊への風当たりは悪い。『日本人のくせに』と言われるのは日常茶飯事。因縁つけられるたびに大佐がねじ伏せるため、滞在が長引くたびそれはひどくなるだろう。この基地は、元不良やマフィア的人材が多い。非常時、こういう連中まで拾わないとやっていけないぐらい、連合の人材は少ない。そして今、彼らは得意な喧嘩の真っ最中だった。

「あれだけ威勢が良かったのに結局こんなものか」

大佐はアルミ合金製のトンファーを両手に握りながらいった。足元には三人組が転がっている。多人数VS一人なら別に武器使っても卑怯じゃないだろう。大佐は一对一でも使うが。

「く、くそっ！ 帰るぞ！」

リーダー格の中尉は部下を引き連れその場を去った。

「ふっ、雑魚どもめ」

大佐は立ち去る背中にはき捨てるように言うところりと身を反転させその場を立ち去る。いつもの猫背だ。

特務隊は主にブラスターの特殊部隊という活動をするため、ブラスター小隊とみなされる。そのため人数が中隊規模でも小隊と呼ばれる。その小隊を四つまとめて特務隊と呼ぶ。この猫背の男はその部隊のトップ。特務隊隊長、カワムラ ヤマト大佐だ。

喧嘩で武器を使うのは不良としてどうかと言われるがそのとき彼の反論は決まっていた。

『じゃあ戦場で会った敵に武器を使うなんて卑怯だつていえるのか』
喧嘩と戦争を同じように考えたら差異が生まれる。根本的に定義が違ふものだ。しかし大佐はその持論を通せる実力が伴う。

武器を持たせなくても彼は殴りあいの喧嘩ができる。武器使用は時間短縮のためだ。

戦争も同じ。

敵の武器と自分の武器が全く同じなら扱う技術を上げる。扱う技術の差が天と地ほどない限り時間がかかるから敵とその技術を圧倒する新兵器を開発、使用する。

持論を通すにはその確固たる理由、他人が納得できるほど圧倒的な理由が必要だ。中立を通すにも力は必要だ。いじめをやめさせるのにも力はある。物理的な場合もあれば精神的な場合もある。

「はあ。なんでこうも俺らは毛嫌いされるんだ？」

大佐は何年も前に結論がでたことを呟く。目の前に二人組みがいるが構わず前に進んだ。ガツツと肩がぶつかり合った。

「おいてめえ、何処に目えつけてやがんだ」

「何処につて頭、顔と呼ばれる部分の真ん中より上のほうに前向いてついてるが？」

自分の目を指差しして大佐的に丁寧な解説をする。

「お前けんか売ってんのか！？」

「君の質問に答えただけだ。それに私は無駄な喧嘩はしない主義だ」
これを横浜の裏路地では愚問と言う。

「どういう意味だそれ？」

「はあ、勝負が見える戦い、戦ってどうする？ 無駄だよ無駄」

「ああ、お前が負けるのか。大佐って事は勉強組^{エリート}ってことだしな？」

大佐になるのに何年かかるのだろうか。少なくともヤマトのように『功績を挙げていてなおかつ教育、孤児の保護等で活躍』でもしなければたかが二十才の若造はせいぜい中尉、大尉クラスか。

「なんで私が負けなきゃいけないんだ？ それに必死に勉強した覚えはないね」

ヤマトにしてみれば自分の腕と友との約束、これを信じ守っただけだ。

「まあどちらにしろお前には地に這いつくばってもらうがな！」

いわゆる単細胞な男は拳を握り手を引く。殴りかかる体制となる。なんて無駄な行動だろうか。

大佐はだらんとしていた右腕を腰の横あたりから拳を握って繰り出した。速さの差は歴然。一旦引いてる方が遅い。

それに殴り合いするなら、大佐のようにやった方が効率がいい。運動エネルギーは速さと重さで変わる。速ければ力は大きくなる。なにも一撃で仕留める必要性はない。すばやく連撃して倒す方がよほど現実的だ。急所を狙うのも効果的だ。

男は鳩尾に一撃くらい咳き込みながら崩れ落ちた。

「だから言っただろ？ 無駄だよ」

そう言って大佐は立ち去る。もう片方は大佐と目が合うなり逃げていった。

「なんでこうも喧嘩になるんだ？ 俺は」

そういいながら答えはすでに何年も前に導いてある。原因を自分自身で作りに出すからだ。相手の頭に血を上らせておけば、それだけ動きは単調になる。少なくとも手が少なくなるのはたしかだ。

それと同じ。

すべて冷静にやればいい。頭に血を上らせるだけ時間の無駄だ。

また目の前にうざったい連中がいる。リーダー格と思われる男は女を連れている。軍人が恋愛するだけ時間の無駄だ。なぜこうも女を求める。

（お前が戦死したらその女性はどうするんだ？）

「こいつです！ さっき俺らをやったのは！」

「トンファー使いですぜ」

さっき倒した連中だ。

立ち直りが早い、手加減し過ぎたか。手加減しないとトンファー

は本物の凶器、殺人武器になりえる。

武術は殺人のためにあるわけではない。

こう考えるヤマトだが、喧嘩の道具でもない。

「よくも俺の仲間をかわいがってくれたなア！」

仲間？くだらない。こんな雑魚集めて何になる。

「ん？ お前どっかで見たことあるな」

「私は貴様を見た覚えはないがな」

「連合の死神、お前あのカウムラって会社の御曹司だろ？」

「確かにカウムラだがあの会社の御曹司になったつもりはない」

「連合の死神と戦えるとは好都合だ」

（何が好都合なんだ？俺の時間が減るだけじゃないか。それともあれか？制覇が何たらか？）

赤く染まった横浜の裏路地を思い出す。

「お前と戦ったところで私に利点はないけどな」

「ここでお前を叩けば特務隊は軟弱な部隊になるな」

（軟弱って何だよ軟弱って。貧弱とか弱小って言うんじゃないのか？それ）

面倒なやつらだ。隊長が負けたらその部隊は弱いと。そういう考えか。

ふと視線を落とすと、こいつの胸の辺りに輝くもの、ブラスターパイロットの証がついている。

「お前ブラスターパイロットか？」

「ああ、そうだ。このポートエリザベスのエースさ」

自称エース。なら一瞬で終わらせる自信しかない。日本のエースと戦ったら三十秒かからない。

「じゃあ、シュミレーターで戦うか？」

これなら痛くなくて済むだろう。

「なんだ？ 負けるのが怖いのか？」

（コイツ、挑発してくるとは。私がこれに乗ると？）

「これなら痛くなくて済むだろうっていう私の配慮だが？」

「んだてめえ！？ なめてんのか？」

「貴様のようなものをなめるようなおぞましい趣味はない」
そう言っている最中、男はこちらに向かってきた。

（ほーら、こうなった）

「てめえにはこの俺の恐ろしさを教えてやるよ！」

「あいにく、そんな時間はないのでな。貴様と違って私はそんなに暇じゃない」

大佐は男の攻撃を軽くよけた。

「てめえ！！」

男は大佐の方を向きなおすとまた殴りかかる。

「愚かな奴め」

「！」

大佐は腰にある伸縮式トンファアを伸ばし、男に叩きつける。

「がはッ！？」

執拗に何度も体のいたるところを鉄の棒で殴りつける。目にも止まらぬ速さでトンファアを振るう。完膚なきまでに叩きのめす。二度と喧嘩をしようなんて思わぬほどに。殴っている大佐の目は、不良のというより、狩人の目だ。周りの連中は恐ろしすぎて動けなかった。

誰の助けも受けられず、一方的に殴られた男はいたるところから出血し倒れた。

「ほら、時間の無駄だった」

トンファアを縮めて腰のホルダーに引っ掛けるとそっくり残し、

大佐は去っていった。

（あのまわりの連中が仲間なら、自分の身を張ってでも助けたくなくなるぐらいのリーダーになれよクズが）

そしてホームグラウンド、特務第一小隊にたどり着く。あくびをしながらミーティングルームの扉を開ける。少佐かなんかがいるだろう。

だが目の前の光景は違った。

なぜかボタンが全部はずれた軍の制服を羽織っている状態の准尉と、准尉のスカート持つてる大尉がいた。

「あ？」

なんだこれは。

「ッ！？ キヤアアア！」

准尉が悲鳴を上げる。それと同時に大佐はくるりと反転してミーティングルームから出た。

「？」

扉が閉まったと同時に後ろを向く。なんでこんなところで着替えてんだ？ 自分達の部屋ですりゃいいだろうに。確か大尉と准尉の部屋は隣同士。そっちの方がこのようなことがなくて済むだろう。

それとも大尉のあれがエスカレーターしていったことによるものか？

「おいヤマト！ なんかすっげー悲鳴聞こえたけどまさか！」

ハジメ少佐がミーティングルームの方からやってきた大佐を捕まえた。

「まさかってなんだまさかって」

「ミーティングルームに入ったりしたのか？」

「ああ、准尉と大尉がいた」

さっきの情景的にたぶんいつものあれ発展版だろう。

「なんでこう大佐にはノックするっていう習慣がないんですかね！？」

うしろにいたハルカが怒り出した。悲鳴と部屋に入ったという事実で十分だ。

「そのまえに何であんなことしてるのかのほうが不思議なんだが……」

「確かに」

ハジメ少佐も大佐の意見に同意する。なぜこうなったのか、それは本人達しか知らない。思えば初日からこうだったような気が。

「確かになんのためにしてるんでしょうかね？」

怒りを自力で静めたハルカも同意見だった。少し考えた挙句、ハルカは一人で赤くなった。なんか恥ずかしいことでもあったのだろうか。

「なんか赤くなったぞこいつ」

「まあいろいろあるんだよ、人には」

「いろいろとはなんでしょうが、いろいろとは。よろしければ憲兵隊のほうに」

大佐の隣、足元には『地面に頭をこすり付けるように』という表現そのままの少佐がいた。

女性の必殺魔法の言葉、それは『この人痴漢です』ということは世界的常識となりつつあるようだ。

そしてこの魔法、派生系があることをお忘れなく。

20 基地のご飯と業務放送

あつという間に夕方。日も暮れてきた。今日は喧嘩しかしてない気がする。まあ何がともあれ人間食べなきゃ生きていけないので、基地内の食堂へ。

「にしても面倒な一日だ」

大佐は頭を掻きながら言った。

「お前の一日はいつも面倒なんだな」

大佐の独り言に少佐が介入する。

「確かに大佐はいつも面倒って言いますよね」

大尉も会話に参加。

「そんな面倒な日でした？」

少尉も会話に参加する。少尉の大佐への感情も少し和らいだ。父の話も聞いたし、いつまでもとがってるわけにいかない。大佐にもいえない事情があるようだし。だが、あの時にできた不信感は全て消え去ったわけではない。

「大佐は面倒って言うくせが昔からあるんです」

そう言うとはルカはスープを音も立てず上品に飲む。

「そういえばルカと大佐は昔っから一緒にいたね。すっごく楽しそうだった」

対照的にセツナは音を立ててスープを飲む。

ハルカとちょうど今も隣にいる。大尉は滅多に男と喋らないハルカが楽しそうに男と喋っているのを見たことがある。その相手はこの大佐だ。あの時正直びっくりした。

「確かにいたな。初めて会ったのって確か俺が8歳だから、お前6歳の時か？」

自宅の前で転んで泣いてた結構きれいな服着てる子、それがハルカだった。

「5歳の時です」

社長令嬢は幼いころから大変なようだ。

「細かいな、相変わらず。そういやあのときお前の誕生日まだだったか」

「はい、まだでした」

「なあ、俺には楽しそうの欠片も無いように見えるんだが」

冷め切った家庭ってこんな感じなのだろうか。喋ってる時点でそこまで冷めてはいないのか。

「うん、私にも見えない。ルリは？」

急に人に振るのはその話を振られた相手に多大なプレッシャーをかける。

「えっ？ あ、み、見えない、です、ね」

ちゃんと発音ができているのかいないのか分からなかった。

「何でそんな片言なの？」

「だ、だって大尉が！……大尉が」

いきなりスカートひき下ろされ、びっくりしている間に少佐と少尉、そしてハルカもミーティングルームを後にした。さらにボタンはずされて、引っ張られて、困っているときに大佐が。

（穴があつたら、入りたいです）

「はあ、面倒な世界だ」

「おいおい、あれ連合の死神じゃね？」

「おつ、ほんとだ、連合の死神」

「連合の死神ってあのエース？」

「わ、やばっ！意外とかっこいいんですけど！」

パイロットだろうがそうでなかるうが知っている。それに特務隊他2つの、国防委員会直轄部隊の制服はほかの士官やパイロットと違い、黒基調である。

「大佐、なんか話してるよ」

大尉は見たまま聞いたままを伝える。

「どーでもいいよ、面倒くさい」

「大佐、面倒って言葉やめませんか？」

「じゃあ煩わしい」

「違う言葉にすればいいんじゃない？ ポジティブな言葉にさ」

「例えばどんなのだよ」

「例えば？ ……。なんかポジティブな言葉ない？ ミツキ少尉」

少佐は急に話を振る。

「例えば？ ……。いや、思いつきませんね。准尉に聞けばいいじゃないですか」

大佐からポジティブなんて言葉は出てこない。そんなどつかの夢と魔法をくれる場所を闇と絶望を与える場所にしかねない人から前向きなんて言葉は出てくるわけがない。

「わ、私ですか？」

「んじゃ、准尉」

少佐は直々に指名する。答えなくても大尉が援護、というか先走って攻撃するので安心だ。

「え、と、ポジティブな言葉？ ポジティブな言葉、ポジティブな……」

大佐に似合いそうなポジティブな言葉。そんなものあるのか。大佐のことを考えるとさっきの出来事しか頭に浮かばない。そしてそれが頭に浮かぶとあの恥ずかしさを思い出し、思考は停止する。

「だめだ、准尉はしばらく使えない」

「ていうか、大佐ってポジティブな感じしないよね」

大尉は軽く突き刺さる言葉を平気で言う人種である。

「だろう？ 私にポジティブな言葉は合わない」

「かもしれない」

少佐もヤマト自身が認めるものを否定するつもりは無い。少佐が言ったと同時にピンポンパンと電子音が鳴った。微妙に緊張した空気を和ませることのできる気の抜けた音だ。

特務隊のカワムラ大佐、特務隊のカワムラ大佐、司令部より出頭命令。繰り返し、特務隊カワムラ大佐、司令部より出頭命令

「出頭命令だつて」

大尉は大佐に伝える。

「いちいち言わなくても聞こえてるからさ」

大佐はやめようか、とも言いたげな目で大尉を見た。

「なんのようだ？まさかまた問題起こしたんじゃないだろうな？ヤマト」

「いや、そんな覚えは……ん？ そんな覚え……あるね」

「はあ。昔はこんな人じゃなかったのに」

ハル力は頭を抱えた。はじめて会ってから大佐が中学に入る頃まで、確かに乱暴といえば乱暴だったがもつと喧嘩をしないように努力していた。

「やさしいおにいちゃんだったんだよね？」

心なしか、『お兄ちゃんとかww』って思ってる感じがする大尉はにやけながら言った。

「な、何言ってるのよセツナ！」

「昔はおにいちゃんって呼んでたんでしょ？」

知ってるよ、そのくらい。あとこれが一番恥ずかしい思い出ってこともね。

「……」

ハル力は真つ赤になって口を閉ざしてしまった。

「ですよね大佐？」

大尉はなおハル力を穴があつたら入りたいを通り越すくらいの恥ずかしさを味わわせようとしている。

（なにがあつたの？ハル力さんとセツナ大尉に、何があつたの？！）

ルリ准尉は一連の会話からセツナがハル力に何か恨みがあるのかと思い始めた。

（なにがあつたんだこの人たち）

少尉も考えることは同じだ。

「はい、おにいちやんでーす」

大佐は無駄に手まで挙げて棒読みで答えた。

「黙れ！！」

直後に右側から一撃。音もなくソファに突っ伏す。

「あゝあ、痛そー」

「あゝあつてお前が煽つたんだろ」

「ふっ、バレたか」

「ばればれだ、別にそんな帽子に手をかけるポーズしなくてもバレてるから平気だ」

「もう！ なんなの？ 少しくらいのつてくれたっていいじゃない」
大尉は急にふてくされる。

「で、では、わ、私は、司令部とやらに、行つてきまーす！！」

かつてないほど軽快にイスを乗り越えたと目にも留まらぬ速さで走つていつてしまった。

「よっぽど、怖かつたんだな。ヤマトにしては珍しい」

「やっぱり怖いもんね、ハルカ。ひよつとしたら、大佐があんなふうになったのもハルカにひどいことされて」

「してません！！」

ハルカの一喝により、セツナは口を噤んだ。

「大尉を瞬時に黙らせるほどの恐怖と言ふことか」

「少佐、黙っていただけではない場合には准尉をあんなことやこんなことを使用して憲兵隊に」

「すみませんでした！」

どっかで見た構図だが、少佐は一応謝る。何しだすか分かったもんじゃない。

（というか准尉をそんな道具みたいにな）

憲兵隊、日本では200年ほど前には第二次世界大戦終戦までの日本軍にあったという部隊がやたら高圧的イメージで浸透していたのに対し、現在はクリーンなイメージに変わっている。

しかし厳しいけどやさしい先生的なイメージを持って入隊すると痛い目にあう。

学校と違い、「程ほどに」体罰が行われる。

そして人により程度は様々だということを覚えておいてもらいたい。（ヤマト談）

ポートエリザベスの憲兵隊は鬼が島から来ているようだ。（by マサキ）

なんと厄介になったことだろう。

21 基地司令との会談

大佐は司令のいる部屋の扉を叩いた。

「特務隊、カワムラ ヤマト大佐であります」

「……入りたまえ」

許可されたようだ。

「はっ、失礼いたします」

そういいながら大佐は扉を開けた。こういうところは自動でなければ横にスライドさせる扉でもない。一般的なドアノブ握って下げて引くという開閉動作が必要な扉だ。

「君があ有名なカワムラ社の、」

「あー、御曹司とかではないですのでそのへんは」

「おお、そうだったか」

そう言うところ司令は書類をどかして机の上のスペースをあけてから話し始めた。

「いつも娘がお世話になっているね、あいつはどうか？」

「セツナ大尉は小隊のムードメーカー、あ……後方からの支援砲撃で活躍が期待できます」

さすがに軍人がムードメーカーとしての活躍を期待されているだけでは評価的には下の下である。

「そうか、では早速本題に入ろう」

（ずいぶんと唐突に話題を変える、なにかあせってるのか？）

誰からも慕われることで有名なオツ力司令は軍高官にも認められている。その統率力と自身の責任感、一般将校の群を抜いている。そして誰とでも会話を弾ませることも知られている。

その血の入った大尉もこうなるのだろうか。

「それは、先ほどから兵の動きが慌しくなっているのとの関係が？」

「さすが連合の死神と呼ばれるだけのことはある。まさしくその通りだ」

慌しくなる、軍でこうなることといったらお偉いさんが来るか、敵襲。ここが司令本部であることを踏まえるとどこかが攻撃を受け、交戦中、もしくは陥落か。

お偉いさんが来るなんてうわさも連絡もないし、お偉いさんに疎まれている特務隊がいる場所に来ると思えない。

「誰だつて分かります。ルワンダあたりで交戦ですか？」

「いや、やはり連合の死神だ。そう、ルワンダにユーラシア軍の大部隊が攻撃をかけてくる可能性がある」

（まだか、それは良かった。あそこの貧弱さは毎回議題のトップだからな）

「敵の規模は？」

「航空機の熱紋照合と画像によると、前線基地にしてはブラスターと輸送機が多くてな」

そついいながら司令は手元の書類と写真などを大佐に手渡した。

「その中に新型は？」

ブラスターのおよその数は書いてあるが機種は書かれていなかった。

「それは分からないが照合によるとこの前、本部から機体を奪取した部隊の逃走に使用した輸送機がいるとみられる」

「では、新型がいる可能性が？」

「敵もブラスターという兵器を研究したがっている。連合の最新技術で作られた機体、投入を惜しむとは思えない」

解析して、同じものを作ればそれだけ連合には脅威となる。しかし、それはさすがにユーラシアのプライドが許さない。

コピーして使うなど技術者にとって耐え難いものだ。それも自国の未来を託す機体。自分達の技術で作りたいはずだ。

本来の試作機としての側面を利用するだろう。理論を構築できれば自国の機体完成度は高まる。あそこはそついう国だ。

「そつですね、……こちらの戦力は？」

こちらの戦力も書かれていない。

「あちらのブラスター部隊の増強を進めている。しかし新米が多くてな。特務第一小隊にも加勢してもらいたい」

「何をすればよろしいので？」

「新型の奪還、もしくは破壊、どちらかだそうだ」

まるで他人事のような口調で司令はいった。

（本国から、いや本部からか、しかし一度失敗した人間に任せるとは）

現に連合は人材不足である。上層部も特務隊を疎んでいるが実力を評価していないわけでもない。これがアメリカ人だったらどんなに優遇されることか。

「ずいぶん簡単そうにおっしゃられますね？」

「君が取り逃がした機体だろう？ならば君が責任を負うのは当然だ」
そういいながらも司令の表情からは、大丈夫だという感情があることを思わせる。

（さすがオオツカ司令、部下に自信を持たせるのにも長けておいでなようで）

思わせるだけなので実際にそうなのは大佐にも分からない。

「厳密に言いますと私ではなく少将が取り逃がしたのですがね」

「そうなのか？」

「私の機体では追いつけませんので」

司令には言い訳にしか聞こえていないだろう。

「そうか。しかし今回の作戦ではそんな言い訳は聞きたくない」

「あくまで攻撃の可能性でしょう？」

「まあそうなのだが……」

司令は浮かない顔をした。

（やはり、第二師団と言えど叩かれたら持ちこたえられるか……）
「了解しました。準備を開始させます」

大佐はソファから立ち上がり、司令に敬礼した。

「アイツなんて呼び出されたんだ？」

少佐は母艦である浮遊航行型巡洋艦「みなかみ」へ向かう途中、大尉たちと会話をしていた。

「さあ、また喧嘩でもしたんじゃない？」

大尉は相変わらず少佐を上官として認めていない。認められたら少佐も一人前ということか。

「それはないと思いますが」

ミツキは喧嘩をした説を否定する。

「なんでさ？ミツキ君」

「大佐を叱れる身の程知らずはいないかと」

「……確かに」

「そりゃそうだね」

「でも、大佐と言えど万能ではないですよ？」

ルリが介入してきた。

「そりゃまあ、人間だもん」

「そういう万能ではなくて、上層部との付き合いです」

ルリは少し冷たい視線を大尉に送る。

「いや、あいつのコネなめてんとすごいことになるぞ」

少佐はいつにも増して険しい表情で勝手に語り始めた。

「えっ？どんな感じに？」

「まず、アイツの爺さんの派閥の人だろ、結構上の方の人が多いんだよ。んでもって、国会議員とかにも何十人か知り合いがいて、連合で一位二位争うほどの弁護士たち、アルブルのお偉いさんとローレンツのお偉いさん、国防省と国家公安省のお偉いさんもいたぜ」

「えっ！？」

ミツキは飛び上がった。

「私、そんな危険人物と対等に話してたの？」

セツナのスラリと伸びた足は恐怖で震えている。うわさによると、大佐は階級を下げる力があるとかなんとか、半信半疑だったが本当だったとは。

「別に平気だろ、お前そんな怒らせるようなことしてないし、アイツは女をどうしようって奴じゃない。なんかあったらしいからな」

少佐はセツナの足が震えていることに気づきフォローする。

「なんだ、よかったあ。でも何があったの？」

さすが切り替えだけはすばやい大尉だ。

「そこまでは知らない」

いつもなら役立たずと言われるのだろうが、最近少佐の地位は向上したらしい。

「やっぱしハルカが？」

「違います」

ハルカがセツナの頭に一発ゴツンと入れているところに館内放送が入る。

特務第一小隊旗艦『みなかみ』のクルーは直ちに『みなかみ』ブラスター格納庫へ集合せよ、繰り返し。特務第一小隊旗艦『みなかみ』のクルーは直ちに『みなかみ』ブラスター格納庫へ集合せよ『召集ですね』

ルリ准尉はそう言うとききに歩き始めた。

「ではいくとしますかア」

少佐もそれに続き歩き始める。

「痛いよハルカ」

大尉は頭を押さえて何かを訴えている。

「……」

ハルカは知りませんとも言い出しそうな顔で大尉の言葉を見無視して歩き始めた。しかし大尉は歩き始めようとしない。

不思議に思ったミツキは大尉に話しかけた。

「セツナ大尉、行きますよ？」

「わ、分かってるよ」

わざとかどうかは分からないがフラフラしている。

「大丈夫ですか？」

「ん？たぶん」

ぎこちないロボットのような歩き方でフラフラしているので危な
っかしい。

「うわっ！？」

大尉は何もないところでつまずいた。

「おっと！」

転んだ大尉をミツキは受け止める。

「危ないなあ。大尉、怪我とかありません？」

大尉を元の体制に戻した後、一応聞く。この大尉が怪我なんてし
ないんじゃないかとも思っていたりする。

「うん、ないと思う」

足もひねっていないようだ。

「このまま行くと遅れますよ？」

そういうとミツキは大尉に手を差し出した。

22 棚に上げよう自分の不祥事

「はあ、やつとついた」

セツナは大きくため息をついた。ここは浮遊航行型巡洋艦「みなかみ」格納庫である。まわりを巨人に囲まれる感想はなんともいえない。恐怖は感じない、しかし圧迫感是否めない。

「ありがとね、ミツキ君」

「どういたしまして、大尉」

「少尉と大尉がなかよくなってる」

大佐が微妙に語尾を震わせながら言った。

「ヤマト、人にはいろいろとあるんだよ」

ハジメは諭すように言った。

「いろいろって少佐、別に何もないですから」

ミツキは少佐の言ういろいろなに含まれている意図を察知し否定する。

「ひ、否定するところが怪しすぎます！」

ルリ准尉がこれに反応した。

「ルリ？ ミツキ君が気になるのは分かるけどさ」

「き、気になってなんかいません！」

「少尉はいろいろ大変だなあ、それに比べて俺は」

少佐が少し小さくなつた気がする。

「いろいろってだから何もないですから」

「いや、准尉の言うことも一理あるぞ」

大佐が急にいつもより低い声色になった。

「また少尉をはめる作戦でもするんですか」

ハルカの冷たい声がヤマトに突き刺さる。先ほどから機嫌が悪いようだ。

「ちがうさ。まあともかく、犯人が証拠もなしに自白する例はあまりないよな」

それを聞きルリがミツキを指差しながら言った。

「や、やっぱり！ セツナ大尉とになにか」

「ない！」

ミツキは否定する。

「ルリ、心配しなくても私はルリを応援するから」

「連れてきてもらった割には直るのがお早いようで」

ハルカの冷たい声が響く。

「これでもまだいつもの120パーセントも出てないんだよ！」

セツナの訴える声が響く。

「へえ、いつも100パーセントは出してたわけね。どーりでうるさいったりやありやしない」

「いつも一言余計なのよハルカは！ ババアみたいな考え方しやがって！」

「なんですって！？」

「なに？ やる気？」

両者はにらみ合いを始めた。かつての冷戦というのより目先のこの争いの方がよほど恐ろしい。

「だれか、あれ止めてこい」

そんな彼女達を横目にヤマトは部下に指示を出した。

「大佐が行けばいいじゃないですか」

「言うようになったなミツキ少尉」

大佐の言葉にミツキはうぐつと言いたいことを飲み込む。

「か、階級を出すのはどうかと思いますよ、隊長」

ルリ准尉がなぜかあわてて助け舟を出す。

「じゃあハジメ行ってこい」

ヤマトは対象を即座に切り替え少佐の方を見た。

「俺！？ 何で急にそうなんだよ！ 流れる的に准尉だろう？」

ミツキ少尉の次は、ミツキ少尉の次に口を開いたルリ准尉だろう。「君はそうやって部下に押し付けるのか？ 自分がやりたくないか

らって」

言っていることは正しいかもしれないが状況に全く合わないことを平然と言ったのける。

「隊長がなさっていることもそれですけど……」

少々困惑気味な准尉がそれを指摘した。

「よし、決定だ！ ハジメ、いつてこい！」

「だあ何で俺なんだよ！」

「これは決定事項だ！民主主義的に全会一致で決まった議決だ！」

自分の理論は筋がどうだろうと主張する。それがカワムラ ヤマト大佐だ。

「議長１人の決定ですけどね」

「確かに大佐１人ですね」

「そういうミツキ少尉こそを行かせるべきじゃないか！」

「あのケンカ止めに介入する人はいないかと」

そういいながらミツキ少尉は後ろを向いた。セツナとハル力は得体の知れない何かを投げつけあっている。

「何投げてんだ？ あれ」

ハジメは金属的に光っていることしか分らない。

「見た感じ、レンチのようなものだと思います」

「俺もそうじゃないかと思う」

「ここ格納庫ですもんね」

「レンチ？んな物騒な」

一本こちらに飛んできた。

「うわっ！」

ミツキは腕で防御の姿勢をとった。

「ちっ」

「ひゃっ！」

大佐は准尉をかばう形で前に出た。

直後に鈍い金属音。と、グエっという音。レンチが後頭部に吸い

込まれるかのように当たる。そのまま少佐は前に倒れこんだ。

「あゝあ」

「少佐!?!」

「少佐!」

後頭部から血を噴出す。

「こりゃ説明どころじゃねえな。おい! 救護班呼んで来い!」

周りの兵に大佐の指示が飛んだ。

「はっ! 直ちに」

そう言つと兵はどこかに走っていった。

セツナとハルカのけんかは先ほど終結した。たぶんマサキ大佐だったら二人にこう言うだろう。『お二人の顔にあざが、何てことだ! お二人の顔に傷が! ああ、なんということだろうか。神はなぜ二人にこんな仕打ちを』というかこんな状況のときに以前言っていたしそのまえにも言っていた。そして神の仕打ちではない。

「はあ、ハジメはまだ寝ちゃってるし、ハルカはあざだらけだし、セツナ大尉は傷だらけだし、いったい何したらこんなになるわけさ」

「それは……、セツナがぶつてきたから」

「……ハルカが引つ掻いてきたんだよ」

「レンチが飛んできたからですね」

それぞれからの確な答えが返ってくる。

「まいっか! さあみんな、戦闘になるかもしれないから準備を開始しようではないか!」

この言葉に皆手を動かし始めた。整備班はブラスターのパワーユニットの異常チェックをおこなう。

「いいんですか?」

「いいのだよ少尉。我々はルワンダで戦闘をしなければならぬかもしれない」

「それと少佐の件って」

「全く関係ない！」

「で、ですよ」

（ひどい人だな、少佐も大変だ、いろいろと）

「では私は少佐の様子を見てきますね」

「いつてら〜！ ルリ准尉！」

大佐は大きく手を振る。途方にくれる友人を見つけたわけでもないのに。

「いつてきま〜ひゃっ！」

准尉も手を振り返す、が後ろにいた整備班とぶつかった。

「准尉ってあんなことまでするんですね、ちよつと驚きました」
人にあわせるのが急にうまくなったんじゃないだろうか、最近。

「基本のときはのれるからな、あいつは」

上から落ちてきたレンチが音を立てた。

「うわあ！ びっくりしたあ！ ……ひゃあ！」

准尉は下においてあった工具箱に引つかかって倒れた。

それを後ろから見守る二人はなかばあきれていた。

「なんか心配になってきますね」

「……そうだな、工具箱に乗る必要はないのだが」

大佐はため息混じりに頭を掻いた。

「それでこそ、それでこそルリだよ……」

「そんなに好きなの？」

あきれたハル力が問いかける。

「そりゃあもう！ 大好きだよ！ ちっちゃくてね、手がねこのくらいなんだけどね、握るとすぐあつたかくてね、プニプニしててね、ぎゅって握ってくれたときの感触がもうなんともいえなくて！
それでね、」

これは……地雷だったようだ。

（でも、いつもの120パーセントのときよりいい顔してるよ）

これだけ聞くと赤ちゃんの話のようだがルリ准尉は立派な16歳の少女である。

「少佐、大丈夫ですか？」

ルリ准尉は医務室のベッドに寝ている、というか横たわる少佐に話しかけた。

「ん？たぶんな」

もう起きているようだ。

「たぶんですか」

「たぶんです」

しかしこちらを向こうとしない。ずっと壁の方を見ているようだ。少佐は包帯が頭に巻かれていて、絆創膏のような物が張ってあり傷口が一目で分かる。

「えいつ！」

ルリは傷口を押してみた。

「ぐわああー！ な、何をするんだ准尉！」

痛みからか顔がいつもより引きつったようなものになっていた。

「俺の頭はボタンじゃない！」

「いやー、こっち向いてくれないからさあ」

「な、なぜあの大尉のような口調に……」

天敵セツナ大尉の口調に微妙にびびる。いつもより准尉も声を低めに行っているようだ。

「セツナ大尉ならこうするかなって思ってたさあ」

「なぜにセツナ大尉なわけで？」

「少佐はセツナ大尉と一緒にいると楽しそうだなあって思ったから、アハハ」

そっぴいとセツナの笑い方までして見せた。

「お前あいつの妹？」

「違いますか？」

ここは少し違う。さすがに完璧にできたら怖い。

「じゃああつちにやってくれば？」

「それは、お断りしておきます」

いつものルリ准尉の口調に戻った。少佐的にはひとまず安心である。

「Why？」

「まねするなつていつにも増して変なことされますので」

「じゃあハル力さんとかヤマトとか……、あつ！ミツキにしてください？」

「ふざけてたりしますか少佐？ よろしければ、憲兵隊のほうに虚偽申告をいたしまして、」

「すみませんでした！」

なんだこの感覚は、本物より恐怖を感じる。

「ともかくだなあ、こういう騒ぎをおこすのはやめていただこうか？」

大佐は頭を掻きながら言った。足元には正座した二人の女性。

「大佐にだけは言われたくないことですね」

とハル力が。

「あたしもそう思う！」

と同意したセツナが。

「じゃあ部隊内だけが人を出すな。俺らはそうでなくても疎まれてるんだ。内部で争いしていると思われたら面倒なんだよ」

「それはそうですか」

ハル力はなにか説明に困った顔をした。

「そういえばそうでなくても疎まれている部隊の隊長を名乗る人物が殴り合いして医務室に50人来たって怒りの通達が来てるけど？」

セツナは大佐に怯むことなく切り札をいきなり使う。いや、切り札を使うところすでに怯んでるのか？

「あゝそれはだなあ、……なんだろうね」

「なんか大佐のそういう態度、すぐム力つきますね」
急にむっとした顔に変わった。完璧にふくれっつら。

「大佐だって説明できないじゃん」

『先生にできないことを生徒に押し付けるなどか』言っただんた
ろうな、この人。

「えーと、この場合ム力つくではなく正しくは腹立たしいだぞ」

「はいはい、無駄な豆知識披露する前に説明していただきましょ
うか」

（ずいぶんと実用的なのだが？ 少なくともお前らのデザートがど
うたらより数倍役立つ）

「大佐、そういうの論点のすり替えっていつんだよ」

「くっ！なぜ二人にはこれが効かないんだ」

いつもの技は完璧に押さえられている。

「普通効きません」

「さあ大佐、ご説明を」

大佐も苦肉の策で応戦した。

「これも論点のすり替えじゃないか？」

「違います」

「違うよ」

効果はないようだ。

「……………」

ヤマトは珍しく、冷や汗をかいた。……………完敗だ。

23 ルワンダへ行く前に

2238年4月9日午前10時 ポートエリザベス

『いいねいいねえ、おまえのとは！ ハルカさんがいてセツナさんがいてさあ！ 両手に花だねえ！』

「みなかみ」の艦橋大型ディスプレイには男性が映っていた。

「現実的には両手に悪夢だがな」

「なにかおっしゃいましたか大佐？」

ハルカさんの冷たい声が響いてきて背筋が凍る。

「マサキ、ここはなあ楽園だぞ楽園！ 女神が二人もいるからな！」

腰に手を当て自慢げに、そして少々投げやりに言った。

『いや、三人だな。ルリ准尉を忘れていた』

と言うと申し訳なさそうに頭をうなだれる。

「俺的には女神と認識するには早すぎるな。なんか功績があるわけでもないし」

『いやもう容姿的には神の域に達している！ すばらしいでは表しきれない！ とうか神だ！』

ルリ准尉はいつの間にか彼の中でヤハウエと並んだらしい。キリスト教徒としてそれはどうなのだろうか。あ、でも容姿的なら別にいいのか。

「まあそれは置いておいて、本題はなんだ？」

マサキの神発言をスルーして用件を聞く。

『おお！？ よく聞いてくれた！ 実はだなあ、なんと我ら第四小隊は……』

「ルワンダ戦参戦か？」

『なぜ先に言う！？ ひどいねえ、お前は昔から。そういうのは言わずに待つとくもんなんだよ！』

「で、なんか用か？ それだけか？」

『つきましては我が第四小隊、到着が少々遅れそうで』

顔に手を当て、いかにもな雰囲気を出そうとしているのだろうか。整いすぎた顔じゃかつこつけにしか見えない。わざわざかつこつけなくてもついているというのに。なぜそんな無駄なことを。

「ほう、それは派遣先が問題か？」

『ああ、さすが地元！ 俺って知名度高いのか？』

「お前がそう思ってることが不思議でならない」

絶対コイツは俺は有名人とかそういうの鼻にかけるタイプだと思う。

『俺は幼稚園児に抱きつかれちまってよオ』

「はあ、なんだなんだ？ またお前のシュミか？」

コイツのシュミは少し変わっている。たしかあの小説が語源の…。

『まてまて、今回は遂行を第一としている。シュミは二番目だ！』
「相当上位だな」

「隊長、基地司令より司令部へ出頭せよとのことだ」

そこにハルカの業務的ボイス。

『呼ばれたようだな、ヤマト』

「お前もそのうち呼ばれるよ」

いや、逆に令状持った人たちが来るのか。

『フツ、お前ほど司令部の構造知ってる奴はいないだろうな！』

「俺もお前ほど取調室の構造を知ってる奴は会ったことがない」

「ねえ、整備班長さん？ これ、調整できてんの？」

「大尉の機体データは移行してあります。細かい調整は順次やっていってもらう形になります」

大尉は珍しく機体の前にいた。大尉の異名は、雨降りキューピッド。大尉はこの異名を毛嫌いしており、そう呼ぶと身の安全の保障はできない。肩部分には矢が刺さってひび割れたハートが描かれている。

「はあ、結局実戦？」

「シュミレーターでも平気だと思われませんが」

「そう、じゃあやつとく」

そついうとセツナ大尉は愛機、ステインガー2に乗り込んだ。

「准尉、前回の戦闘データの反映完了しました」

目をこすりながら整備班の技術二等兵が報告しにきた。

「はい。おつかれさまでした」

ルリ准尉は頭を下げた。

たまにいますが、階級が上の人間ほど下の階級を見下すようになる。そうしないとやっていけない場面も多々あるが、少なくとも整備班とパイロットの信頼関係は重要である。自分が壊した機体の整備、自分ができないことを人にやってもらうのに感謝のひとつもないなんて、人間としてどうかと思う。

ルリ准尉は初日に挨拶して回り整備班の顔と名前を覚え、大尉もあの笑顔で整備班を和ませる。このコンビはある意味、部隊内で最大の権力を保持している。

「お呼びでしょうか、司令」

ドアを開け司令室に入るとそつ切り出した。

「おお、きてくれたか。カワムラ大佐」

そついうと司令は席を立つ。

「司令、なにかあったのでしょうか？」

「ああ、まずこれを見てくれ」

そういうと司令の後ろにスクリーンが現れる。

（レーザースクリーン……、使いどころが違うのではないか？）

重量を押さえる目的使われるもので、反射板を使えば複数の場所に同時に映像を映すスクリーンとなる。現在、飛行機内やバス内で使われている。

映像が流れ始めた。ノイズがひどい。音もよく聞き取れないが、これは……。

「……ルワンダ、ですか」

「そうだ。これはルワンダの現在の様子だ」

この映像は基地にあるカメラから撮られているのだろう。広大な戦場を限定的ながらも見渡せる位置にあるものだから、よく見える。木々は燃えている。戦車と思われる車両が何両か、向こう側には型の違う戦車が何十両か。人型兵器は殴り合い中。映っている建物類は全て屋根が吹き飛んでいたり、壁が崩壊していたりする。

急に爆発が起こる。たぶん空からか。プロペラ機が何機か映っている。こんな断片的状況把握しかできないが、ひとつだけ言えることがある。戦力的に連合は圧倒されている。

（今加勢しに行かねばルワンダは落とされる。子供でも分かる）

「つまりさっさと行って来いと？」

ヤマトは少しにこやかに言った。ヤマトがにこやかになるときはそれ相応の見返りが期待できるときだ。

「そうなるな」

（回りくどく言わずにさっさと伝えて思っつのは俺だけじゃないはずだ。時間の無駄だ）

にこやかな表情で不満を考える。

「それと君の取り逃がした新型が確認されたそうだ」

「正しくはブランドナー少将が逃がした新型です」

ヤマトは細かいところを訂正する。少将からしたら非情に迷惑な行為だ。これでは小学生のコイツがトイレでなんたらしたんだぜと大差ない。

「そうだったな、それともう一つ、第四小隊が加勢することになっている」

「ああ、それならすでに聞いております」

「なら話ははい」

「では、出撃いたします」

「出撃は正午とする。特務隊、期待されていることを忘れないようにな」

「はっ！」

大佐はピシッと敬礼をした。士官学校で一番きれいな敬礼と言われただけの事はある。

巡洋艦みなかみは本日1200ひとにまるまるに指揮本部を出航する、作業班は迅速に作業を終了せよ

この放送で食料など本格的な積み込みをしている作業班の気がいっつもより引き締まったようだ。ふだんから引き締まってるからそのうちぎれるかもしれない。

また、船内ではハルカが業務連絡をしている。

「本艦は本日1200をもってポートエリザベスを出航する、各員迅速に作業を終了せよ」

たぶん今整備班がスティングー2のパーツやらなんやらを調達中だ。

「いよいよ本格的な戦闘ですか」

「なんだ？ミツキは弱腰か？」

「少佐ほどではないです」

「……………どおせ俺は臆病だよ、弱虫だよ」

「ルリは格闘がとくいなわけね？」

「はい、自分でもそう思います」

ルリとセツナが基地のシュミレーターを使用していた。

シュミレーターは急造の前線基地以外ブラスター配備先の基地にはどこにもある。このシュミレーターのシステムはいわばオンラインゲームのようになっており、連合軍パイロット同士ならどこでもだれとでも訓練ができる。だからといってゲーム感覚でやるパイロットは少ない。自分の生死に関わる。

パイロットは一人一つずつカードを持っておりブラスターの起動キーと設定保存に使われている。

これがあれば仮に自機が使用不可でも他人の機体を自分の設定で乗り回せるのだ。この際には、自分の過去の戦闘データにより最適化されている補助が使用不能になる。補助はある程度乗りこなす人間にはあまり関係ないが新米には少々キツイ。

これをシュミレーターでも使っている。

「じゃあさあ、あたしとコンビ組めるんじゃない？」

「私は大佐と少尉となんですけど」

「なにになに？あたしじゃ、…………ダメなの？」

少し大尉は悲しげな表情になった。

24 出発

本艦はこれより、出港準備に入る、本艦はこれより出港準備に入る

「スクリュー異常なし、発電区画正常、ハッチ密閉完了」

「送電コードを切り離します」

トモエ伍長はコンソールパネルのスイッチをいじった。船外で『みなかみ』から送電コードが外れる。この船は自力で発電できるため、少しばかり基地に電力を融通していたのだった。

200V家庭用電源としても使われたのではないだろうか。それ、ここで発電したんですよ。

「固定アーム、解除」

艦底を固定するアームが外れる。これは水の循環も行っているものだ。船外ハッチは閉められてそこにつながるトラップも外される。

「粒子生成量異常なし」

「司令部より出航許可、出航準備完了」

「よし！ 『みなかみ』、発進！」

艦長でもあつたりするヤマト大佐の掛け声により、『みなかみ』

は完全に基地からの出航体制を整えた。

「スクリュー始動」

コンソールからの指示によりスクリューが回転を始め『みなかみ』は前に進む。

「パイロットはミーティングルームにて待機」

ハルカがコンソールをいじり館内放送をかける。

「そういうのって普通先にすんじゃねえの？」

大佐は艦長用の席に腰かけながら言った。

「まあいいじゃないですか」

ハルカは悪びれる様子もなく、これが普通なんだというような返答をする。

「相変わらずアバウトな奴だなあ」

ヤマトは前を向き、目の前に広がるきらめく海を見ながら言った。
「では、本艦は基地から離れたところで離水、ルワンダ地方へ舵を取る」

離水する際、周りの水は押しのけられるように周りに広がっていく。基地にいるときにすると、海上施設が潮をかぶる可能性がある。だから一旦基地より離れてから離水するのだ。

「しつかしまあ、大変だねえ。今度はルワンダですかあ」

大尉は頭の後ろで手を組み、そのまま背もたれに体を預けた。

「またやる気のない声出しやがって。いつも120パーセントなんじゃねえのか？」

これではおよそ49パーセントといったところか。

「なんかあんた知らないうちに偉くなったわね」

「すみませんでした」

少佐く大尉「准尉という順に強い。

「分かればいいのよ分かれば」

（くそっ！　どこの女王だお前）

少佐は謝りながら苦虫を噛み潰したような表情になる。よほど屈辱的なのだろう。

「まあまあ、セツナ大尉、少しは少佐のことも」

（ルリ准尉にそういわれると、余計辛いんだが……）

「ルリも、えらくなつたわねえ」

『も』と『ねえ』がやたらと強調されている。少佐く准尉　大尉が正しいのだろうか。

（どこの悪魔だ、お前。准尉が怯えてるじゃないか）

ルリはなみだ目になり、黙り込んでしまった。

「恐ろしい世界だ」

「ん？　ミツキ君も、えらくなつたみたいね」

珍しくミツキの呟きが拾われた。

（なんかミツキにもとばっちりが……。俺がちゃんとしていればこんなことには……）

少佐<少尉〃准尉 大尉というのも成り立つかもしれない。

少佐自身も罪悪感のようなものを感じていた。自分の失態で部下にもその影響が及ぼされているなんて。上官として、先輩として、ハジメは自分が情けなかった。

「なんか少佐、深刻そうな顔してますね」

ルリが少佐の身を案じていた。いつかうつ病になって自殺を図るかもしれない。

「確かに。……やっぱり長年の心労がたたって」

ミツキは知らず知らずのうちに、少佐を少しずつではあるが苦しめている。

（それでこそこの話のつもりか？ 丸聞こえなんだよ。それにそんな長く苦労した覚えは……）

「長年ってまだたった4年でしょ？ そんな風にならないから」

大尉が、ミツキの意見を思い切り否定する。

「たったってなんだ！ 『たった』って！ そしたらお前たった2年だろう？」

「それもそうね」

珍しくセツナが少佐の意見にうなずく。

「あたしはまだうら若き乙女だもの。いまからそんな辛気臭い顔になんかなりたくないわ」

（では悪いことは言いません。すぐ軍をやめなさい）

これ言ったら大尉は怒るだろう。確実である。危ない橋は渡らないほうがいい。

「いつかなるんだよ、軍人てのはさ」

「えゝ！？ そんなふうになるのやゝだゝ！」

どっかにいそうな駄々っ子のような口調で少佐に文句を言う。
「俺に言われたって困る」

そんなことは『生物学研究所』なり、『あなたの肌をなんたらする薬品たちの宝石箱を売る会社』なりに聞いてもらいたい。精神的ストレスによるなんちゃらも取り扱っているだろう。

「なんとかならなくて、動き出した？」

急に振動を感じた大尉は少佐たちに問いかける。

揺れたかよく分からない地震が来ると『今地震あったよね？』と聞く心理からだろう。

「動いてますよ、それもさっきから」

ルリが少々投げやりに言った。

「なにその態度！？　いくらルリだからってそういうの容赦しないよ？」

容赦しないと何が起こるか分かったもんじゃない。ルリは一人で無言の抵抗をする。目は口ほどにものを言うらしい。

「なんでそんなにキレルンダオマエ。ルリ准尉がティラノに睨まれたオヴィラプトルみたいになってるじゃないか」

「なんか片言になった？　キモいよ？」

軽く突き刺さる言葉を容赦なく放つ。何があっても少佐は容赦なくやられるわけだ。

「少佐、オヴィラプトルは確かモンゴルから発掘されてますが、ティラノは北アメリカです」

『なぜこのような知識まで持ち合わせているのだ？』という疑問を全員が持つ。

「いや、あのアニメではティラノがオヴィラプトルをガブリとだな」
手で恐竜の頭じみた形を作って右の手首にガブリと行く。

「ではたぶん捏造です」

「セツナ大尉、いきなり私の真似をされても困ります」

『二人は姉妹だろう？』とミツキとハジメは思った。年下が年上の真似をする、双方真似しあう場面はいたるところで見受けられる。
「いーや、あたしはルリの真似をしたんじゃないって発展させたんだよ」

「ただ語尾のほうで笑顔使うようになっただけじゃないですか」

「うるさい、つべこべ言うなミツキ」

「でも本当のことだし」

「あんたも黙れ！」

こころなしか、少佐の方がひどい扱いをされている気がする。

西暦2230年代。すでに化石燃料とよばれるものの大半は枯渇、一部も枯渇間際で代替エネルギーを普及させつつある。

枯渇した物の代表的なものは石炭、原油、ウランなどの核燃料だ。代替エネルギーは太陽光、波力、風力、地力、潮力など何世紀か前から研究されてきた自然エネルギーともう一つ、アトミニウム。

これらを用いて現在ではほぼ電力に頼った社会が成り立っている。自動車は一部の高級車を除きバッテリーを使用したモーター駆動、鉄道は全区間電化、飛行機はジェット機からプロペラ機に移行している。

現在空中戦は滅多まれに見ないが、見たとするなら数世紀前の戦闘に見えるだろう。

制空権がどのようになっていた時代が終わり、空軍は再び陸軍のおまけと捉えられるようになった。

『みなかみ』の横を一機の輸送機が通り過ぎた。連合のものだ。一般的な小型輸送機でブラスターはパーツに分解しなければ載せられない。

その輸送機が煙を挙げながら通り過ぎた。

「なにがあつたんだあれ？」

「まもなく戦闘区域に入ります。撤退してきたのでしょーうね」

業務的言動に徹するハル力は冷たい声しか出さない。初戦闘の際の流れに乗せられないようにするためだろうか。

「いつにもまして無愛想だなお前」

「生まれつきですがなにか」

ハルカの冷たい声に冷たい何かを感じる。

「失礼しました、何でもございません」

「そうですか」

業務的過ぎてやりとりがぎこちない。なんか「お前死ぬよ？」的
オーラを放ってるような気がする。

どちらにしろいつものハルカではなかった。

プロペラ機主流の現代において『みなかみ』より早い航空機はあまりいない。速度重視で大気を電磁加速させるタイプのエンジン使った迎撃機があるが所詮バッテリーで動かす物。最高速度を何分も保ってられない。

その点『みなかみ』は自分で燃料作ってるような物だから一日飛び続けても電気さえ作っていられば飛び続けられる。

「おお！ 見えた！」

艦橋からは炎が見える。戦場の火だ。

「大佐、はしゃがないでください」

「まだはしゃいでないぞ」

これは大佐のミスだ。最近どうも調子が狂う。

「どちらにしろ出なきゃいけないんだ、もう出とくか」

「では司令部のほうに通達しておきます」

「頼んだ！」

「こちら特務第一小隊、司令部応答願います」

こちらルワンダ司令部、特務隊、ブラスターの出撃を要請する

「了解」

「なんかすさまじく短いな」

「出撃要請だけですからね」

「じゃあ俺も出ときますか！」

「対空戦の指揮はどうします？」

「オートで十分だろ、どーせ新型機プロペラなんだから」

「もう戦闘圏内ですね」

ルリは画面にだした外の映像を見て言った。

ここ出撃前に集まるための部屋で目の前の大きな窓から格納庫の様子が見える。

「いつ出撃って言われてもおかしくはねえな」

ソファに座る少佐はいつもと違ってベテランパイロットじみた印象を与える。

「だるいなあ」

120パーセントはどこ吹く風。

「戦闘か……」

ミツキにとってこの実戦は初の生きるか死ぬかの戦いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4520s/>

特別任務遂行隊 ～世界に誇れる死神部隊～

2011年6月16日21時40分発行